
悪魔と神の子

Leone

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と神の子

【Nコード】

N4650T

【作者名】

Leone

【あらすじ】

この物語の主人公マシューは、どこにでもいる高校生……だと思っていたが、本当は悪魔の血を受け継いでいる悪魔だった。そして神の血も……。マシューの力は、ある日突然目覚める。悪魔として生きることを決めたマシューは、あらゆる闘いに身を投じていくのだが……。というわけで第三章、始めました。

悪魔 ルシファー（前書き）

初投稿なので、暖かい目で見てくださいとうれしいです。

悪魔 ルシファー

悪魔

それは、この世のものではない別の世界にいる知能の高い生物である。そして、力も恐ろしく強い。数も多い。

神

力もあり、知能も高いが、数は少ない。

これはある高校生の物語だ。

俺の名前はマシュー・ボルス。どこにでもいる普通の高校一年生だ。

髪の色は赤、目の色も赤だ。勉強はあまりできない。運動はかなりできる方だ。

入学式の次の日、俺は帰り道で妙な奴を見た。仮面をつけたあやしい男。

「やつと、見いつけた」

俺は怖くてそこから逃げ出した。だが、追いつかれてしまった。

「マシュー、死ね」

（なんで俺の名前を……）

俺は死んだかと思ったが、何者かによって助けられた。

「貴様は……ルシファー」

「生きていたのか。頑丈だな」

「うるせえ！」

長い闘いが繰り広げられるかと思ったが実際はルシファアの刀のひと振りで決着がついた。

そして、ルシファアという男がこっちに近づいて来た。

「マシュー様、参りましょう。私たちの世界へ」

「え！？ どういうこと？」

「私は悪魔のルシファアというマシュー様の手下です」

「……」

「とりあえずここは危険ですから、私たちの世界へ行きましょう」

俺は何が何だかわからないままだが、その世界へ行くことにした。

悪魔の世界

悪魔の世界に行く途中、ルシファーが言った。

「何があっても私から離れないでください。悪魔は血に飢えていますから」

「わかった」

正直怖くて怖くて仕方がなかった。だけど、自分が何者なのかを知りたいという好奇心もあった。

「着きましたよ。ここがアザード（悪魔の世界）です」

アザードは白銀の砂漠に以上に大きい城がある世界だった。

「早く城の中に入りましょう。外はたくさん悪魔がうろついていますから」

そして、城の中に入ると、不思議とうれしい感じがした。

「おお！ ルシファー、我が主マシュー様をつれてきたのか」

「ああ、ロドス。間違はなくマシュー様だ」

ロドスは空中に浮いていて、見た目は肌は黒く目の色は真っ赤だ。髪は海賊のような帽子をかぶっているからわからない。

「悪魔の力には目覚めたのか？」

「まだみたいだ」

「そうなのか……」

「悪魔の力ってどういうこと？」

俺は不思議に思った。

「マシュー様は悪魔の血を継いでいます」

ルシファーが言った。

「それもただの悪魔じゃない。神の血を半分継いでいる悪魔だ」

ロドスが言った。

「本当なのか？」

俺は耳を疑った。

「本当だ」

ルシファアが言った。

「証拠がみたいか？」

ロドスが言った。

「ああ、見たい」

「じゃあ、俺と一緒にいこう」

ルシファアがそう言うのと、気がついたら城の外に俺達はいた。

「そうだな、あの小さいゴブリンと闘ってみるか」

「俺が？」

「そうですよ。マシユ様」

「俺は死なないのか？」

「まず死ぬことはないですね。準備はいいですか？」

「いいだろう。やってやるよ」

ルシファアが砂をゴブリンに投げた。すると、ゴブリンは怒って突進してきた。

とりあえず俺はそれをかわして、蹴りをいれた。だが、ゴブリンはそれを簡単に受け止めた。

そして、俺はゴブリンに投げ飛ばされた。その後、ゴブリンは大きな口を開けて俺を食おうとした。

「くそつたれがー！！」

俺は必死に叫んだ。すると、爆発と同時に俺の体から紫の炎が燃え盛った。ゴブリンはもう灰になっている。

「これは……」

「それが悪魔の力だ」

突然、ルシファアの刀のことを思い出した。

「俺にも刀はあるのか？」

「はい。これがあなたの刀です」

紫色の刀。少し刀を抜いてみると、力が湧き上がるような感じがした。

「とりあえず、力を抑えてください」

「どうやって」

「そう念じればできます」

やってみると、炎がだんだん消えていった。

「さあ、参りましょう。私たち悪魔と一緒に。あなたが全ての悪魔の上に立つのです」

俺はこうして悪魔になった。

悪魔とバンパイア

悪魔になった俺はとりあえず学校で生活することになった。

俺にはシオンという金髪で、青い瞳の友達がいる。シオンは俺とは真逆で、勉強はできるが運動は苦手だ。

ある日、体力測定五十メートル走で、シオンは八秒台で俺は五秒ちょうどだった。

「五秒！？ 早すぎだろ」

「俺もちよつとびつくりしてる」

おそらく悪魔の血が関係しているのだろう。だから、これからは気をつけようと俺は思った。だが、そう簡単に気をつけられるものではなかった。

握力では、なんと七十九キログラムだった。

次の日は、サッカーだった。これは、ものすごく気をつけたので、何とかかった。

そして、シオンと一緒に帰っている途中、信じられないものを見た。

それは、俺のクラスの隣に座っている女子を知らない女性が血を吸っているところだった。白く少し長めの髪、赤い瞳の女性だ。

「お、おい……これ……」

シオンがおびえていた。

「そこにいるのは誰だ？」

「あんたこそ何者だ？」

「私は悪魔のバンパイアだ」

「バンパイア？」

「そうだ。だが、そんなことを聞いてどうする？ お前は人間だろう？」

「……」

「マシュー……」

「友達が呼んでるぞ？」

「シオン、お前は逃げる」

「えー？ そんなことできるわけないだろ」

「二人とも死ぬよりましだろ。それにお前は逃げ足がおそいからな」

「そんな……」

「そいつの言う通りだと思うぞ、私は」

「いいから、早く行け！」

「……わかった」

そして、シオンは走って逃げ見えなくなった。

「それでは、鬼ごっこでも始めるか？」

「……ひとつ答えていないことがあったな。俺は悪魔だ」

「ほう……。では私と闘うか？」

「いや、無駄な闘いはしない」

「無駄か……。では友達を殺したらどうなる？」

「貴様……」

「思ったとおりの反応だな。実に面白い」

「……」

「変身しろ。そのままじゃあ面白くない」

「……いいだろう。俺の力見せてやる」

俺は刀を出し、力を解放した。バンパイアも力を（本気だと思う）解放した。最初は勝てる自身なんて全然なかったけど、奴の蹴りかわして自身が出た。

「やるじゃあないか。マシユーよ」

「……」

今度は俺が奴に刀で切りかかった。すると、奴は少しびっくりしたためかわせずに腕を深く切られた。

「ちっ！ 調子に乗るなよ小僧！」

奴は手をまっすぐ伸ばして俺の腹に刺そうとしてきたが、ぎりぎりでかわしたため横腹をすこし切った。そして、俺が切りかかると俺の刀をかわさずに余裕でつかみ、顔に蹴りをもろにくらった。

「お前の負けだ、マシュー。私のことを秘密にするなら見逃してやる」

「……わかった」

「さらばだ、マシュー。またどこかで闘うことになるう。……そう
だ、私の名前を言っていないかったな。私の名前はサーシャだ」

そう言い残すとサーシャは去って行った。

「……畜生」

俺は家に帰った後悔しくて泣いていた。

戦闘訓練

俺はあの日、バンパイアとの闘いに負けた後ルシファーと会った。
「ひどい傷ですね。誰にやられたんですか？」

「……言えない」

「そうですか……」

「なあ、俺を鍛えてくれないか？」

「私がですか？」

「そうだ」

「では、まずアザードへ行きましょう。そこで傷の手当をした後で鍛えましょう」

「わかった」

こうして俺は、再びアザードへ行った。そして、傷の手当をした。
「まず、鍛えると言えば反射神経ですね。ですから、私の刀をよけてみてください」

（簡単だな……）

そう思ったとき、ルシファーが既に目の前にいた。俺は反応できず、切られてしまった。

「集中してください。危ないですから」

「わかってるよ」

次の攻撃は何かかわせたが、そのあとの蹴りをくらってしまっ
た。

「難しいでしょうけど、がんばってください」

「ああ」

その後も三時間くらいかわし続けた。

「そろそろ休憩にしましょう」

「やっとか……」

三十分休憩した後、次の訓練が始まった。

「次は、悪魔の姿に変身してもらいます」

「そんなのもうできてるじゃねえか」

俺は刀を抜いて紫の炎を燃え上がらせた。

「確かに、悪魔の姿ではありますが、さらにその上があるのです」
「なにっ！」

「悪魔の中には常時悪魔の姿でいるものも多くいますが、逆に人間の姿でいて闘うときは悪魔にもどるものもいます。私もその一人です。さらに、数はそう多くいませんが、人間のような姿のままの悪魔もいます」

「そうだったのか」

「とりあえず、変身するには変身した相手と闘うのが一番いい。ですから、私が変身しますけど、加減が難しいので集中してくださいね」

「わかった」

すると、ルシファアの周りが爆発して、ルシファアが現れた。

その姿は、頭の横あたりから角が上に向って伸びていて、背中から大きい黒い羽根があった。目は中心から黒、黄色、黒となっている。手足は黒い毛で覆われていて、爪が鋭く長い。

「ぼうつとしないでください。本当に危ないですから」

俺はいつ攻撃してきてもいいように身構えた。だが、一瞬で蹴飛ばされた。何が起きているのか全くわからないくらいのスピードでやられた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だ」

「なら、いいですけど。続けられますか？」

「もちろん」

またやられるかと思った瞬間、声がした。

「弱い、弱すぎるぜ。あんたそれでも悪魔か？仕方ねえなあ、俺が代わってやるよ」

非常に大きい爆発と同時に俺は覚醒した。俺にも頭から角が出て（横に向かってだが）、黒い翼と黒い尻尾がはえた。爪も鋭くなっ

た。

「よお、ルシファー」

「おお、覚醒しましたか」

「てめえのおかげで目覚めることができた。サンキューな」

「ありがとうございます」

「ああ……」

気がついたら俺はルシファーを切っていた。

「なぜ……ですか」

「てめえの役目は終わりだ」

そして、俺は気が遠くなって倒れた。

伝説の魔龍

気がついたら俺は、アザードの城の中にいた。

「目が覚めましたか、マシュー様」

ルシファーが言った。

「俺は……どうしてここに？」

「私がマシュー様に切られた後、あなたも気を失って……。そしてロドスがそれに気づいたのでここまで連れてきたそうです」

「そうか……すまなかった。切るつもりは毛頭なかったんだが……」

「自分の中の悪魔があらわれて制御できなくなるのは、たまにあることですから」

「そういうことだったのか……」

「まあ、悪魔の治癒能力は普通じゃないですから心配は御無用です」

「すまない……」

「そういえば、伝説の魔龍の話聞いたことはありますか？」

「いや……ない」

「伝説の魔龍というのは、大昔強大な力をもった魔将がいたんです。魔将というのは悪魔の長のことだ。」

「その魔将は他の弱い魔将たちをも従えていました。そして、遂には獣の悪魔でさえも従えようとしました。ただし、伝説の魔龍だけは反抗していました。魔龍は自分の龍の団体を結成し、それを魔龍組と言った。今もその魔龍組と魔将との闘いは続いているそうです」

「なぜ、そんな話をする？」

「実はこの魔龍組をうまく説得して、魔将を討とうとしているのですが、なかなか魔龍組が見つからなくて……」

「俺にも協力してくれと言うのか？」

「よろしければやっていただきたいです」

「その魔将はどのくらい強い？」

「はつきりとは……能力がわかりませんから」

「能力？」

「悪魔は固有の能力をそれぞれ持っています。もちろんマシユー様も炎を扱う能力を持っています。なぜ、紫色なのかは全く謎ですが

……」

「へえ、そうなんだ」

「それで、協力していただけますか？」

「わかった、協力する」

「ありがとうございます」

こうして、俺は魔龍組を探すことになった。だが、城を出てすぐに龍が現れた。

「マシユーさんですね、魔龍組の者ですが、我々と一緒に魔将と闘っていただけませんか？」

龍が言った。

「こつちもお前らを探しに行くところだったが、手間がはぶけてよかった」

「ほんとうですか！？」

「うそじゃねえよ」

「では、私の背中に乗ってください。あ、申し遅れました。私の名前はディオスといいます。宜しくお願いします」

「宜しく、マシユー・ボルスだ」

「私はルシファーだ、宜しく」

「我が輩はロドスと申す、宜しく」

「いつからそこにいたんだ！？ロドス」

「我が輩の能力は言ってなかったですね。我が輩の能力は闇にまぎれて敵を背後から攻撃することです」

「すげえ」

「マシユー様の方がおそらくは抜けて我が輩よりも強いですよ」

「そうなのか？」

「あなたは前にも言ったように悪魔と神の子ですから」

俺は3人の仲間とともに魔将を討つために魔龍組のところへ行っ

た。まだ魔将のことを何1つ知らずに……。

激闘！！ マシューVS謎の魔将

俺はディオスとルシファー、ロドスとともに魔龍組のところへ行き、到着した。

「ようこそ、魔龍組へ」

「言っとくが、俺はあんたらの手下にはならないぞ」

「我々もだ」

「???」もちろんだ。だからこそ、あんたたちを選んだ」

「その龍はだれだ？ディオス」

「この方は、我々の長、サラム・ディストロです」

「とりあえずよろしくな、サラムさんよ」

「こちらこそ」

「すぐに魔将を討ちに行くのか？」

「ああ、もう準備は整えておるんで、今すぐに行けるぞ」

「じゃあ、魔将退治に出発か」

再びディオスの背中に乗り、魔将のもとへ行った。

「でえ城だな」

俺は言った。

「まずは、門番から片付けるか」

サラムが言った。

「それが得策だな」

俺は二人門番がいるから、右の方を、サラムは左の方の門番に襲いかかった。

俺の方は難なく片付いた。しかし、サラムは相手に気付かれて少し手間取った。

「よし、どんどんこい」

俺は自信がわいた。

「その調子がどこまでもつか楽しみだ」

「サラム、お前どっちの味方だよ」

「私は普通鬪いは恐ろしいものだと思うがな」

「ちっ、血の気が多くてすいませんでした!!」

サラムは笑って、俺も笑ってしまった。

こうして順調に敵を片付けていった。

???「ようやくここまで来たか、少し思ったよりも時間がかかったみたいだが、まあ褒めてやるとするか」

「あんたが魔将さんかい？」

「いかにも、だが、君はバカだ。君がここに来たということは私の能力は知らないのだろう？」

確かに俺は、こいつの能力を知らない。だからといって、俺に勝ち目が全くないわけではないので、俺は強気でこう言った。

「ああ、知らないさ。でもな、俺はあんたを絶対に倒す!」

「なぜだ？ この私を倒す理由などお前には欠片もないはずだ」

言われてみればそうだった。俺はこいつを倒す理由などない。かといって、こいつを好きにさせとくと危ないだろうし、魔龍組にもなんて言ったらいいかわからない。

「それでも俺はあんたを倒す」

「ふんっ、小僧が凶に乗ってると痛い目に遭うぞ!」

俺は正直本気で闘うか迷っていた。そこで、ルシファーがこう言った。

「相手の能力がわからない以上は我々に任せてください」

「そうか……わかった」

ルシファーが魔将にまずは一人で挑んだ。

「マシュー様の手下のルシファーだ」

「そういえば、私はまだ名乗っていなかったな。我が名はアルマだ」
ルシファーとアルマが剣を交えた時、俺の中の炎が勝手に燃え上がった。

「なにっ!!」

「我が能力は火を操ること。貴様はすでに私の駒だ」

「貴様あ!! ぐっ……」

「マシユー様！」

「おい、ルシファー。早くそいつを倒すぞ」

「ロドス……わかった」

ルシファーは悪魔の姿に戻り、ロドスは手のひらの上に青い光の球を作りアルマに向かって発射した。

だが、当たっても殆ど無傷だった。

「小賢しい真似を。まあ、貴様らの主は我が手に落ちたも同然。貴様らに勝ち目はない」

俺は奴に操られ、ルシファーとロドスに襲いかかった。そして、やはりルシファーとロドスは抵抗しようにもできずに俺に斬られた。
「マシユー……様……」

俺は自分のせいでこうなったと思い、アルマに対する怒りや憎悪といったものがふつふつと湧き上がってきた。

「許さねえぞ、貴様だけは！」

俺は奴を睨んだ。すると、不思議なことに奴の支配から逃れられた。

何でだろうと思ったその時、心の中で声がした。

（お前には炎の力だけあるわけではない。他にも氷などが扱える。相対する炎の力があるのにも関わらず……。だからこそお前の炎はその赤と氷の青の混ざった紫色の炎を放つのだ）

不思議には思ったが、今はその言葉を信じるしかなかった。

俺はアルマに斬りかかった。あまりのスピードに奴はついてこれずに、思いつきり俺の剣をくらった。その時だった。あの言葉の意味が目の前に現れた。奴の傷口が氷で覆われていた。

「そうか、なぜ完全に操れないのだと思ったが、お前は氷の力も持っていたのか」

「俺も今まで全然気付かなかった……」

「そうかい……。おい、小僧……一本……取られた……ぜ」

そう言い残すと奴は塵になって消えた。俺は闘いに勝ったのだ。

悪魔の恋

魔将との闘いから一ヶ月が経った。

俺は学校に少しの間だけ再び通っていた。教室に入ると、一つ席が空いていた。俺の隣だ。

ちよつと休んでいたから周りからはいろいろと心配されていた。

三時間目の歴史の授業。俺は悪魔の力のおかげで耳がすごくいい。だから、隣の授業も聞こえてくる。もちろん、集中なんてできない。この授業は何となく聞いていたが、始まって十分後、女の悲鳴が聞こえた。

俺はなぜかそいつを助けたいと思っていた。だが、授業中だ。急に立ってなんて言い訳しよう。

俺はとりあえずそんなことは頭から振り払って、駆けだしていた。

「おい、どこいくんだ？」

俺は走りながらいい考えを思いついた。

「トイレっす」

「たく……。まあ、いいか。授業再開するぞ」

俺はスピードに気を付けつつ、早くそいつのところへ行った。

その女は四人の男の不良どもに金を取られそうになっていた。紫の短めの髪、青の瞳、少し白い肌、そして結構美人であった。恋に堕ちることはなかったが……。

「おい、おめえら。そいつに何してんだ！？」

「何って？ 見りゃわかるだろ、バーカ」

くそっ、どうすればいいんだ。俺はそう思った。ここでは簡単に力を使つてはいけないから、非常に困った。見て見ぬふりするわけにはいかないし……。

その女は俺を悲しそうな目で見た。俺はこいつには何かがあると、根拠はないがそう思った。

「今度返すからさあ、三千円くらいやすいだろ？ 俺ら飯持ってな

いんだよ。たのむから、な」

「さつさと失せる。カスどもが」

俺は素手で挑もうとした。

「はあ？ 何言ってるんだこいつは。ま、そう言っんならてめえから金を取ってやらあ！！」

四対一。普通の人間ならまず勝てないだろう。だが、俺は悪魔の力を解放せずとも、少しは闘えた。

まず一人目は、右パンチで倒した。二人目は、相手の蹴りをかわし、こっちの蹴りで倒した。三人目と四人目は同時に来たから、片方のパンチをくらってしまった。だが、それに怯まず二人とも蹴りで倒した。

「やべえ、こいつ格闘家かよ。逃げるぞ」

そう言い残し、不良どもは金を置いて去った。

「ほらよ、お前の金だ」

「……ありがとう」

「じゃあな、俺、授業に戻んねえと」

「あの……、君の名前は？」

「……マシユ」

「え！？ 君あたしの隣の人？」

「隣？」

「ええ、あたしは一年二組のシオーネよ。聞き覚えあるでしょ？」

「俺、しばらく休んでたから……」

「……何で？」

「それは……言えない」

「ふうん。でも、あんたマシユ・ボルスでしょ。そうなら間違いないと思うよ」

「確かに俺はマシユ・ボルスだけど……。何であんたは授業に出てないんだ？」

「……あたしは……ただ単に勉強ができないから、サボってるだけ。そこで、たまたまあいつらが来て、あんたが助けてくれたってこと」

「そうか……」

「それでさ……、あんた、あたしと付き合ってくれないか？」

「は！？」

「あたしさ、あんたのそのやさしさと強さに惚れたんだ。だから、あたしと付き合ってくれないか？」

「俺でいいのか？」

「ああ」

予想外の出来事に俺はかなり長い間硬直した感じがした。

「まあ、フリーだし。付き合ってやるか」

だが、その出来事は俺にとってうれしいうちなちよつと迷惑なようなそんなことを感じた。

なぜなら、俺は悪魔だから……。

新しい仲間

シオーネと付き合い始めて一週間。

シオーネは俺が何とか説得したおかげで、今日も授業を受けている。

「なあシオーネ、ここ分かるか？」

「わからない……」

「俺もちよつとここは悩んでるんだよな」

こんな平凡な日々はいつまで続くのだろうか、できれば少しでも長くと思いつながらシオーネと話をしていた。

俺は悪魔だがシオーネを巻き込むことはできないから、できるだけのことはしようと思っているが、実を言うとかかなり自信がない。

なぜなら、俺は一度だけシオンという友達を巻き込んでいるからだ。うまく言いくるめたが……。だから、どんなに気になろうが俺はやぶをつついたりはいしないようにした。

ここしばらくは、ルシファーたちにも会っていない。しばらく羽目を外すとあいつらは言っていたからだ。もちろんその辺にいそうな悪魔にも会ってはいない。

「はあ………」

俺は深くため息をついた。

「どうした？マシユー」

「いや……何でもないよ！」

「うーん、何か変だと思っただけ……」

「そんなことないよ！」

ちよつと感付かれてしまった。そう思ったが、

「まあ、何でもないって言うならいいか」

危ない危ない、そう思った。ちゃんと気を引き締めなければ。

だが、このとき既に俺たちは悪魔に狙われていた。もし、気づいていれば、俺の人生は変わっていたかもしれない。

この日の帰り、俺はいつものようにシオーネと一緒に帰っていた。
「少し暗くなってきたな」

「そうだね……。だけどマシューが居れば心配はいらない」

「ばか……。そんなことあるわけがないだろ」

俺は恥ずかしくて赤面していた。

その直後、そんな思いも吹き飛んでしまった。目の前に悪魔がいたからだ。その悪魔は巨大で人の形をしているが皮膚の色は茶色で、目の色は真っ赤だった。

「何……。これ……。!?」

くそつ、と悪態を思わずついていた。そんな中で、今とるべき最良の方法を考えた。それはもちろんシオーネを逃がした後で、この悪魔を早めに倒すことだ。

「シオーネ、お前は逃げるんだ。俺には構うな！」

「え!? これが何か分かってるの? 化け物なのに何でそんなことが言えるの?」

「いいから、俺を怒らせるな!!」

「……マシューはどうするの?」

「俺はこいつを釣って、その後隠れる」

「ばかね、本当に」

「そうだな、俺はばかだ」

もちろん隠れるわけがない。そんなことをすれば、この悪魔が何をするか言わずとも分かる。シオーネや他の人間を殺すだろう。つまり、俺は闘うしかないのだ。

そのことをシオーネが気付いているかは定かではないが、もし気づいているなら俺は言い逃れはできない。

だが、シオーネは何も言わずにこの場から逃げようとした。だが、それを悪魔は見逃さなかった。

恐ろしく巨大な拳でシオーネを殴ったのだった。言うまでもないが人間の体は悪魔に比べ、ひどく脆い。だから、この一撃でシオーネは死にそうになった。

俺は目の前の光景が理解できなくてそのまま立ち尽くしてしまっていた。でも、シオーネを助けなければという強い思いのおかげで行動することができた。

「うおおお！！」

俺は叫びながら悪魔に向かって突っ込んだ。その悪魔は体こそでかいが、そこまで強くないらしく、俺を見たとき怯えていた。いや、これは奴の畏かもしれない。油断は禁物。

俺は容赦なしに斬りかかった。すると、悪魔は真つ二つに斬れた。どうやら本当に強くなかったらしい。

とりあえず悪魔を倒したので、シオーネのところへ急いで駆け付けた。

「シオーネ……」

このとき俺は少し涙声になっていたのに気がついた。

「泣か……ないで、マシュー。私はもう大……丈夫だ……から」

途切れ途切れにそう言った。俺は涙を抑えきれなかった。こんな思いをしたのは初めてだ。そのとき、天の声のようなのが聞こえた。

「その女を助けたいならば、血を注げよ」

俺は少し信じ難かったが、それ以外に方法がなさそうなのでやろうとした。

「マシュー……、何で……自分自身に……傷を……」

「あまり喋るな」

俺はシオーネに血を注いだ。いや、注いだというと語弊があるかもしれない。正確には、血を飲ませた。

また天の声だ。

「そうすることによって、そいつはお前と同じ悪魔になる」

安易に予測できたことだが、そう言われると結構胸に深く突き刺さる。

「マシュー、私、何か寒いような気がする」

この言葉は結構すらすらと言っていた。助かったんだと思った。だが、逆に人間としては死んだとも思った。

「寒い？ わかった」

とりあえず服を脱ぎ、軽く上にのせた。

そして、これくらいでいいかなと思ったところで血を飲ませるのをやめた。

しばらくすると、シオーネの傷口が氷で塞がり、周りに流れていた血が凍り始めた。

「何だ！？ これは」

俺はそう言った直後、ひょっとして俺の氷の力を受け取ったのかと思った。まるで雪女のように。

「だいぶ気分が良くなった。もう大丈夫だと思うけど、これはどういうこと？」

恐れていたことを問われた。もう引き下がれない。俺は悪魔だということや他の仲間たちのことなど、全てをシオーネに話した。

「つまり、もう元には戻れないってことね。わかった、私はマッシュに惚れてるんだから一緒にについていってあげる」

こうして、俺の恋人であるシオーネが仲間に加わった。これからバラ色の人生が始まる、そう俺は思った。

契約者と大魔王フィアレス

ここは悪魔の世界アザード。そして、ある日とある噂が流れていた。

「おい、最近ある契約者が暴れまわっているのを知っているか？」
「契約者って何だっけ？」

「そこからかよ、おい。契約者っていうのはだな、悪魔又は神と契約をし、力を手に入れんとする人間どものことよ」

「で、その契約者が暴れまわっているから何だっけ言うんだよ？」

「そいつはな、力がでかすぎて契約した悪魔も殺して暴走してんだとよ。全く、怖くてたままないぜ」

「俺よりつええのかな？ そいつ」

「当たり前だろ。俺も聞いた話だけど、強い魔将がたくさんやられてるってよ。もちろんたった一人で殺しまくってるって話だ」

「こういう噂話を最近よく聞く。マシューはこいつとやり合ってみたいなどとよく言ってくる。それも全然冗談に聞こえない。本当に困った悪魔の彼氏だ。」

私の名はシオーネ。マシューの恋人であり、そして私はマシューの血を受け継いで氷の力を持った悪魔。

個人的には、まだ慣れていないがその力はルシファーやロドスたちよりも上だと思う。

マシューは最近かなり強くなり始めている。炎と氷の両方を使い分けているから相手の能力に対して弱点をつきやすいというのがマシューの強みだ。

ひょっとするとマシューならこの噂の契約者に勝てるかもしれない。でも、このとき私はもう一つ恐ろしい存在があることを知らなかった。

そして、契約者の居場所をつかんだ。もちろんマシューは早速契約者のところへ行くこうと言い出した。だが、それをルシファーが止めた。

「マシュー様、それはなりません。相手は噂によると十の大魔王に匹敵する強さを持っていると聞きます」

「何だよ、十の大魔王って？」

ここでロドスが説明した。

「十の大魔王は、大地、天、炎、水、氷、死、生、闇、光、雷というそれぞれの属性の頂点に立つ猛者のことだ」

「炎って俺のことか？」

「違う、炎の王はマシュー様の実の弟、ファイアレス・ボルスだ」

「は？ 冗談だろ」

「冗談なんかではない。真実だ」

「おいおい、そんな弟がいるなんて聞いてないぞ」

「まだ、話すには早いと思っていたんだ。まあ、炎の王と聞かれたら答えるつもりだった」

意外な真実。俺はただ茫然としていた。まさか、弟がいてしかも

それが十の大魔王の一人だったとは……。

「そいつは俺の仲間にならないのか？」

「あいつは今はギルドを形成しているからな」

「ギルド？」

シオーネが質問した。

ここではルシファーが答えた。

「まず、我々のように小さい団体を組という。そして、そのだいた十倍ぐらいの大きさの団体をギルドと呼ぶ。ついでに言うておくと、さらにその五倍ぐらいの団体を闇のギルド、又は、暗黒の狩人とも言われている。まあ、これは実際大きすぎて一つか二つしかないがな。だが、それは意外と誰もが知っていると云うわけではない」

「へえ、そうなんだ」

俺はまだまだ知識が足りないなと感じた瞬間だった。

「まあ、とりあえずは会ってみようぜ。契約者に」

「マシュー、あんた何を聞いてたの。死ぬ気？」

「死なねえよ、シオーネ。俺はただそいつが仲間になるかなと思っただけだ」

「どれだけ図太いのよ。会ったら死ぬって言ってるの！！」

「そんなに怒らんでも……」

「私はマシューのことが心配なの」

シオーネが泣いていた。くそつ、俺は契約者と正直闘ってみたいがシオーネがこんなだとどうもやりづらい。本当に困った。

「我々がついていけば大丈夫だろう」

「ルシファー、我々って？」

「もちろん私とロドスだ」

ナイス、ルシファー。思わずそう心の中で叫んでいた。

だが、それではおそらく一対一では闘えないだろう。

「ルシファー、心配は無用だ。俺とシオーネだけで十分だ」

「何を……」

「いいから、んじゃ、行ってくるぜ」

俺はアザードから契約者のいる俺たちがいた世界へと向かった。

再び……

謎の契約者。俺は苦勞を重ねてやっとつかめた。絶対に逃しはしないと誓いながら、契約者のところへ向かっていた。

「マシュー、あとのくらいでたどり着くかな？」

「さあな、はつきりとは言えないがもう少しかかるかもしれないな」

「そう。あのさ、なんでマシューは契約者を仲間にしてみたいなんてことを言ったの？」

「そりゃあ、強い奴が敵にいるより仲間のほうがいいだろ。まあ、強い奴と闘ってはみたいけどな」

「でも、今回は絶対に闘わないでね。勝てそうにないから」

「それって、俺を侮辱してるのか？」

「違う、そう言う意味じゃなくて、心配してるだけ」

「……。まあ、俺もお前の立場なら同じこと言うかもな」

「マシュー……」

「……」 「おやおや、感動の場面だねえ、これは」

突然、上の方から声がした。しかも、この声は聞いたことがある。まさかと思いつつ、顔を上にあげるとあいつがいた。悪魔のバンパイア、サーシャ。

「お久しぶり、マシュー。また、ぼこぼこにしてあげようか？」

「くそつ、何でここにいるんだ」

最悪だ。このタイミングでこんなヤバい奴と出会ってしまうなんて。俺の目的は契約者なのに……。

「マシュー、この人は？」

「悪魔のバンパイアだ。この前闘ったときはあり得ないほど強かった。名はサーシャ」

「ついでに言っておくけど、私はバンパイアの中では間違いなくトップ5の中に含まれる」

「へえ、初耳だな」

「知ったところで意味はないぞ、マシユー」

「用は何だ？ 吸血鬼さんよ」

「たまたま会っただけだ。用はないが、暇だから遊んでもいいぞ」

「生憎だが、こっちは暇じゃないんでね。失礼させてもらえるかな？」

「つれないねえ、私に他の奴の血でも吸えつてのかい？ 例えば、契約者とか」

「何っ！！ お前あいつに勝てるのか？」

「冗談だよ、私が勝ったら天と地がひっくり返るよ。それぐらいあいつは強いからね」

「知り合いか？」

「いいや、見たことはあるから、だいたいの力量は知ってる」

「信じられない。サーシャが全く勝てる自身がないとは……。俺では言つまでもなくあの世行きだな。そう思った。」

「まさか、暇じゃないってのは、契約者のことかい？」

「あんたには関係ねえ」

「そんなことはない。もし、契約者なら私がここで全力で止めるつもりだからな」

「なぜだ？」

「もし、死んだら私の楽しみが一つ消えることになる。それが理由だ」

「俺と闘うのが楽しいってのか？」

「そうだ、お前はまだ未熟だが、故に先があるというものだ」

「まあ、それも一理あるな」

「それじゃあ、私と殺し合ってくれるのかな？」

「いいだろう、こいよ」

俺は炎を全開にした。が、サーシャは全く動かない。

「どうした？ 私があまりにも無防備だから攻撃できないのか？」

「……ふん、いい度胸だ」

俺はサーシャに剣を向け、突っ込んだ。だが、やはりサーシャは

ただものではなかった。なんと、俺の剣をかわした後すぐに、肩を掴まれ、投げられたのだった。

「くそっ、俺はお前なんかになんかに負けねえ」

「なら、もう一度来い」

俺は次はまた突っ込んだが、そこでフェイントをかけた。さすがにサーシャでもこれはかわせなかった。軽い傷だが、腕に切り傷を付けた。

「……」

「どうだ？ 参ったとか言うのか？」

「……よからう。実を言うと、この姿は私の本当の姿ではない。見たものは大抵死ぬが、まあお前なら楽しませてくれると信じよう」

「おい、まだ上があるってのかよ」

「そんな……」

シオーネも驚きを隠せないでいた。そして、サーシャが悪魔の真の姿に変身した。美しすぎるくらいの輝かしい赤色の翼、赤色の尻尾、そして鋭い爪。俺は確信した。サーシャは契約者と互角に近いぐらいの力を持っていると。ひよっとすると十の大魔王の一人かもしれない。

そんなことを思っていると、シオーネが俺の腕を掴んでこう言った。

「逃げなきゃ……」

さすがにこの状況では闘いたいなどとは言えなかった。それほどサーシャは化け物だったからだ。

「逃がさないさ、あんたたちが瀕死になるまではね」

サーシャは地面を強く蹴って、猛スピードで突っ込んできた。あまりの速さに俺たちは全くついていけなかった。

俺は顔に蹴りをくらって気を失ってしまった。

……どれくらい経っただろうか。全くわからなかったが、一つだけわかることがあった。それは……。

「シ……オー……ネ」

シオーネがサーシャに殺されそうになっていた。もう、シオーネは意識がないみたいだった。俺は再び意識がとんだ。だが、俺の体は動いているみたいだった。

「グルルルルオオオアアア!!」

「何!? マシユー、それは何だ」

「オオオオオオオオオ!!」

「言葉が通じんのか。仕方ない。このままでは私が危ないんでな、死んでもらうとす」

最後までは言えなかったみたいだ。俺がサーシャを蹴り飛ばしたからだ。

そして、俺はシオーネを助けて逃げたかったが、全く体が言うことをきかない。しかも、俺はあのとちょうど同じように悪魔の真の姿になった。

「ほう、それが貴様の真の姿か。それにしても全く気配が感じられないな」

「グルルルルル……」

「まあいい。その力なら私も力を久しぶりに試せる」

こうして、俺とサーシャの闘いが始まった。だが、このとき別の悪魔に狙われていたことを、俺はまだ知らなかった。たぶんサーシヤも……。

「???」 「まだまだ足りんな力が」

「???」 「シユド様、まだ依頼が残ってますが……」

シユド「いいじゃないか、少し見物していこう。悪魔と神の血縁者、どれくらい強いのか見ものだな」

「???」 「……」

近いうちにシユドという悪魔に遭ってしまったことで俺の人生が一転してしまうなんて……。このときは知る由もなかった。

謎を呼ぶ闘い

悪魔のバンパイア、サーシャ。俺はいまそいつと闘っている最中だ。

「中々なパワーじゃないか、マシユー」

「オオオオオオオオオ」

「ふん……」

サーシャは俺の顔面めがけて蹴りを入れてきた。だが、俺はそれを軽々と受け止めた。そして、サーシャの体を深く斬りつけた。

「うぐっ、理性を亡くした奴にここまでやられるとはな、恥だ」

サーシャは蹴りや殴りなど、いろいろな攻撃をしてきた。俺は何回かは避けたが、七、八回は避けられなかった。

「グオオオオオオオ」

「終わりだ!!」

サーシャの蹴りが俺の顔に当たった。俺は吹っ飛ばされたあと、少し意識を取り戻しかけていた。そのとき、本来の標的の契約者が現れた。髪の毛や服などがほとんど黒で、その分目立つ白の仮面の男。

「何を手加減しているのだ？ さっさとけりをつけろ」

「わかってるよ、それがあの人の命令なんだから」

「なら、早くしろ」

どういうことだ。こいつら組んでいたのか……。ひょっとしていままでの契約者のことはうそなのか？ そう思った。

「そうだ、一応殺す前におもしろいことを教えてやろう。まず、我が名はアレク。周りからは漆黒の契約者と呼ばれている。そして、我が主はシオンという」

馬鹿な、シオンだと。その名は俺の友達と一緒にの名前。まさか、こつちの道に入ったのか？

「教えてやれるのはこれくらいだな。で、俺が始末するか？ それ

とも、お前か？」

「私がやる」

そのときだった。まさにヒーローの如くルシファーが助けに来た。俺は断っていたが、やはりこのときはルシファーがいてくれてよかったと思った。

「お前は、誰？」

「マシュー様の手下、ルシファー」

「そう、じゃあ死んでも文句はないな」

だが、簡単にサーシャの攻撃はルシファーに止められた。真の姿であるサーシャに対して、ルシファーは人の姿で、しかも片腕だけでだ。

「どういうことだ？ ルシファー」

「今は話せません、申し訳ないがあとにしてください」

「……………」

ルシファーの力を見る限り、あの十の大魔王に匹敵するのも、俺は思っていた。だが、もしそうならばひょっとしてロドスも…。

「すまんが忙しいんでね、さっさと決着をつけさせてもらおう」

「ほざけ！！ 私に勝てるわけがない」

だが、ルシファーは一瞬でサーシャを気絶させた。

「ほう、やるなお前。もしや十の大魔王の一人か？」

「言う必要はない」

「それもそうだな。だが、マシューは知りたいんじゃないのかな？」

「……愚論につきあう暇はない」

ルシファーが先に動いた。が、先ほどとは違い、アレクに余裕でかわされた。

「一応俺は十の大魔王になるつもりだからな。舐めてもらっては困る」

「契約者の分際でか？」

「悪魔でなかるうが力があればいい」

長い長い闘いが繰り広げられるかと思ったが、そこで新たな悪魔が現れた。銀髪のサングラスをつけた男。

「よお、アレク。調子はどうだ？」

「あんた……なぜここに……？」

ものすごい冷汗をかいていると思った。なぜなら、俺もこの男の前にして心底震え上がってしまったからだ。

「なぜって、シオンに言われたからな。お前らを見はれって」

「く……」

「お前は、シュド……なのか？」

ルシファアも少し心配な様子だ。

「いかにも、お前は天の王ルシファアだな？」

「……」

「まあいい、俺の前ではいつ存在を消されるかとびくついている奴が多いからな」

こいつは一体……。

「とりあえず、シオンから命令だ。いますぐ戻れとな」

「どういう……」

「口答えは関心せんな。いいから、サーシャをつれて戻れ」

「……わかった」

ありえない。こつも簡単に言うことを聞くなんて……。

「それじゃあ、お前らも一時休戦だ。力を蓄えてこの俺に挑んで見せろ」

こつして、奴らは去った。ただ、いろんな謎を残して……。

選ばれし者

サーシャ達との闘いから一ヶ月が過ぎた。シオーネはどうやら命に問題はないようだったので、安心した。

ここ最近はやつらの情報が見つかっていない。だが、組は中々大きくなっていた。一つ気になっているのが、ルシファアのことだった。もし、天の王ならなぜ俺の下にいる？どうしてもそれだけは頭から離れない。

「今日も手下集めをするの？ マシユー」

「ああ。早くやつらに対抗できないといけないからな。シオーネ、お前何かいい情報はないか？」

「私は知らないけど、ルシファアなら知ってるかも」

「あいつか……」

「……どうしたの？ マシユー」

「心配は無用だ」

「……そう……」

「ルシファア、話がある」

「ああ」

とりあえず、誰にも聞かれないように誰もいない部屋へ行った。

「単刀直入に聞く。お前は天の王か？」

「ああ、そうだ。俺は天の王、ルシファアだ。だからどうしたというのだ？」

「お前は何で俺の手下なんだ？」

「ずばり言うと、俺は王でありながらの一匹狼だ。俺に手下はいない。だから、選ばれし者のお前を選んだ」

「選ばれし者？」

「お前の親のことはただ、神と悪魔としか言ってなかったな。まあ、いずれは知ることになるかもしれないが、あえて今は言わないでおく」

「親が特別なのか？」

「……………」

「本当に何も言わないのか……………」

「ああ、すまないな。俺も聞いただけではつきりとは言えないからな」

「わかった。じゃあ、お前が天の王だってことを知ってるやつは俺の仲間にいるのか？」

「一人だけ……。ロドスが知っている」

「そうだろうと思ったよ。ロドスが、か……。それじゃあ、シオーネとの会話を聞いていたか？」

「ああ、知ってるよ。何人か、仲間にできる可能性があるやつがいる」

「教えてくれ、そいつらの情報を」

「まず、一人教えとく。そいつは、風の悪魔、ニア。能力は体を風のようにすることで、物理的な攻撃は一切受け付けない。弱点は知らないから自分で探るしかない。まあ、こいつは一匹狼だから、他の敵を気にすることなく闘える。見た目は、緑の髪に黄色の目の女だ。場所は……………」

アザードの地図を広げて、ルシファーが教えてくれた。

「決して無茶はしないように」

「ああ、わかってる。って、お前は来ないのか？」

「俺は仕事が残ってる。大丈夫だ、ロドスがいるからな」

「私もいるでしょ！」

シオーネが少し怒ったみたいだ。

「ああ、そうだな」

「まあ、そういうことなら、仕方がないか。じゃあ、行ってくる。

ルシファー」

「ああ」

こうしてマシュー、シオーネ、ロドスはニアという悪魔のもとへ向かった。

仲間

俺たち三人は、ニアという悪魔のところへ向かっていた。

「なあ、シオーネとロドス。一つお願いがあるのだが、聞いてくれるか？」

「何？」

とシオーネが言った。ロドスは、

「内容によっては逆らうこともあるとだけ言っておこう」

「そうか……。実はな、そのニアという悪魔と闘うとき、手を出さないでほしいんだ」

「何をばかなことを。あいつは風を操る。危険すぎるぞ」

「そうだよ、マシユー。弱点がわからない以上は、協力しないと」

だが、俺はやつらを倒すために強くなりたかった。だから、一人で闘うと言ったのだ。しかし、こいつらの意見も一理ある。

「まあ、出会ってみて相手の力量があまりにも小さいならかわわんが、まずそれはないだろう。それに、もしそこまで弱いなら仲間にする理由がない」

「わかった」

「でも、私たち三人なら心配ないと思うよ」

「そうだな」

俺は少し勘違いしていたかもしれない。やつらを倒すために、無理に一人でやる必要はないと思った。信用できる仲間がいるのだから……。

やつらは俺の組で、絶対倒す。そう俺は誓った。

ただ、やはりシオンのことだけは気になっていた。もし、やつらの頭ならシオンはやつらより強いことが考えられる。俺みたいなのつでない限りは……。

そろそろニアがいるところへ着くはずだ。そう思った瞬間、背筋に寒気が走った。

「何だ、この感じは!？」

「おそらく、これがニアの力だ。思っていた以上の力だな。この俺でも勝てるかわからん」

ロドスが勝てないだと!! 十の大魔王でもない一般の悪魔に…。

「私にはそうは思えないけどね……」

シオーネ!? なぜ、シオーネがロドスが倒せない相手に対してそんなことを言える!? 現時点では俺にはシオーネが勝つ見込みは全くないと思うのだが……。

「シオーネ、あいつに勝てるのか？」

「たぶん……」

「俺には無茶苦茶強い悪魔にしか見えんのだが」

「そう……」

何か、シオーネの様子が変になってきた。目も虚ろな状態だ。

「大丈夫か？」

「うん」

俺はおそらくあのニアという悪魔の強さのせいで、少し気持ちが不安定なのだと思った。

とりあえず、俺があいつを倒して仲間にすればいい。

俺一人で……。

「行くぞ、ロドス」

「シオーネはどうする？」

「今はここに放っておこう。たぶんほかに敵もないし、大丈夫だろう」

そう言っ、俺達二人はニアとの闘いに挑んだ。恐ろしい悪魔が近くに潜んでいたのにも関わらず……。

戦闘開始

俺とロドスはニアと闘うことになった。

まず、俺は一つ案を思いついたので、ロドスに相談してみた。

「なあ、ロドス。俺はやっぱ一人で闘いたい。強くなるために…

…あと、案を思いついた」

「何だ？」

「やつの背後から不意打ちすることで、物理的な攻撃が通るかなと思っただが……。どう思う？」

「不意打ち仲間にするやつにはあまりしない方がいいのだが……。正々堂々と闘って上回ってこそ、仲間にできる。じゃないと、裏切りが絶えんからな」

「そうか……。じゃあ、俺の炎で何とかするから、ここで見てろ」

「……いいだろう。その力を見せてみる」

「俺は密かに特訓してたんだ。簡単には負けん」

「楽しみだ」

俺は一人で闘うことになった。そう思ったとき、何だか体中から力が漲ってきた。

俺は堂々とニアの目の前に立った。

「……誰？」

何も考えていないような謎の顔をしてニアはそう言った。

「マシユー。炎を操る悪魔だ」

俺はわざと自分の力を明かした。なぜなら、そう言うことで相手はその能力しかないと誤認しやすいからだ。氷の力も持っている俺にとって、この言葉は強力な武器だ。

「……」

だが、ニアにはすべてお見通しのような目つきをされた。本当に謎だ。いったい、どんなことを考えているのやら……。

「炎……」

ニアがその一言を言った直後、俺は吹き飛ばされた。

「なんだ!？」

全くわからない。おそらく風の力だろう。当たり前かもしれないが、攻撃が見えないのだ。空気だから見えないのか!？

「炎は…… きれい」

もう目の前にいた。おそろしい早さだ。これが風の力。

「きれい…… だと？」

「炎は空気を食らう」

何だと？ どういうことだ？ 全く理解できないままでいたら、

また吹き飛ばされた。

「そして……、悪い空気を出す」

ひょっとして、酸素と二酸化炭素の話か？ もし、あたりなら何なんだこいつは!？ 本当に意味がわからない。

「きらいきらいって、勝手に言いやがって。反撃開始だ」

俺は剣を出し、悪魔の姿になった。この姿は特訓で制御できるようになった。

「うおおおおお!!」

俺は炎の力で、爆発を引き起こした。やはり、風に爆発は効果があるようだ。それがわかった理由は、ニアが膝をついたからだ。

「危険は…… 消すべし」

やはりニアも全力ではなかったようだ。さっきよりも早い。しかも、風の力でできた剣を握っていた。攻撃は何かかわしたが、切れ味はそうとういいようだ。なぜなら、近くにある岩が、真つ二つになっていたからだ。

「ほっ……」

こうして、マシューとニアの激戦が始まる……。

王の言葉

マシュー対ニア。それはどちらが勝ってもおかしくない勝負。

「風の力はかたいものをも切り裂く……か」

「私の風で切れないものはない」

「そうかい。だとしても、当たらなければ意味を持たない」

このような言い合いをしながら闘いは続いていた。そのとき、俺の背後から気配がした。

シオーネだった。

「お前、何でここにいる？」

「どいて、そいつはあたしがやる」

「今のお前だと危ないから俺がやる」

シオーネの目はほとんど意識がないような虚ろな目をしていて。

「とりあえずさがつてろ」

「そのセリフ、そのまま返そう」

シオーネが一步、また一步と前に進みだした。

「おい、俺の言うことを聞け！」

「私の方が強いから……。大丈夫」

シオーネは意識がなさそうに見えても、恐ろしいぐらいの量の力を放っていた。

「風の私には絶対勝てないよ」

「……どうかな」

シオーネの手が凍り始め、鋭い爪のようになった。

「一瞬で終わらせる」

何が起こったのか、理解できなかった。だが、少しずつ時間が経つにつれて、分かってきた。ニアが凍りついて動けなくなっていたのだ。それと、シオーネの背中にも巨大な氷の翼がついていた。

「な……！！」

言葉も出ない。本当に呆れかえる力だ。少しシオーネをあまく見

ていたようだ。確かにシオーネの方が強いのかもしいない。

「どう？ 動けないでしょ」

「何で？ いつの間に……」

「すげえな、シオーネ。びっくりしたよ、こんなに強かったなんて……」

シオーネは笑っていた。どうやら、少しは意識があるようだ。だが、そんな安心も一瞬だった。

シオーネの後ろから、何者かが襲って来たのだ。

シオーネはたったの一撃で気絶させられた。不意打ちとはいえ、あまりにも力の差がないと一撃では無理だ。おそらくこいつは……。

「私は誇り高き水の王、アリエル」

やはり、十の大魔王の一人。青い髪を長くのばした女だった。

「……俺に何か用か？」

「さがれ、マシュー。ここはこのロドスに」

ロドスがすぐにやってきた。だが、俺はシオーネを攻撃されたので、引き下がらなかった。

「ロドス、少し待ってくれ」

「……わかった」

どうやら俺の思いが伝わったようだ。

「アリエルと言ったか……。お前、俺に何の用だ？」

「一つ言伝を頼まれてねえ。シオンに」

「何っ！！」

「やつぱり知り合いか……。まあ、そんなことはどうでもいい。ちゃんと役目を果たせばそれで報酬は貰えるからねえ」

報酬だと、シオンは十の大魔王を金で雇っているのか？ いや、それよりも……。

「言伝つてのは何だ？」

「近いうちに、そちらのお仲間全員殺す、だとさ」

シオン……。一体何を……。

「ま、用はそれだけ。またどこかで会うだろう」

そう言っで、アリエルは去って行った。

ギルドVSギルド

アリエルから言伝を受けて三ヶ月が経った。

ニアはシオーネが一応勝っていたから、今は仲間になっている。

あれからいろんなことがあった。ニアの他にも、たくさん仲間ができていた。もう、組ではなくギルドと言っても過言ではないくらいだ。

「マシュー、次はだれを仲間にするの？」

「うーん、まだ考えてないな」

ルシファアに聞いても、流石にもう知っているのはいないようだ。この数だから仕方ないが……。

「だったら、ギルドごと仲間にしてみようか」

「それは無理だと思うが」

ルシファアにあっさり否定された。

「なぜそう思う？」

「簡単なことだ。このギルドは数はいても実力のある者が少ない。

大抵のギルドは、全員が主役ぐらいの力を持っている」

「俺はこのギルドと一緒にぐらいのが、どこかにあると思うけどな……」

……

「まあ、それは簡単には見つからんだろう。あつたとしても、他の奴らが潰してしまうからな」

ということは、ここは危険ということなのだろうか。今までは何とかなってはいたが、いつか潰されてしまうのか……。そう思っていた。

そのとき、近くで爆発音が聞こえてきた。

「ここがマシューのギルドか……。噂どおりボロギルドだな」

どうやら考えていたことが本当になってしまったようだ。

「ボロギルドとは聞き捨てならんな」

ルシファアが敵ギルドの前に出た。

「天の王か……。だが、大魔王が一人いたぐらいでは到底かなわんぞ」

「その言葉も聞き捨てならねえな。てめえがギルドマスターか？」

俺もルシファアの隣に並んだ。つづいて、シオーネ、ロドス、ニアも来た。

「そうだ。俺がギルドマスターのロットだ」

「俺たちのギルドを潰しに来たのか？」

「まあそうだが、おとなしく我がギルドに加わるなら別の話だがな」

「……虫唾が走るぜ」

「そうかい、君と俺はどうやら相容れないようだ」

他の仲間も全員出てきたところで、ギルド対ギルドの戦が始まった。

俺はロットと闘うことになった。

シオーネは赤髪の女と闘っていた。

「私の名はシオーネ。あんたは？」

「どうせ死ぬから意味ないと思うけど……」

「そう？ 私はどちらにしろ知つときたいんだけど」

「……ま、そういう流儀なら一応教えとく。名はアリナ」

ルシファアの相手は黒髪の男。

「俺の名はディール。あんたは？」

「ルシファアだ」

「天の王ってさ、どんな力使うんだ？」

「こんな力さ」

ルシファアが手を一振りすると、ニアの力のような突風がディールを吹き飛ばした。

「ふう、風ねえ」

「他にもいろんな力を使えるぞ」

「万能だな、こりゃ面白くなりそうだ」

ロドスの相手は鎌を持った背丈の高い男。

「……………」

「俺はロドス。名は何だ？」

「……名は……ない」

「すごく暗い奴だ。だが、侮りは禁物。」

「だが、貴様は……殺す」

「へえ、面白い。大魔王でも何でもない一般の悪魔だが、簡単にはやられんぞ」

ニアの相手は金髪の男。

「お前は……、雷の使い手か」

「ほう、君は相手の能力をみやぶるのが得意なのかな？」

「……」

「まあいい。どちらにしろ勝つのは俺だ」

「……」

「一応名乗っておこう。俺の名はレイ」

「……ニア」

果たしてこの戦争、どちらのギルドが勝利の旗を掲げられるのだろうか。

王の力

ルシファールVSデイル。

俺はこの闘いは一瞬で決着がつくだろうと思っていた。なぜなら、ルシファールが天の王だからだ。だが、ルシファールが単に手加減をしているのかもしれないが、中々決着がつかなかった。

「なあ、デイル。お前の能力、そろそろ使ったらどうだ？」

「あんたには、使ってもらえないんでな」

「どういう意味だ？」

「あんたのこのマスター、あれはあいつの兄貴なんだろ？」

「知っているのか、フィアレスのことを」

「当たり前だ。敵のことを調べずに、戦争なんか仕掛けられるか！マスターともなれば尚更だ」

「確かに……」

「だが、あんたには調べる余裕などない。故に俺の方が圧倒的に有利だ」

「……だから？」

「あんたらに勝ち目はねえって言うてんだよ」

「たとえ貴様らが有利だろうが、圧倒的な力の差は埋められん」

「……そういうの、俺は好きじゃねえんだけどな!!」

デイルは槍でルシファールを攻撃するが、やはりかすりもしなかった。

「ちっ……」

「勿体ぶってないで使えよ、能力」

「……しかたねえ、あんまり時間かけんの好きじゃねえから、一撃で殺す！」

「……こい!!」

デイルの体から、黒いオーラが出た。言葉では言い表せないくらい、悪のオーラだった。こんなやつが手下だとは……。

「ディサルス！」

どうやら、技の名前のようだ。黒いオーラが槍を包み込む。

「では、こちら奥義を少しだけ使っとしよう」

え？ 奥義？ そんなもの知らんぞ、ルシファア。一応ロットと闘いながら見たり聞いたりしているから、聞き間違いかもしれないが、おそらくそうではないだろう。

「何年ぶりだろうか……」

ルシファアがいつもよりかなり多い力を出していた。

そして、驚くべきことが起こった。何と、ルシファアの剣が槍になっていたのだ。

それも生半可な大きさではなかった。

さらに、もう一つ驚いたことが起きた。ディールのオーラが消えていたのだ。しかも、下級の悪魔みたいに力が弱くなっていた。

「ビビりすぎだ、ディール」

「うっ……」

「まあ、約束は果たさんとな」

「くっそおおおおおおおおお！！！！」

まさに弱肉強食。負けは決まっていた。

だが、ディールは最後まであきらめなかった。

「さらばだ、ディール」

ルシファアが槍で爆発を引き起こした。この一撃でディールは倒れた。一撃で殺すと言ったディールが……。

とりあえず、ルシファアは勝った。

よし、この調子で……そう思った矢先だった。三人のうち、誰かがやられたのだった。

最強の契約者

ニア……。うそだろ……。あいつが負けるわけねえ。
相手は……雷男のレイ。相性はそんなに悪くないはず……。

「く……」

「おやおやおやあ？ もうギブアップですか？」

「……」

「まったく、弱すぎてつまんねえな。もつと骨のあるやついねえのかよ」

「やろうー！！ よくも俺の仲間をー！！ 絶対許さねえー！！」

だが、俺がロットを無視して奴を殺す前に、ルシファーが動いた。
「貴様……ただではすまんぞ！」

「へえ、おもしろい。てめえの奥義、俺に試してみる」

「無論……そのつもりだ」

ルシファーの雰囲気が一変した。が、ルシファーがレイを攻撃する前に、新たに何者かが現れたのだった。どこかで会ったことあるような……。銀髪に青の瞳といった見た目だった。

「てめえら、俺の獲物に何勝手に手え出してやがる。さつさと消えねえと、ぶつ殺すぞー！！」

「はあ？ 誰だてめえはよお」

レイが電撃を掌から放った。本当なら、あいつはビリビリとしびれて、倒れるはずだった。でも、本当はあいつは無傷で逆に、レイが傷を負っていた。

「どうやら、あいつはレイの電撃を撥ね返したみたいだった。」

「な……。どういうことだ！？ 俺の電撃が効かないのか？」

「俺にはなあ、攻撃どころか触れることもできねえ能力があるんだぜ。さてここで問題です。俺の能力はいったい何でしょうか？」

「ふざけるな！ てめえ何者なんだ？」

「何者……か。そうだなあ、契約者、とでも言っておこうか」

「うそだ。契約者の分際でこんな能力……あるはずが……」

「あるからここににいるわけだが……」

何なんだこいつは！？　ありえねえ、こんな能力……。どんな能力かわからないが、触れることもできないだと！？　こんなやつ、いったいどうやって倒せるんだ？

「あ、そうそう。一応忠告しとくわ。俺に触れたらためえらの体はドカン、だ」

「ふざけんじゃねえぞ！！　この三下があ！！」

「くっ……くははははは。俺に向かって三下だあ？　笑わせんじやねえよ。俺は悪魔の中でも契約者の中でも最強の存在なんだよ！」
「ならこの俺を殺してみろ！」

レイが（おそらく）全力で電撃を放った。が、結果は同じ。逆にレイが倒れたのだった。

「レイ！！」

ロットも含め、敵のギルドの全員があいつを攻撃した。

「はいはい、そんな攻撃、俺の前じゃあ無力なんだよお！！」

またしても結果は同じだった。

しかも、誰ひとり生き残ることができなかったのだ。

「うそ……だろ？」

この場にいる全員が誰一人例外なく混乱していた。

「やっぱり、ためえらじゃあ俺には勝てねえか……。情けねえなあ、おい。団体で攻撃しておきながら、傷一つつけられねえとはな」

ありえねえ！！

「さて、掃除も終わったことだし、マシュー、俺のこと覚えてるよな？」

「え……？　いや、誰だっけ？」

「はあ？　ふざけるんじゃないねえ。俺が誰か言ってみる」

「いや、本当に記憶にないんだけど……」

「ちっ、シオンって言えばわかるのかよ？」

「え？　お前、シオンなのか？」

「そつだよ。何だよ、そんな簡単に忘れられるやつだったのか？俺はよお」

「……すまん。て言うかお前、アリエルとかと」

「ああ、そつだ」

俺が言い終わる前にシオンが遮った。

「俺は、あのときからお前の周りで起きていることを知った」

あのとき？ いつだ？

「そつ、サーシャに出会ってからなあ！！今回はあいさつだけで帰ってやるが、次からは……」

「……いいだろう」

「じゃあな。あ、そうそう俺の能力言ってなかったよな」

「別に言わなくていいぜ」

「いや、あえて教えておいてやる。俺の能力は物体を操ること。まあ、それなりに少しだけ制限があるがな」

「何だと！？ 操るってことはさっきのあれは全部……」

「そつだ、俺が攻撃の向きを全て逆にしただけのこと」

「……」

「いいぜ、そういう絶望に染まった顔ってのはよお。すっげえ好きなんだよなあ」

「く……」

「んじゃ、今度こそ本当にさよならだ。カス！……」

最後に振り向いて言い放ったその言葉は、深く俺の心に刻まれたのだった。

魔剣

ここはマシューがいた町。そして、この俺シオン・レクターが住んでいた町でもある。

どういうことか、最近俺を殺そうとしてくる奴が多い。まったく勝てないというのに……。馬鹿な奴らだ。

「おい」

後ろから声をかけてきたその男の集団は、皆いろんな武器を持って震えている。中には銃を持った奴も……。本当に馬鹿げてる。

「うおおおおお」

そう叫びながら突進してくるが、俺の前ではどんな力も無力だ。そう、俺の力はあらゆる物体を操る。銃を撃てば撥ね返せばいいし、剣とかで攻撃してくるものならそれを砕けばいい。

そんなわけで、俺を襲ってきた連中は皆死んでいる。生き残りのどいない。

「はあ……。めんどくせ」

だが、この日はいつもと違った。大量の警察と、その中心に剣を持った女がいた。茶色の髪を長くのばしたどこにでもいそうな女。

「シオン・レクター、貴様は大量殺人犯として逮捕する。おとなしくない場合は、射殺する」

馬鹿かこいつらは……。やっぱり、雑魚をいくら殺してもつまんねえ。だけど、そっちがやるきなら……。

「そうかい、んじゃあ、殺してみろよ。ああ？」

「……殺せ、貴様のような契約者はどんな手を使っても殺さねばならない」

「へえ、あんた物知りだな。ひょっとして、あんたも能力者かなあ」

「返答する義務はない、さっさと射殺しろ」

たくさんの銃弾がとんでくるなか、俺は全く動かなかった。だが、

能力はもちろん使った。銃弾が俺の目の前で止まり、全て撥ね返った。

言うまでもないが、敵は壊滅状態だった。たった一瞬で……。

「ひやははははははははははは！！ いいねえ、最高だ。楽しすぎるぜ！！」

「く……」

「なあ、あんた能力あるなら使ってみろよ。ああ？ その剣は飾りかあ？」

「いいだろう、私の魔剣エアリウスによって殺されるがいい！！」
女との間にある空気を操って、こいつを吹き飛ばした。

「ああ？ 聞こえねえなあ。俺は耳が遠くってなあ。で、この程度か？ 魔剣つてのは、悪魔の力が宿っている剣。そんな簡単には死なねえよなあ。もっと俺を楽しませてくれよ」

「何という力……」

「ぎひつ、おい、本当にもう闘えねえんじゃねえよなあ！！」

体制を立て直す前に、こいつの腹を蹴とばした。

「どうだ？ 俺の蹴りの威力は。まあ、これでも相当加減してんだけどなあ」

そう言って、俺は傍にあったビルを、殴りでぶっ壊した。ついでに、そのビルの周辺にある建物も、ビルの一部を使って壊した。

「すげえだろ？ 俺の拳の威力。そろそろ、終わりにしてやるぜ！！」

「エアリウス！！」

剣から暴風がとんできた。

「こんなもんで俺がやられると思ってんのか？ 三下あ！！」
俺は暴風を撥ね返した。

「ぐ……」

だが、あいつはぎりぎりですれをかわした。

「撤退するしかないか……」

「はあ！？ 誰がさせるかよ！！」

「悪いが、お前と闘っても勝てる見込みが全くないんでな。ここは撤退させてもらう」

あいつは風の力で逃げたのだった。その気になれば、それをつぶせただろうが面倒くさかったから俺はやらなかった。

「ちっ……。めんどくせえ」

俺は時が来るまでこの町で隠れることにしたのだった。

「もっともっと強くなれ。……………マシユー」

立塞がる死

シオンと会ってから一週間……。

俺達、マシューのギルドは城の破壊された部分を直していた。

「なあ、マシュー。少し相談がしたいのだが……」

「ルシファーか……。わかった」

とりあえず俺達は、皆がいない場所へ移動した。

「んで、相談って何だ？」

「最悪な情報が入ってな。しかも、二つ……」

「本当か？」

「ああ。一つは、シオンの件だ。あいつ、人間の住んでいる世界で随分と暴れているようだ。ここ二、三日はおとなしいが……。二つ目は、……十の大魔王の一人がこちらを狙っている……」

「ふうん。……っておいおい、そりやまずくねえか？」

「ああ、相当まずいな。しかも、死を司る死の大魔王っていう話だ」

「……なあ、死ってどんな能力使うんだ？」

「そうだな、とにかく相手の命を滅ぼす魔法みたいなのを使う。例えば、窒息死とかだな」

「それじゃあ、やる前にやられるってことだよな？」

「いや、そうとも限らない。生の力、つまり相反する能力なら中和させることができる。だが、俺は天の王。あまり生の力は使えん」

くそつたれが。俺のギルドには、生の力を持った奴なんて一人もいない。早くも万事休すってわけか……。

「やあやあ皆さん。お邪魔するけどいいかな？」

黒づくめで、顔も見えないくらい大きい帽子とマント。声からして、おそらく男だろう。誰だ？ まさか、噂をすればってやつか？

「誰だお前？ ここをどこだと思ってやがる」

仲間の誰かが言った。

「ん？ どこって、マシューの城だろ？」

「わかってんなら、さつさと出てけ！」

さつきの奴がまた言った。

「ふう、生憎君と茶番なんかするつもりないんだけどね」

「てめ……」

「おめえらはすつこんでろ！」

俺のこの言葉で周りが音一つしなくなった。

「マシユー、あいつは……」

「ああ、わかつてる。お前、死の王だな？」

「おやおや、ばれてんのかい。まあ、仕方ないか。一応名乗っておこう。俺は誇り高き死の王、デス」

「ぶつ、くはははははははは。いや、わりい。あまりにも名前がそのまんますぎてな」

「……いやあ、むかつく野郎だね。本当、殺したくなるよ」

デスは地面を蹴って、俺の方に向かって来た。しかも、スピードが普通じゃない。早すぎて、反応できない。

「ははは、死ねや、くそ野郎」

まずい。本当に殺される。俺はデスに殴られ、後ろの壁にぶつかった。壁はこなごなになっていた。

「ぐはっ」

何だこれ？ 血？ くそ、俺は血を吐いているのか……。

「まだまだあ！！」

当たり前だが、こんな状況で誰一人無反応はありえない。シオーネが割って入った。

「マシユーを殺すなら、まずは私たちから殺せ」

バカ野郎、お前じゃ絶対無理だ。ニアとの闘い以降、お前は力をつまく使えていない。

「いいぜ。だが、一つ言わせてくれ。できるだけ楽しませてくれよ、なあ！！」

死の魔法

シオーネ……。早く俺が助けないと……。

「おい、死の王。今のうちにさっさとつせろ」

ルシファア……。

「はあ、何言ってるんだ？ 天の王様さんよお。引き下がるわけねえだろうがよお！！」

「ちっ。シオーネ、少し下がってる。こいつは俺が一撃で殺す」

「またまたあ、かあつこいいこと言っちゃって。お前が俺に勝てるわけねえだろ？」

「昔と一緒にするな」

「今も昔も一緒さ。死を司る俺に勝てる奴なんざ、いねえんだよお！！」

気づけば双方ともに、武器を持っていた。ルシファアは槍を、デスは剣を持っている。それにしても、いつの間に出したんだ？

「いいね、いいね、いいねえ！！！！ 久しぶりに楽しめそうだ」

「……」

ルシファアの槍とデスの剣との間で、火花が散っていた。両方とも、やはりとんでもない強さだ。

「んじゃ、これならどうかな？」

デスは掌を前に向け、そこから魔法陣が出てきた。

「ちっ」

ルシファアが猛スピードで突っ込んでいく。だが、相手の方が早く魔法を発動させた。

「ぐあ！！」

ルシファアが地面に倒れこんだ。

「無様だなあ、天の王よ。我が死の重力に耐えられんか。ん？ それでも、十の大魔王の一人か？」

「くそつたれが……」

「いいねえ、その表情。たまらんよ」

ここでロドスが後ろから割って入った。

だが、軽々と剣で止められた。

「いかなあ。卑怯はきらいだねえ。お前もそうだろう？」

「ちっ、化け物め」

その直後、ロドスはデスの剣をまともにくらって、たったの一撃で倒された。

「はや……すぎ……る……」

次はニアが挑んだ。だが、これもロドスとほぼ同じ結果だった。

下がっていると言われたシオーネが、氷の槍をデスに投げた。床がぶち壊れるぐらいのすさまじい破壊力。にも関わらず、あいつは片手で受け止めた。

「だめだなあ、こんなんじゃあ、先が思いやられるよ」

「うそ……でしょ……！？」

「ふう、いい加減雑魚どもと闘うのに飽きたのだが……。どいてくれんかね」

「たとえあんたが強くても、どくわけないでしょ！！」

「……哀れだな。かわいそうなぐらい哀れだわ」

一瞬、本当に一瞬でデスはシオーネを気絶させた。パンチ一発で……。

「く……、いつまでもここで伏せてるわけにはいかなえか……」

「ふっ、やっと本番だな。このときを奴らとどれだけ楽しみにしていたか……」

「奴ら……？」

そんな疑問を堂々と無視して、闘いが始まった。マシユーVSデスの闘いが……。

悲しき死

マシユーVSデス。それは生の力を扱えないマシユーにとって、かなり分が悪い闘いだった。

そもそも、死という力そのものが反則的な能力に対して、炎や氷などの何の特殊能力もない力を扱うマシユーにはかなり不利である。

「くそ……、強い、強すぎる」

「はっはっは。だがよお、そんなこと言っても手加減などしないぞ」
「つたりめえだ。てめえは、この俺が絶対倒す。命に代えてもなあ
！！」

「そうだ、それでいいんだよ。そういう度胸がねえとつまんねえかな」

互いの武器がぶつかり合うたびに、火花が散る。俺は少し距離をとり、

「これならどうだ！！」

剣を上から下へ振り下ろして、炎の衝撃波を飛ばす。

「くだらん、こんなもの我が死の力によって潰してくれる」

デスは掌を前に出し、再び魔法陣を出した。その魔法陣と俺の衝撃波がぶつかった。

爪で黒板をひっかいたときのような、いやな音が響いた。

そして、そこで爆発が起こり、煙が宙を舞っていた。煙が晴れた時、デスは無傷だった。

「おいおい……マジかよ……」

デスの目の前の床は、焦げていたり壊れていたり、本当に破壊力は恐ろしいものだったはずなのに……。

「死の力にはなあ、殺すための力だけじゃなく防御の力も備わっているんだよ」

「……ありえねえ」

俺はただ漠然としていた。その隙をデスは見逃さなかった。

魔法陣が俺を囲み、俺はあらゆる恐怖に襲われた。重力によって潰される恐怖、息のできない恐怖、切り裂かれる恐怖……。

やべえ、このままじゃ殺される……！！

「くはははははははははははははははは。死ね死ね
死ねえ！！ てめえはここで終わりだ！！」

く……。死にまうのか……。俺……。

「ははははははは……あ？」

突然、魔法陣もぶち壊すぐらいの爆発が俺の周囲で起きた。

「……殺す」

「え……？」

真の悪魔の姿になり、さらに、剣が巨大な紫の刃をもつ鎌になっていた。炎の量も、剣のときの倍ぐらい纏っていた。

俺はぶつぶつと呪文を唱え、鎌を左から右へ振り回した。

すると、さつきとは比べ物にならないくらい巨大な紫の衝撃波が飛んで行った。

「な……!!」

今度は魔法陣で防いだ時、少しずつ魔法陣が傷ついていった。

「……化け物め！」

最後には魔法陣も壊れ、この衝撃波をくらった。

そのとき、デスの周りが炎で焦げていなかったのだ。

デスは、何とか持ちこたえていた。ふらふらになっているが、まだ闘うつもりのようだった。

「くそっ、くそっ、くそっ。こんなバカなことが……」

「さっさと死ね。このくそ野郎が」

「はっ、誰が死ぬかよ。俺は死を司るもの。簡単に死ねるわけが……ねえだろうがよお!!!!」

「哀れだな……」

今度は同時に俺の鎌の攻撃とデスの死の力がぶつかり合った。
ほぼ互角。

「ちっ、ちっちゅあめらめろ」

「うるせえ！」

また嫌な音が城の中全体に響き渡っているようだった。

「うおおおおおおおおお！……！」

「くそつたれがああああああああああ！……！」

巨大な爆発が起きた。

マシユーとデスのいた位置が逆になっていた。お互いに背を向けて……。

「お前の……勝ち……だ……だ……」

デスが倒れたのだった。だが、

「畜生……」

マシユーも続いて倒れたのであった。

「マシユー……」

力を振り絞って、気絶から覚めたシオーネが近づいてきた。

「シ……オー……ネ」

俺は仰向けになった。

「マシユー……」

シオーネの頬から俺の顔に涙がこぼれた。

「うっ……」

「泣かないで……くれ」

「でも……、マシユーが……」

「……いいか、よく……聞いてくれ。俺はもう……長くはもたない」

シオーネの顔が一瞬驚きの顔に変わって、また悲しそうな顔になった。

「今まで……いろんなことが……あった。ギルドが……潰されそうに……なったりとかな……」

「うん……」

「それで……ごふっ」

血が口から流れる。

「それで……ギルドを……守って……ほしいんだ」

「そんなこと……」

「お前には、人生を……俺のために……使わないでほしいんだ。お前なら、俺を生き返らせよう……棒に振るだろう。だが、そんなことは……お願いだから……しないでくれ」

シオーネは、少し躊躇ったのか一瞬間があいた後、うなずいた。「わかってくれたなら……いい。俺の分も、ギルドを……守って……」

「マシュー……」

「ありが……。お前のこと――」

私は、「お前のこと」の後が声が小さすぎて聞き取れなかった。だけど、たぶんこのようなことを言ったのだと私は信じた。好きだった……。と。

悲しき死（後書き）

第一章、やっと終わりました。

ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。
まだまだ下手ではありますが、これからも暖かい目で読んでくださるとうれしいです。

あと、よろしければ感想などもらえると幸いです。
悪魔と神の子、これからも宜しくお願いします。

死者（ペリウス）

「うっ……、ここは？」

俺の名前はマシュー。悪魔と神の血を継ぐもの。

俺は、気がつくとも十字の交差点のど真ん中で倒れていたのだ。辺りは真つ暗な夜……。そのせいか、車の気配は全くなかった。そして、さらに人の気配も全く感じなかった。

「いったい……、どういう……」

「オシエテアゲヨウカ？」

そんな中、一人の金髪の少女が現れる。切れ味のよさそうな剣を持って……。

「おい……、お前、何し」

何してんだ、という言葉は爆発音によって遮られた。

その少女の目の前が爆発していたのだった。

「アラタニテキハッケン」

そういうと、少女から見て右斜め上を少女が見上げた。

「ちっ、ばれちゃあしょうがねえ」

そいつが上から飛び降りてきたせいで、落下地点のアスファルトがばらばらになっていた。

酸素の代わりに血を取り入れたような、真つ赤な炎に包まれた……

……、悪魔？ 顔は炎のせいでよく見えない。

「おい、そこのお前。消えたくなけりやここから逃げるぞ」

「は？」

「生きたいなら、つべこべ言わずついてこい」

その悪魔は少女がいるのとは逆の方向に猛ダッシュで逃げた。

しかも、無茶苦茶速い。

「早くしろ。小僧！！」

「……俺を小僧呼ばわりか……。上等じゃねえか」

俺もあいつに負けないくらいの速さで少女から逃げた。

そして……。

ここはずいぶんと使われてなさそうな、下水道。

「はあ、はあ。くそっ、いきなり何なんだ。これは……。確か俺って死んだはずじゃ……」

「そのとおり。お前は死んでいる。だが、お前は生きている。これはどういうことだろうか。教えてやってもいいが、とりあえずまずは、自己紹介から。俺はベリウス・アルダート。お前は？」

「……マシユー・ボルス」

「そうか。じゃあマシユー君、君はなぜ生きているか知りたいか？」
「……ああ」

ベリウスは少し笑った。

「まあ、生きていると言うと語弊があるのだが……。実を言うと、ここは死者の世界。そう、君はもう死んでいる。だが、絶望する必要もなからう。我々は、最近生き返る方法を知った」

「我々……だと？ 生き返る方法？」

「……知りたければ、俺と一緒に来るといい。歓迎するぞ、アルスは……」

俺は何も知らない。だから、仕方なくついて行くしかなかったのだった……。

強きもの

ここは死者の世界。この俺、マシューはベリウスと一緒に下水道の最深部と思われる場所に来た。

ここは本来ならとても暗いはずだが、ベリウスが纏っている炎のおかげで結構明るかった。

「おい、ベリウス。ここは……行き止まりじゃあないのか？」

「まあ、少し待て。確か、この辺に……」

ベリウスは、炎で見えているはずなのに壁を手で探っていた。

十秒くらい手で探っていても、不思議と壁は炎で焦げていたりしなかった。そして……。

「あつたぞ」

ベリウスが壁を押すと、その押した部分だけがへこみ、壁が動いてひとつの部屋が現れた。

「よ、新入りを連れてきてやったぞ」

部屋の中にいたのは、銀髪で上半身は裸の上に黒のコートを着ていて、ズボンはどこにでもありそうなズボンといった男が一人と、金髪と茶髪の女が二人。この二人は普通の服装で、仲良くテーブルの上でランプをしていた。

「新入り、ねえ」

男が寝ころんでいる状態でそう言つと、急に立ち上がった、

「お前、名は何だ？」

「マシュー・ボルス……」

「そ。俺は、アイスって呼ばれてる。俺はな、名前を覚えてねえんだ。だから、氷の力を持つてるから、アイス」

「そうか……」

「まあ、気にすることあねえよ。新入り」

アイスは少し笑ってそう言った。

「それで……、その二人は？」

「私は」

「あたしは」

金髪の女が、茶髪の女の言葉を無理やり遮った。

「あたしは、あんたと組むつもりはない。うちのギルドでないからね。それにあんた、あんまり強そうに見えないしね」

「……へえ、上等だ。こちらとしても、確かにこの世界については知らないが、かといって、お前ら以外の奴に聞けばいいしな。じゃ、帰らせてもらおうか」

「ま、この世界じゃああんたみたいな三下はすぐにやられるのがオチだけだね」

俺はついに我慢の限界を超えた。悪魔の姿になり、（なぜか、この間のように剣は変化しなかったが）紫の炎に包まれる。

「いますぐ謝るなら許してやってもいいのだが……」

「そのセリフ、弱者が言っているもんじゃないんだけどな」

「おい、お前らそこまでにしとけ」

ベリウスの言葉はこの二人には届かなかった。

金髪の女は何も武器を持たずに、突っ込んできた。

「武器を持ってなくても、容赦はしねえぞお!!」

俺は、剣を振って炎の爆発を引き起こす。だが、何度やっても相手が早すぎて一発も当たらない。

「くそつたれが!」

「どうした、どうした。そんなんじゃ、この世界の誰一人倒せやしないよ。威力も低そうだし、スピードも遅いんじゃあ何がいいんだか……」

「ほざけ!!」

くそつ、全然当たらんえ。何なんだこいつ……。

「じゃ、そろそろ反撃しますか」

早い。とにかく、いままであった奴らとは比べ物にならないほどの速さ。当然、俺はかわすことなどできるはずもなく、あいつの蹴りをくらい、ぶっ飛んだ。ここは割と広いため、壁にはぶつからない

かったが、10メートルぐらいぶっ飛んだ。一回もバウンドせずに・
・。

「ま、そんなんじゃあ仲間にする価値なし。どうしても、なりたいたいなら修行してきな」

その直後、やっとあの時の鎌に剣が変化した。

「おい、まだ終わってねえだろうが。ああ!!」

俺は立ち上がりながら、そう言った。

「ふっ……。いいね、そこなくちゃ」

アルスとファイアーズ

「う……ん？」

気がつくとその部屋にいた。そう……、あの隠された部屋に……。

「気がついたみたいね」

「いったい……、どうなって……」

「まだ横になってた方がいいかも……。ちょっと力が入りすぎたみたいだから……」

「お前……」

「そ。あのとき、あんたの理性がどこかに行っちゃいそうだったから、一発で終わらせておいたの。まあ、あんたはそれなりに力があるみたいだったから、仲間にしてやってもいい」

「素直に言えよ、仲間にしたって。このアルスの仲間……」

「ったく……。リーダーだからって調子に乗るんじゃないよ、ベリウス」

だが、その顔は少し笑っているように見えた。

「なあ、アルスって何だ？」

「このチームの名だ。んで、加わる気はないのか？ まあ、それしか手はないだろうが……。この世界じゃあ、お前が最初に会った奴が外をうるうるしてるからな。それと、一応死の世界だが、普通に死ぬる。心臓を貫かれても生きているなんて考えを持ってるなら今のうちに捨てる」

「もし、死んだらどうなるんだ？」

「……この世界から消える」

その言葉には嘘など欠片もなかった。故に俺は、こうすることに決めた。

「アルスの……仲間になってくれ」

「……ようこそ、アルスへ」

アルスの四人全員が声をそろえて言った。

「そういえば、あたしたちはまだ名乗ってなかったね。あたしは、ネリア。こっちは、リーティス」

金髪の女がそう言った。

「よろしく、ネリアとリーティス」

「んじゃあ、もう一つ言っておこう。俺はお前に生き返る方法があると言ったな。その方法を教えておく。それは、お前が最初に会ったあいつを殺すこと。ただし、一人につき一人しか生き返れない。つまり、いやでも強くなければ生き返ることはできないってことだ。だから、いまずぐ修行を始めましょう。お前たちもだ」

「まさか、修行って……。無理よ、まだあいつらには勝てない」

何だ？ ベリウスとネリアが何か言い合っているようだが……。

「それに、まだ奥義もうまく使えないのがいるってのに……。無理に決まってる」

「なあ、それって俺のことだよな。奥義って、いったい何なんだ？ ひよっとして、俺の場合鎌のことなのか？」

「かもしれないが、まだお前の力ははっきりとはわかっていない。奥義ってのはな、簡単にいえば自分自身の一番強い技だ。うまくいけば、相手の気力を奪うこともできる。つまり、その場合は八工を叩くと同じくらい楽に勝つことができる」

「それをやればあいつにも……」

「やめておけ。あいつはちよつとやそつとじゃ気力を奪うことはできねえ。ようするに、力で押すしかないってことだ。ちなみに、俺が闘っても歯が立たねえほど強いからな」

「そんな……。しかも、一人で……。なんだろう？」

「……ああ」

絶望的だ。その言葉が頭の中で暴れまわる。

「……で、その修行の相手って、誰なんだ？」

「アルマ率いるチーム、ファイアーズ」

「！！ この名前には聞き覚えがある。まさか……。あいつが……。？
おい、大丈夫か？ 震えてるぞ」

「……アルマってのは、俺が殺した悪魔なんだ……」
この場は、俺の一言によって凍りついたのだった。もし、本当に俺たちでは敵わないのだとしたら、奴は……、どれくらい強くなっているのだ？

目覚める力

結局、俺達アルスはファイアーズに宣戦布告などという馬鹿げたことはしなかった。そのかわり、やはり修業はこのチーム内ですることにしたのだった。

人数が奇数のため、交代しながら修業をしていた。

最初に、奥義を使えないんじゃないからあ話にならないから、俺とベリウスが闘うことになった。

「じゃ、修行を始めようか」

「よ、宜しく願います!!」

「いい心意気だ」

俺は悪魔の姿になり、ベリウスは元から出ている炎をさらに増やし、そのせいか、巨大な悪魔にも見えた。

「まずは、あの鎌にするとところからにするか」

ぬおおお！　だが、いくら鎌にしようと努力しても中々ならなかった。

「おいおい、もっと気を落ち着かせろ」

「はいっ!!」

言われたとおりできるだけ気を落ち着かせた。すると、少し不安定だが鎌になりそうだった。

「お、あと少し」

だが、ちよつとした油断で剣に戻ってしまった。

「くっそー」

「まあ、粘り強さが重要なんだ。ほれ、もう一度」
繰り返すこと三十分。ようやく、できるようになってきた。

「よし。次は……、そうだな、俺の技を止めてみる」

ベリウスの掌に炎が集中する……。そして、一つの炎の大砲みたいなのが飛んできた。

俺は、鎌でそれを斬り裂こうとした。が、少しずつ俺はそれに押

されていった。

「く、おおおおおおおおお!!」

あの時の感覚。そう、あの紫の衝撃波……。あれさえできれば……

…。

「おおおおおおおおお!!」

押されていた俺が、逆に押しかけていた。そのとき、

「んじゃ、もう一発」

「ぐ……、るうああああああ!!」

再び、押されてしまった。しかも、さっきとは比べ物にならないくらいパワーだった。

「ちよつと、まずくない？」

「心配は無用だ、ネリア」

そのとき、俺の中で何かが弾けた。

それと同時に、一瞬で炎の大砲を吹き飛ばす。

「それだ、それこそがお前の力じゃないのか？ マシュー」

「……ちげえ」

「何？」

「……俺の力はこんなもんじゃねえ」

鎌を一振りするだけで、下水道が崩れそうになる。

「おい、もうよせ。修業は中止だ。このままじゃあ」

「このままじゃあ、何だってんだよ？」

「あいつに……」

ベリウスの背後で爆発が起きた。そのせいで、言葉が聞き取れなかったが、答えは目の前に現れた。

俺がこの世界に来て最初に会ったあいつ……。

「くそ……早く逃げるぞ」

「……てめえらだけでな」

「何ふざけたこと言ってるんだ!! マシュー」

「テキヲハツケン。ハイジョシマス」

地面を蹴って、猛スピードでくる金髪の少女。だが、俺はひるみ

もしなかった。むしろ、楽しんでいた。

「潰す!!!」

俺も地面を蹴って、金髪の少女とぶつかり合う……。

強すぎる……

マシューVS金髪の少女。マシューは負ける気がしなかったが、他の者は一撃で決着がつくと思っていた。

だが、真実は――。

互いにぶつかり合うたびに、衝撃波が発生した。下水道は今にも崩れそうだったが、何とか持ちこたえていた。

「はっ、あんたベリウスを簡単に倒せんたる。この程度なわけねえと思うんだけどな」

「……コレハスコシヤツカイデスネ。スコシダケホンキヲダサセテモライマス」

「いいぜ、てめえの力、俺にぶつけてみる!!」

俺は、鎌に力を込めた。紫の炎が一気に爆発するような感じで増大する。

「くらえ！ 奥義、ファイズ!!」

鎌を一振りする。そして、一つの大きな紫の衝撃波を放つ。

金髪の少女はかわすことができず、さらに、受け止めることもできなかった。

「俺の奥義は、相反する炎と氷、その両方を同時に発動させ、反発させることで巨大な衝撃波を生み出す……。それこそが、俺の真の力……」

そして、俺は背を向けこう言った。

「じゃあな、名も知らぬ者よ……」

だが、そう簡単にもいかないのが現実……。

「コレハヨソウガイデシタ。デモ、コノテイドジャワタシハシニマセンケド……」

「な……!!」

「ハンゲキカイシデス」

やばい。さっきまでの強気はどこかに吹っ飛んだみたいだ。

「オワリニシマシヨウ」

そのとき、信じられない光景が目の前に現れた。

「おい、アルスの奴に手え出すなら許さねえぞ」

ベリウスだった。俺と金髪の少女の間に割って入って、少女の攻撃から俺を守ったのだった。

「コレハベリウスサン、アナタモシニキタノデスカ？」

「ちっ……。お前ら、今のうちに何とかこいつから逃げられるようにしとけ」

「んじゃ、俺の出番だな」

アイスが両手に力を込めて、氷で下水道の壁を壊した。

「これで、後は……。よし、オツケー」

何だ？ 壊したところが、魔法陣だらけに……。

「早く、マシユー。ベリウスは大丈夫だから……」

ふと、アイスの言葉によって我に帰る俺……。そして、ベリウス以外がその壊した場所へ逃げた時、

「さらばだ、君の相手は少々きつい。ここは引かせてもらう。今度会うときは、君を絶対倒す」

「……ソレハムリデスネ」

「どうかな……」

全員が逃げた時、壁が氷で埋め尽くされた。

「コレハ……」

「俺の氷は中々壊れないからね。君はもう、追ってこれないよ」

「……マアイイ。ツギハ、アノスガタデイクトシヨウ」

あの姿？ 気になるが、今は少しでも遠くへ逃げるのが賢明だろう。

そして、新しく隠れ家を今度は地上に作るのであった……。

死の世界に撒かれる赤

マシューたちがいるところから相当遠いところで妙なことが起きていた。

何もない道路の上で、電流が集中してバチバチと青白く光る。そこから、黒くて丸い穴が発生し、少しずつ広がっていく……。その穴からゆっくりと人が出てきた。その者の名は、シオン・レクター。自称最強の力を持つ契約者だ。

「ったく、そろそろこっちの世界に骨のある奴は来たかな？」

そんな独り言を言いながら、できた穴を閉じる……。そして、穴を閉じてその場所から立ち去ろうとすると、あの金髪の少女が現れた。

「ああ？ 何だ、またあのくそ餓鬼か……。そろそろ学習しろよ。」

俺には勝てねえんだからよ」

「シンニユウシャ。セイメイアリ。ハイジョシマス」

「俺が生きたままこっちに来てるから、キレてんのか？ ちつ、めんどくせえ餓鬼だ」

シオンが地面を強く蹴る。すると、その部分のアスファルトがこなごなになり、シオンは信じられない速さで突っ込んでいく……。

一方少女は、剣を抜きシオンの攻撃に備える。

シオンはただの拳で挑む。少女は、その拳に剣の切っ先を向ける。ふつつこのままいけば、シオンの拳に少女の剣が刺さるところだが、シオンの能力の前ではそんなことはまず起きない。つまり、シオンはただの拳で少女の剣をこなごなに砕いたのだった。切っ先を殴ったにもかかわらず……。

「はっ。何ですかその剣は！！ 紙きれで作ってんのか？ ああ！！」

続いて、シオンの拳が少女の腹を襲う。少女は吹き飛び、あらゆる建物を粉碎していく……。

そう言いながら、シオンはその場を去っていく……。
一方、マシューたちは何の危険もなく、修行を行っていたのだっ
た……。

龍を率いる者（ドラゴンズ）

新たに地上に作られた、マシユーがいるアルスの隠れ家。

そこでは、いつものように修行が行われていた。おもにマシユーが中心で……。

理由は2つある。

まず1つは、マシユーが力の扱いに慣れていないからである。

そして、重要なのは2つ目。マシユーは力を簡単には扱えない分、強大であるからであった。それがわかったのはつい最近のことだった。だからこそ、アルスのみんなはマシユーの修行をメインにしている。

その修行の後の休憩のとき、この隠れ家に新たな客が訪れた。

その者の姿は黒き巨大な翼を広げる龍の悪魔だった。

「マシユーという者がこの世界に来たらしいのだが……。お主ら、知らんかね？」

その黒き龍はそう尋ねたのだった。

龍の前には、今は休憩中のマシユー以外のアルスのメンバーがいた。だが、マシユー以外の者はこの龍を知らない。故に、誰も迂闊に返事することなどなかった。

そして、再び龍が話し始める。

「別に悪意を持って来ているわけではないのだが……。まあ、警戒するのはわかる。それでも、マシユーに会わせてもらえんかね？」

このままずっと返事をしないわけにはいかないようだ。それは、アルスのこの四人全員がわかっていた。

だから、ここはリーダーのベリウスが返事をするべきだ、と他の三人がベリウスに視線を向ける。

「……なぜ、あんたら龍の悪魔がマシユーに会いたいんだ？」

質問に質問で返すのはよくない、と思いつつもベリウスは質問で返す。

「……ふむ。理由と言えば、そうだな。マシューには、生きていた頃助けてもらった恩があつてな……。それで、この世界には他にもたくさん悪魔がいる。つまり、再び組んでもらえたとお互いの生存率が上がると思つてな……」

「……………」

ベリウスは腕を組んで黙り込み、頭の中で整理する。

そして、悩んだ末に出した結果は……。

「少し待つてくれ」

そういうとベリウスはマシューの処へ行く……つもりだった。つもりだったわけは、何とマシューがいつの間にか後ろに立っていたからである。

「あんた……サラムなのか？」

少し間があいて龍は答える。

「そうだ」

「つてことは、死んだのか……。いつたい、どこの誰にやられたんだ？ あいつは殺したから大丈夫だと思つたんだが……」

「アルマではなく、ロットのギルドに負けたんだ……」

「あいつらか……」

「一応言つておくが、ロットたちもこの世界に来ている」

「……………」

まさかアルマだけではなく、ロットたちも来ていたとは……。

ひよつとして、死の王も来ているのか？

「なあ、死の王は来ているのか？」

「……………」

俺の質問に周りが恐怖のあまり、固まってしまったのだった。

「おい、お前……、死の王を倒したのか？」

ベリウスが震えを隠しきれず、若干震えていた。

「そう……だけど……。なんで、そんな……」

周りの状況を見ると、俺まで緊張する……。

「死の王はこの世界には来れない。奴は、一度ここにきて生き返つ

ているからな……。つまり、一度生き返った場合は、二度とこの世界には来れず、生き返れない。まあ、そんなことができれば、世界は狂うだろうが……」

サラムの答えには、俺だけしか安堵のため息をつかなかった。

なぜなら、ここにいる者はおそらく死の王には勝てないからだ。したがって、本当に切り札になるかもしれないマシューだった。

「それで、もう一度我々と組んでもらえるかね？ マシュー」

アルスの全員が顔を合わせる……。そして、

「俺としても、そっちの方がうれしいな。よし、また一緒に闘おう！」

こうして、アルスとサラム率いるドラゴンズがチームを組んだのだった。

この二つのチームを合わせて、アルゴンと呼んだ。

巨大な敵勢力

アルゴンが結成されているとき、敵のチームにも動きがあった。このファイアーズも、地上に隠れ家を持っていた。そこでは、マシューたちと同じように負けないために修行を行っていた。

そのとき、あの男がその場に訪れる……。そう、最強の契約者、シオンだった。

シオンに気づいたファイアーズの者は、誰もが同じ反応をする。恐れという反応を……。だが、できるだけ表には出さない。もしそんなことをすれば、どうなるか恐ろしくて考えられない。

だから、無理やりな笑みを浮かべて、アルマがシオンに尋ねる。

「シオンさん、今回はどんなご用件で？」

「ああ。ちよつと、お前らが弱すぎるんで鍛えさせようと思つてな……」

「マシューの件ですか……」

「……そうだ。そんなんじゃあ、話にならねえ。絶対にあいつを強くするために……」

「すべてはあの人の計画のため……ですか」

「まあ、俺はたとえ大戦争が起きようと知つたこつちやねえがな。で、俺のサービス受けるのか？」

「もちろん受けさせていただきます」

「ふっ……」

再び始まる修行。だが、シオンがいるとやはり周りの空気が一変する。

そんな緊張の中、次の客が訪れる。

その客は、ロット率いるデストだった。

「やあやあみなさん、修行の最中失礼しますが、ちよつとお話を聞いてくれませんか？」

「ほっ……、これはまた面白い客だな」

そう言ったシオンを見て、デストの者が全員息をのむ。

「シオンさん、いらっしゃったんですか。お久しぶりです」

「あいさつはいい。で、話って何だ？」

「では、単刀直入に言いますね。チームを組みませんか？」

「……なぜだ？」

「それはもちろん、マシューたちが魔龍どもと組んでいるからですよ。わかれてやると、おそらくかなり面倒になりますから……」

「そうか……。いいだろう、組め。俺としても、その方が都合が良さそうだからな」

「ありがとうございます」

「じゃあ、お前らも含めて修行だな……」

デストとファイアーズ、この二つを合わせてデサーズと呼んだ。

そして、修行をして二時間後……。

「俺はそろそろ、あっちの世界に帰るから……。ちゃんと、強くしろよ。両方とも……。じゃねえと、つまんねえからよ」

「了解です」

全員が揃えて言った。

こうして、最強の契約者はもといた世界へ戻ったのだった。

マシューたちはこのことを知らないが、あの計画とはいったい――
|。

仲間割れ？

ここはデサースの隠れ家。

ここでは、マシューたちアルゴンを倒すための会議が密に行われていた。

「まずは様子見として誰か一人を闘わせよう」

リーダーのアルマが続けて最初に闘う者を決める。

「それじゃ、お前でもいいな。さっきも言ったように、様子見だから無理はしないように」

「……いいだろう。あんな奴ら、私ひとりで十分だ」

「ふっ……。任せたぞ」

そして、ここはマシューたちアルゴンの隠れ家。

こちらでは、魔龍たちをできるだけたくさん集めて、デサースが結成されたことを知らせていた。

当然のことだが、魔龍たちは体が大きい分、隠れることが難しい。だから、このことを知らせたらすぐにそれぞれの隠れ場へ行ったため、マシューたちと一緒にいるのは、サラムだけだった。

その残ったサラムと、マシューたちアルゴンはデサース対策の作戦を練っていたのだ。

「さあて、相手もチームがくっ付いたのなると、かなり厄介な状況だな。しかも、片方のリーダーは炎を自分の物にするから、リーダーの俺にとってはつらい敵だ」

確かに、リーダーのベリウスは常に炎を纏っている悪魔。当たり前だが、俺のように氷の力は持っていないのだ。たぶん、相反する能力を使う奴は俺を含めても五人もいないだろう。それだけ珍しいものなのだ。

そういうわけで、俺達のリーダーは相手のリーダーに全く歯が立たない。だからこそ、いい作戦がほしいのだが……。全く思いつかない俺たちだった。

「魔龍さんたちも、基本炎だしなあ……」

本当に最悪だ。片方のリーダーがだめなら、せめてもう片方だけでも……。ということすらも、認められない炎使いの塊だった。口ツトもいるっていうのに……。

「はあ、何かいい作戦ないか？ 誰か、教えてくれ」

「とにかく、たとえあんたたちが闘えなくても、あたしたちがいるんだから、心配はいらないわよ」

ネリアが自身を持って言っていたのだ。全く、頼もしい限りだ。

「何なら、あたしひとりで」

「やめとけ」

ベリウスが途中で遮る。しかも、さっきと雰囲気がるで違う。

「お前ひとりじゃ、誰一人倒せないのはわかってるのだろう？ 前もそんなことを言っていなかったか？」

「なっ……」

「言いすぎじゃないか？ ベリウス」

アイスがちよつと怒っている。

「いいわよ。あたしだって、本気を出せば……。あんたにはまだ見せてないけどね」

「そうか？ じゃあ、こつからさきは単独行動にする。好きにするがいい」

「おい……」

「……わかった」

「お前ら……、何意地張ってんだ」

「……」

俺は我慢ができずに説教つばく叫んでいた。

「つたく、馬鹿か？ お前ら……。仲間割ればつかしてたら、相手の思う壺だろ。こんなんじゃあ、いい作戦思いついても全然うまくいかねえだろ。いい加減、頭冷やせ！」

「そうだな……。悪かった……」

「あたしも……。ごめん……」

二人とも、何とか仲直りできたみたいだ。

そんな感じで、結構いい雰囲気になりかけてたのに……。敵が現れたせいで、台無しだ。

しかも、そいつは隠れ家の壁を壊してきやがった。これじゃあ、隠れ家にならないから、また移動しなくちゃいけない。はあ、本当についてないや……。

「私の名は、エリー。そっちのリーダー、名を名乗りなさい」

黒髪に真っ赤なマント、そして、巨大な槍。身長の倍くらいありそうな、とにかく巨大な槍だった。

「リーダーは俺だ。ベリウスという名だ」

「ベリウス、ねえ。特別有名でもなさそうね。安心したわ、相手のリーダーがそんなに強そうじゃなくて……」

「……おもしれえ。マシユー、ちよつと闘ってみろ」

「はあ！？ 何で俺？ 挑発してんだから、あんたが闘えば……」

「修行の成果、試してみたくなはないのか？」

「……いいんだな？ 本当に」

「ああ……」

「どうでもいいから、さっさと来な。何なら、全員でも」

「俺一人で十分！」

奴の挑発を無理やり遮った。

俺は悪魔の姿になり、剣も鎌に変化させた。そして、死の世界でチームとチームの戦争が始まる。

お手並み拝見

マシユーVSエリー。これは、面白い闘いになりそうだった。まず最初に動いたのは、マシユーだった。地面を強く蹴り、猛スピードで突っ込んでいく。

対してエリーの方は、全く動かずにマシユーの攻撃を待った。マシユーが鎌で攻撃すると、エリーは一ミリもないくらいすれすれでかわす。その後エリーは槍の柄の部分で、マシユーを殴り飛ばした。決して、刃の部分は使わずに……。

それをものともせずに、マシユーは起き上がり、再び鎌で斬りかかる。

だが、それすらもかわされ、今度は蹴りを入れられる。マシユーは何とか踏ん張り、持ちこたえた。

「強いな、あんた」

「……なめてないでさっさと本気でかかってきな」

「ばれてたか……。じゃあ、お言葉に甘えて」

さっきよりも数倍速く斬りかかる。だが、それでもエリーにはかすりもしない。

その反面、マシユーは何度も槍の柄の部分で殴られる。

「ちっ……………」

「……話にならないね。素直に全員でかかってくればいいものを……。本当に馬鹿じゃないの、あんたら」

「手え出さないでくれ、みんな。俺は一人でこいつに勝ってみせる」
マシユーは鎌を持った右手を少し上げて、前に出ようとする者を止める。

「随分と威勢のいいくそ餓鬼だね。むかつくんだけど、そういうのさあー！」

今度はエリーから攻撃をしてきた。槍を大きく振りおろし、それをマシユーがかわしたことにより、地面が碎け散る。

「はっ、それでかわしたつもりかい？」

その攻撃に続けて槍を横に振り回す。これは避けきれずに、思いっきり横腹を斬られた。

そのせいで、血がぼたぼたと流れるように地面に落ちる。

「そく」

「ほらほら、さっさとしないと出血多量で死んじゃうよ」

確かに長期戦は避けた方が良さそうだった。だから俺は、鎌に力をこめ、紫の衝撃波を放った。そう、俺の奥義、ファイズを……。

[illegible]

だが、エリーは全く怯えない。そして、俺の奥義を槍で薙ぎ払おうとする。

しかし、俺の奥義はそう簡単には防げない。現にあの少女には防ぐことができなかったのだから……。

でも、それをエリーは自分の槍に力をこめることで、結構持ちこたえていた。そして……、エリーの槍から緑の光が放たれる。

その場所が俺の奥義なのかそれともエリーの技なのかはわからないが爆発し、煙がエリーの姿を隠す。

その煙が晴れると、所々傷を負ったエリーが現れた。

「……なかなかやるじゃないか、マッシュ」

「へっ……、まだまだこれからだろうが」

「面白い……。じゃあ、もう一発撃ってみろ」

槍を構えるエリー。そして、それに向かい合つて鎌を構えるマシユー。マシユーを見守るベリウス達。どう考えても、エリーが勝てるとは思えない。だが、マシユーたちは一切油断しなかった。なぜなら、相手に味方がこの場にいないとは限らないから――。

召喚者

俺はエリーに言われたとおり、もう一発放って決着をつけようと思っていた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおー！」

俺もエリーもお互いにけがをしていた。だから、俺はこれに全力を注ぐ。

一方エリーは、

「やっぱり、結構強いね。死の王を倒したっていうのは、納得いかなかったんだけど……。これなら、勝てるのかもね……」

だが、

「でも、私は負けない。いや、負けてはならない。生き残るために……」

マシューの衝撃波、エリーの緑に光る槍。どちらも一撃で決めるために、すごい力を放っていた。

そして、向かい合うマシューとエリーの両方から力が放たれる。

互いの力がぶつかり合った瞬間、すさまじい爆発音がこの死の世界全体に響き渡った気がした。

勝者は……。

「私の負け……。でも……。まだ終わっていないから……」
ドサツ、とエリーは倒れた。

「うおっしやああああああああああああー！俺の勝ちだー！」

俺は喜びの雄叫びをあげていた。他のみんなも少し笑っていた。

「よくやった。やはり、お前には素質がある。この調子でどんどん強くなっていくこう、マシュー」

「おうー！もちろんだぜ、ベリウス」

「だけど、この傷だから少し休んだ方がいいんじゃない？」

「ああ、確かに。腹を深くやられてるから、少し休んでからまた修行だ。それでいいだろ？ネリア」

「そうね」

マシュー以外のアルゴンの者は隠れ家の破壊された部分を直していた。

マシューは傷を癒すため、安静にしていた。

「なあ、エリーのあの技ってどういう能力なんだろうな」

「さあね。あたしにも全くわからない。あんな能力見たことないからさ」

「……………」

「でも、私はあの能力知ってる気がする」

リーティスが俺が休んでいる部屋に入りながらそう言った。

「いったいどんな能力なんだ？」

「知ってる気がするだけだから、はっきりとは……。でも、あれは私のと似ている気がしたの」

「そんなのありえない！」

え？

「まだ話してなかったけど、リーティスの能力は召喚なの。つまり、いろんな悪魔を呼び出すことができる能力。あのエリーっていう女
の能力はどう見ても召喚じゃなかった。一緒なんて絶対にありえない」

じゃあいったい何で……？

「それに……、召喚のできる悪魔なんて十人もいないっていう噂なのに……。それが二人も目の前にいたなんてありえない」

「……………」

沈黙が続く……。そこへベリウスが横槍をさす。

「まあ、気にすんな。たとえ二人いたとしても、本当の問題は別にある。そう……、あいつらのリーダー、アルマの力だ」

確かにそうだった。あの力だけは本当に厄介だ。俺のメインの炎の力。これを封じられるのだから……。

そして、一人誰にも聞こえないほど小さな声で呟く者がいた。
ネリア。

「もし、召喚者なら……、あいつは今度こそあたしらを潰しにかかる」

「真実は……？」

エリーとの闘いで傷ついたマシユーが回復したところで、再び修行が行われていた。

マシユーの修行相手はベリウス。ネリアはリーティス。アイスはサラムと修行していた。その時、ベリウスがいきなり奇妙なことを言い出した。

「見られているな……、誰かに……」

「え？」

「おそらくデサースの者だろう。まったく、本当に馬鹿な奴らだな。またやられにくるとは……」

「……こつちから仕掛けないのか？」

「無理にすることはないだろう。相手も今は襲う気はないらしいからな」

「すげえな。俺にはそんなのわかんねえんだけど……」

「殺気を感じるのは重要だぞ、マシユー。ま、こういうのはいつの間にかできていたってやつだから、無理に修行を割いてやる必要はないがな」

「そうか……」

だが、ネリアとリーティスは……。

「ねえ、リーティス。あんた、あれどう思う？」

「隠れている敵のこと？」

「そうよ」

「そうね……。私はあんまり気にしなくてもいいんじゃないかなと思うよ」

「そうじゃなくて……、あれ、ひょっとしてエリーじゃない？」

突然、小さな声になる。

「まさか……、そんなこと……」

「雰囲気似てるんでしょ？ あんたと……。もしそうなら、あれ

はコピー能力を持った悪魔を召還したのかもしれない」

「確かにそれなら筋は通っているけど……。でも、ありえないと思うよ」

「何で？」

「召喚の力で自分のコピーを作った場合は、大抵は力が召喚者自身の1/10ぐらいになるから……。あれが召喚だったら恐ろしいことになる……」

「……………」

そこまで詳しく知らなかったネリアは、そのことを聞くと何も話せないくらい恐怖に襲われた。決して、誰にも気付かれないようにだが……。

そして、アイスとサラムは……。

「サラムさんはどうするつもりだ？ あ の 敵」

「そうだな……、私なら奇襲をかけ一撃で決める。無駄な血を流さなためにもな……」

「……………そう言うと思ったよ」

「ま、安心しろ。勝手な行動は慎むつもりだから……」

このようにアルゴンの者が気にかけている敵は……。

「全く、何でも簡単にはれるかな。ほんっと、ついてないなあ、私……。でも、それに気づいてもあんならの負けは決定事項だけだね」

レッドモンスター

修行をしていたアルゴンの者たちの前に、突如現れたエリー。そして、エリーを倒したマシュー。だが……。

「お前は……」

マシューの目の前にいるのは、あのデサースの者……、そう、エリーだった。

「何で……生きて……」

驚くマシューに対して、エリーは笑っていた。

「殺したはず、でしょ？ 確かに私は死んだ。私のコピーがね……。だから、オリジナルの私はまだ生きているの。この死の世界で……」
「コピーだと？」

マシューとベリウスが同時に言った。

「ま、コピーだからあんなのはカス同然なんだけど……。ずいぶん苦戦していたね。本当の私に勝てるのかな？」

「……一つ聞こう。お前はコピーよりどれくらい強い？」

「……以外ね。私が本当にオリジナルじゃなくて強さを聞くななんて……。まあいいわ、答えてあげる。私は召喚者のくせにあんまり召喚については鍛えずに、私自信を鍛えていたから、私はコピーの十倍から二十倍くらい強いかもね」

そんな……馬鹿な……。逆に言えば、最大二十倍の力を出せるってことだから、あんなに苦戦した俺には天と地がひっくり返っても勝てるわけがない。

「ちっ……、化け物かよ……」

「逃げようなんて思わないことね。私なら、あんたら全員一瞬で殺せる自信があるんだから……」

闘ってもダメ、逃げててもダメ。いったいどうすれば……。どこかに突破口はないのか？

「やっぱり、最初に殺すのはあんたよね。私のコピーを殺してくれ

「ただから」

「一番最初に選ばれるとは……。不幸だ。」

「いいぜ、いつでもこいよ」

「強がりはやめておいた方がいい。弱く見えるからね」

「……」

「誰がてめえに殺す奴を選ばせるか！ くそつたれが！」

ベリウスがキレていた。

「へえ……。面白い奴ね。威勢のいい奴は嫌いじゃあない」

「残念だけど、俺には勝てない」

「……なぜ？」

「言っておくが、この俺の今の姿は真の悪魔の姿ではない。抑えても、これが限界だからこうなっているだけ……」

「？？ そんなこと、聞いてない。でも、これがハツタリでないなら……。」

「俺がもし真の姿を解放すれば、どうなるか知っているのはその三人だけ」

ベリウスがネリア、リーティス、アイスに指をさす。

「悪いことは言わん。すぐに立ち去れ。俺たちを倒すなら、お前ら全員でかかってこい」

「はっ……。この私を侮辱するなんてねえ……。ほんと、ありえない……！」

突然、エリーが槍を召還し、ベリウスを殺そうと突っ込んでくる。だが……。それはベリウスが起こした巨大な爆発によって妨げられる。

周りの建物が、どんどん溶けていく……。隠れ家も含めて……。それだけ熱いのだ。地面のアスファルトも、ベリウスの周だけだが真っ赤になるくらいだった。

そして……。そのベリウスは……。

ありえないほど巨大な、炎を纏った怪物。上半身は人間、下半身は馬みたいな感じだが、少し違う。四本のすべての足には三本の巨

大な爪があり、尻尾は炎そのものだ。そして、頭には巨大な一對の角がはえ、両手にはありえない大きさの炎を纏った剣があった。十メートルはあるだろう。

このベリウスは本当に見上げるくらい巨大だった。全長二十メートルを超えているだろう。

それを目の前にしたエリーは……。

「上等じゃないのー!!」

ベリウスVSエリー。本当に熱い闘いが幕を開ける。

揺れ動く思いと後悔

ベリウスVSエリー。体の大きさからすると、圧倒的にベリウスの方が巨大だから有利かと思えるが、実際は違う。

相手よりも遥かに小さい場合、その相手にとって攻撃を当てるということは、相当難しいのだ。ただし、その攻撃を当てればおそらく耐えられないだろう。

逆に、小さい方からすると、攻撃を当てることは容易いが、ダメージを与えるのが難しいものだ。

つまり、大小関係は有利不利には関係ないのだ。

そして、互いに睨みあう怪物……。

この怪物同士の闘い、いったいどちらが勝つのだろうかとはマシューは思わなかった。

マシューは決して勝敗が決まらない気がしたのだ。

そんなことを思っていると、ベリウスとエリーが激しく剣と槍をぶつけ合う。

あれ……？ 何かがおかしい……。そう、マシューは思った。

……そうだ！ なぜ、エリーがベリウスと同等の力を出すことができるのだ？

普通、大小関係のせいでベリウスの方が圧倒的に力が強いはず……

……。なのになぜ……？

「ほほう……。中々力があるじゃあないか」

「私の力をあまく見ないことね。後悔するわよ、絶対に……」

「それはそれで、楽しみだ。……だが、そのセリフ、そのまま貴様に返そう」

爆発。

炎の攻撃ではなく、あれは爆発だった。

エリーの槍と交えた剣からすさまじい爆発が発生したのだ。そして、そのままエリーを叩き潰すように剣を地面に振り下ろす。

「ぐはっ……！」

「これが……俺と貴様の力の差だ」

「何で……こんなに……あつさりと……。信じられない……」

だが、エリーはまだ諦めない。

「だけど……、私は……死んでも……勝たなくちゃ……ならない……のよ……。絶対に……。あんたら全員……潰してやる……！」

槍を支えに、何とか立ち上がるエリー。だが……。

「悪いな。貴様は敵だ。今すぐ死んでもらおうか」

エリーに剣を振り下ろすベリウス。その時、

「何？」

「何が今すぐ死んでもらうだ？ ふざけんじゃねえ！」

マシュー。

まるでエリーを守るように、ベリウスの剣を受け止めたのだった。

悪魔の姿になって……。その鎌で……。

「こいつは敵だが、闘えねえ奴を攻撃するなんざ、俺は反対だ。それにこいつは何か恨みがあつて俺たちを殺そうとしてるんじゃないで、上に命令されてんだろ？ それなのに……。ベリウス、お前はどっと思っついていやる？」

「どう思うか……。そんな善人みたいなセリフは捨てる。たとえ、ためえ自身が善人だと思っついていてもだ。そんなことを考えていたら、いずれは足をすくわれるぞ。敵に勝つには、悪になるのが一番なんだよ」

「そうかい……。俺も結構悪魔を殺してきたから、言えた義理じゃねえけどよ……。こいつは殺さないでほしいんだ」

「ふっ……。バカバカしい」

「とにかく、こいつは殺すな。殺すなら、俺も殺せ」

ベリウスとマシューが睨みあう。そして……。

「よかるう……。ただし、わかっているだろうがこいつはもう用済みだ。デサースの者もただでは済まさんだろう。つまり、こいつは一人でこの世界を切り抜けるなりしなければならん」

「ああ……。ありがとう……」

「礼には及ばん……」

ベリウスは普段の姿に戻る。

「く……。お前に情けを懸けられるとはな……。恥だ」

「まあそういうなよ。お前は俺たちを恨んでないとすれば、殺したなんてこと思わないはずだ」

「馬鹿なやつだ……。確かに恨んでいるわけではないが、恨んでいるとすれば、それはベリウスの方だ」

「え？」

「どういうことだ？」

「私は……。ベリウスが最も愛した悪魔をこの手で殺したのだ……。」「
衝撃的な事実。」

馬鹿野郎。その言葉が、マシューの心の中で自分自身に向けて繰り返される。

「奴はおそらく、お前たちの知らないところで私を殺すだろう。まあ、その方がこっちとしても清々しいくらいだがな。だから、私は決して助けてほしいわけではなかった。これだけはお前に伝えておこう」

「……………」

マシューは全く言葉を返せなかった。

そして、エリーはこの場を去ったのだった。

デッサイ

デサーズ。

「ちっ、しくじりやがったか、エリーのやろっ。このあと始末、どうしてくれるのかなあー！」

「次はお前が行くのか……。なら、奴らに勝ち目はないか……」

「……。てめえもくるか？」

「悪いが、俺はエリーの方を頼まれてるからな」

「ちっ……。どいつもこいつも……」

「ま、お前の能力は特殊だ。余裕だろっ？」

「ったりめえだ！」

そして、マシューたちは……。

「全く……。いきなり何を言い出すかと思えば、エリーを助けるなんて……」

「ネリアの言う通りだ。一体何があったんだ？」

「……そのことは、あまり聞かないでくれ。すまない……」

「……」

ベリウスが無言で俺の前を通り過ぎる。おそらく、気づいているのだろっ。マシューが真実を知ったことを……。

今、リーティスは見張りをしている。この前のことがあってから、順番に見張りをしているのだ。そのとき、リーティスは少し不安を覚えた。かなり先に人みたいなのが見えたからである。

そして、その者は一瞬でリーティスの前に現れる。

「え？」

驚きのあまり、そんな言葉しか出なかった。

「邪魔だ」

その者は、鎌を持っている男だった。その鎌を上からリーティスを狙って振り下ろす。

「——！！」

不意打ちのせいで、リーティスは反応することができなかった。
鎌に切り裂かれたリーティスはその場に倒れた。

「ふん……。こんなものか……。奴の仲間は……」

外でこのようなことが起きているにもかかわらず、誰ひとり気づいていなかった。

そこで、その鎌男はマシューたちの隠れ家をたったの一振りで粉砕する。

「くそ……。何がどうなって……」

答えが目の前に現れる。

「てめえは……。ロットのギルドの……」

「久しぶりだ、マシュー。まさか、お前を殺せるときがくるとはな……。正直、もう二度とないと思っていた」

「……それは俺に一騎打ちをしろと？」

「そうだ」

「いいだろう。相手になってやる」

「デッサイ」

「……何？」

「俺の名だ。前に会ったときは、覚えてなかったから名はないといっていたが、死ぬ間際に思い出したのだ」

「そうかい。そりゃ、よかったな！」

マシューが悪魔の姿になり、ふたつの鎌が交わる。

能力封じ

鎌を持つ二人の悪魔が刃を交えていた。そのとき、マシューの背後で声がした。

「おい、お前ひとりで闘うな。俺達、全員で……」

「だめだ！！ これは俺の闘い。生きていた頃、ギルドの戦争として刃を交えた相手だ。俺としては、自分のことぐらい自分でけりをつけたいんだ」

「そうか……。死ぬなよ」

「もちろんだ、ベリウス。こいつは絶対に躊躇わない。俺のギルドを攻撃した奴だからな！」

刃がさらに激しく交える。そのときだった。デッサイが妙なことを言い出したのだ。

「俺の能力、確か知らなかったよな？」

「……それがなんだ」

「俺の能力は特殊だからな。あまり知られたくないんだが……。まあ、この際教えてやる」

その瞬間、デッサイが左手を伸ばし、マシューに触れる。すると、爆発音に似た音がした。

そして、なんとマシューが元の姿になっていた。紫の炎は出ているが……。

「な……！！」

「俺の能力は、いわゆる能力封じってやつだな。相手が悪魔の姿になっても、強制的に元に戻せる。そうすることで、相手が全力を出せないようにする。つまり、かなり俺の方が有利になるってことだ」

「くそ……！！」

俺は剣を振り回してデッサイを倒そうとするが、かすりもしないのだった。

このままでは、絶対に勝てない。

マシューの考えが正しければ、奴自身もその能力のせいで変身できないだろうが、それでも勝てないだろう。元から悪魔の姿なら別の話だが……。どのみち、勝てないことに変わりはない。

「うおおおおおおー!!」

マシューはこの姿で奥義をしようとするが、全くうまくいかない。炎が安定せず、必ず変なところに衝撃波を放ってしまうのだ。

「くそつたれが……」

「まあ、そう焦るな。そいつらも参戦すれば勝てるかもしれんぞ」

「それじゃあ、意味がねえんだよ!!」

「やれやれ……」

「俺は……絶対勝つ」

もちろんそんなのはハッタリだ。マシューは仲間を簡単には頼れなかった。だからこそ、そんなことを言ったのだ。

「ま、俺としては一人ずつの方が楽なんだけど……」

リーティスと同じく、マシューも一撃で葬られる。だが、マシューが倒れている途中で、一人の仲間がデッサイを倒そうと立ち上がる。

リーティスだった。

両手に剣を持ち、デッサイを背後から刺したのだ。

「き……さま……。まだ……生きていたのか……」

「詰めがあまりいよ」

続けて、デッサイを二つの剣が襲う。

傷を負っているのは双方とも同じだが、リーティスの方が少し動きが速かった。そして……

「くそ……。何で俺がこんなやつに……。まさか、お前変身を……」

デッサイが左手をまた伸ばし、リーティスに触れる。だが、リーティスに変化は何一つなかった。

「……………」

デッサイは目を見開き、言葉を失う。

「私は、召喚者だから……。変身は絶対にしないの。召喚者は召喚

によって能力を上げるからね」

「くっそおおおおおおおおおおお！！！！」

デッサイは相性の悪い相手と出会ったことを後悔した雄叫びを上げた。そして、デッサイはリーティスの剣によって殺されたのだった。

シオーネ！？

デッサイとの闘いが終わった。

「ごめんなさい。手を出しちゃって」

「いや、いいんだ。助けてくれてありがとな、リーティス」

少し笑顔になるリーティス。そのとき、マシューは妙なものを見る。

「シ……オー……ネ？」

まさか！？ そんなはず……。何でここにいるんだ？ ひよつとして、死んでしまったのか？

あらゆる疑問が頭に浮かんでくる。だが、それよりも会えた喜びの方が勝っていた。

「シオーネ！！」

今度ははつきりと。

マシューはシオーネのもとへ駆け寄り、思いっきり抱いた。

「シオーネ、どうしたんだ急に……」

だが、返事はない。それどころか……、

「あ……れ………？」

腹から血が出ている。刺されたようだ。だが、誰に？

後ろにはアルゴンの仲間以外誰もいない。前には……。

「シオー……ネ？」

「そいつから離れる……！」

ベリウスが叫んだ。

「そいつは幻覚だ……！ 早く離れるんだ……！」

幻覚だと？ じゃあ、こいつは……。

再びシオーネを見ると、そこにはあの少女が立っていた。

「うそだろ……」

「チュウコクシタハズデスガ……。マア、コレハコレディイデータニナルノデスガ……」

まさか、あの時のことが……。
迂闊だった。

そもそも本人ならさきほどのような反応はありえない。
早く気付くべきだった。

「くそ……」

マシューはたくさん攻撃を受けている。故に立っていられずに、
その場に倒れこむ。

その場が、さっき刺された傷から流れる血でいっぱいになる。こ
のままでは、死んでしまう。だが、あの少女がそこにいるのだ。無
理に近寄れば、間違いなく返り討ちだろう。

それでも……。

「マシュー……!!」

ベリウスは動く。

他の者も動く。

なぜだかわからないが、普通ならそんな体力が余っていないせいで
動けないはずのリーティスも動く。

たった一人の男のために――。

デスト

まず、アイスが少女の動きを封じ、ネリアがマシューを抱えて逃げる。

残りの二人は、アイスと一緒にできるだけ時間を稼ぐ。

「おい……、俺を……降ろせ」

「何言ってるのよ！ あんたはもうボロボロ。あの三人を助けたいって言うなら、やめといた方がいい。ボロボロのあんたが行っても、足を引っ張るだけだからね」

「……………畜生」

「大丈夫。あの三人は結構強いから。特にベリウスはね……………」

「それでも……、勝てないんだろ？」

「……………かもしれない。でも、三対一ならひよつとすると……………。でも、生き返れるのは一人だけだね」

「……………ずっと気になっていたんだが、あの少女、一人だけじゃあないんだよね？」

「よく気付いたわね。あたしはそれに気づくまでどれだけかかったことが……………」

「ベリウスが知ってる時点で、誰かが試したとしか思えない。だから、何人もいるか、それとも一人だけだけど、奴自身は何回もこの世界に戻ってくるか……………。そのどちらかだろう……………」

「確かにそうね……………」

「それで、もしもたくさん来たらどうなる？」

「……………、まず勝てない。でも、そんな可能性をいちいち気にしてたら限がない。だから、信じるしかないのよ」

ネリア自身もつらいのだろう。そんな顔をしていた。

大分、遠くまで逃げたところで後ろを振り返る。

だが、誰もいない。誰も……………だ。

「くそ……………」

「まだ決まったわけじゃないでしょ。待ちましようよ、ここでどれくらい経ったのだろう……。一秒一秒がとても長く感じられる。だが、実際は三分も経っていないくらいだろう。」

そして……、四つの人影が見えた。

「みんな！！生きて……」

だが、そんなにあまくはなかった。その四つの人影は……。

「よお、久しぶりだな。デッサイを倒したみてえじゃねえか。褒めてやるよ。あいつは結構強いはずだからな」

ロット。

アリナ。

ディール。

レイ。

デストの残りの四人。

非常にまずい。二対四では話にならない。とりあえず、デッサイは倒せたが……。

「どうする？」

「あたしだってわからないよ」

「じゃあ、一旦逃げるか」

「それしかないわね」

「何をゴチャゴチャ言ってるんだ？ こっちは仇討ちしに来てんだ。とつとかかかってきやがれ、くそ野郎！！」

相当怒っている。このままでは……。

「おい、俺達のいない間に勝手に進めんじゃねえ」

ベリウス。

アイス。

リーティス。

今度こそ、本当にアルゴンの仲間だ。

「あいつは……？」

「あの少女なら、何とか振り切った。危なかったがな」

「あの程度の力のくそ餓鬼に手間取るだとか？ 笑わせんな！ てめ

え、リーダーなんだろう？」

「……口の悪いくそ野郎だな」

「……ぶち殺す……!!」

デストの四人VSアルゴンの五人。人数的にはマシューたちの方が有利だが、果たして――？

アイスVSレイ

マシューとベリウスVSロット。

アイスVSレイ。

ネリアVSディール。

リーティスVSアリナ。

リーダー同士がぶつかり、他の者たちも戦争を始める。そう、怪物同士の戦争が……。

まずは、アイスVSレイ。

氷VS雷。相性は普通。

最初にアイスが無数の氷の槍で攻撃する。それをレイは、すべて雷で打ち砕く。またアイスが氷の槍で攻撃するが、今度はさっきよりも数が多い。だが、それでもすべて打ち砕く。その繰り返し何度が続く……。

そして、次はレイが攻撃をしかける。電気を大量に帯びた拳で、アイスを殴り倒す。が、目の前にいるアイスは幻覚だった。人の形をした氷が砕け、レイが驚いている隙にアイスが背後から攻撃をしかける。

氷の槍で貫こうとするが、レイは雷の如く、ありえないスピードでバチバチと雷の音をさせながら、回避する。それと同時に、レイはアイスの後ろへ回り込み、アイスの肩に触れて雷で攻撃する。アイスはこれを回避できずに、痺れてその場に倒れる。

「呆気なかったな」

だが、アイスはそう簡単には負けない。いや、負けられないのだ。仲間のためにも……。

アイスはレイの足を掴み、そこへ力を込めてレイを凍らせる。

「くそ……」

レイは片足だけだが、身動きが取れなくなった。

「逆転だな……」

「この程度で俺を倒せると思っているのか？　だとしたら、てめえはただのバカ野郎だ」

レイは足を自らの雷の刃で切断する。

「ぐあああああああああ！！」

「……！！」

切断された足から、信じられないぐらいの血が流れ出す。

「てめえの氷が頑丈なら、捨ててやればいい……。だから、これなら簡単には負けない」

目の前の光景が信じられないアイスは、ただ立ち尽くしていた。

その隙をレイは見逃さなかった。

「てめえに勝ち譲らねえぞおおおおおおお！！」

雷の刃でアイスを斬り裂く。

「ぐ……」

アイスはあらゆるところを斬り裂かれた。だが、血は思っていたより流れていなかったのだ。その理由は……。

「てめえ……、そりゃ一体……」

「俺の強みの一つだ。氷で体を覆うことで傷を癒しながら、そして外敵からも守られながら闘える」

アイスは氷に覆われていた、と言うよりアイス自身が氷になっているように見えた。

「そんなもんで……、俺の攻撃を防げるわけねえだろうが！！」

だが、雷の刃は届かない。

「最後に、二つ教えてやる。一つ、確かに完璧には防げない」

気づけば、少しだけひびが入っていた。

「二つ、俺の奥義を見せてやる」

「はっ……。奥義を見せるのは、俺の方だ。てめえのその氷、こんなに砕いてやるよ！」

互いに力を最大限まで奥義に込める。アイスは氷の拳が青白く輝き、レイは雷の槍がバチバチと激しく音をたてる。

そして……。

「おおおおおおおおおおお！！！！」

互いに最後の一撃の雄叫びをあげる。

氷の拳と雷の槍が激突した瞬間、レイの方には氷の山が、アイスの方にはすさまじい破壊力の雷が襲いかかる。

アイスは氷によって何とか耐えた。

レイは氷の山に覆われていた。

「……」

レイは全く動かない。

「チエツクメイト」

氷の山が砕け散る。それと同時にレイの体もばらばらになっていく。

勝者は……アイスだった。

光

ネリアVSディール。

ネリアは光の魔法を使う悪魔。

ディールは槍の使い手。

ネリアは特に武器は持っていないが、光の魔法は非常に強いだけでなく問題はない。光の魔法の能力は主にスピードを上げる魔法だ。光の速さに匹敵するぐらいスピードを出せるのだ。故に敵から攻撃を受けることはあまりない。

つまり、相性はディールにとってはあまり良くないのだ。

だが、それを覆すのがディールだった。

「何でこのスピードに反応できんのよ！！　どうかしてる！！」

「くつくつく。その程度で速いと思っている貴様の方がどうかしてるがな」

ディールは本来槍に力を入れるのだが、その分を今回は足や目に集中させて、このスピードについてきているようだ。ただし、槍にはあまり威力がないが……。

「闘いで最も重要なのは相手によって闘い方を工夫できることだ。

もしできなければ、一瞬でやられていただろう」

「つまり……、あたしにも工夫をしてみると？」

「そうだ。そうでなければ、話にならん。もっと俺を楽しませてみる」

「オッケー。じゃ、文句はないよね？」

その時だった。

ネリアが太陽のような眩しい光を発したのだ。

ディールはさっきも言ったように、目を強化させていたため、この攻撃を受けた途端、目の痛みで何も考えられなくなっていた。

「ぐあああああああああ！！」

「あたしの勝ち！」

光を纏った拳でディールを殴るネリア。ネリアはディールに勝ったのだ。だが……。

ネリアの横から人が吹っ飛んできたのだ。

その者は……、リーティス。

「う……」

「こんなもんなの？ まあ、デッサイに結構派手にやられていたみたいだから、仕方ないのかもしれないけど……。ちよつと弱すぎない？」

そう。リーティスはデッサイに深手を負わされていたのだ。そんな半端な状態でデストの者に勝てるはずがない。

でも、ネリアはまだほとんど攻撃を受けていない。

「だったら、私が相手になる!!」

「いいねえ。仇討ち、取ってごらんよ」

「ネリ……ア……」

「リーティス。大丈夫。絶対、勝つから」

「う……ん……」

「覚悟しなさい!! あたしの仲間に出したことを後悔させてやるから」

「あたしの能力を見ても、まだそんなことを言えるかしら。本当に楽しみだわ」

ぞつとする笑み。だが、ネリアは決して怯えない。リーティスという仲間のために――。

悪戦苦闘

ネリアVSアリナ。

相手のアリナの能力、それはマシューやベリウスと同じ炎の能力だった。

アリナの剣は炎を纏っている。そして、その破壊力は尋常ではなかった。

ネリアはスピードを活かして、かわし続けるが、そのたびに周りの建物がアリナによって崩壊されていく。

「へえ、逃げ足だけは速いみたいね。でも、逃げてるだけじゃあ勝てないんだよ」

「く……」

ネリアはスピードが速いおかげで、何とかかわし続けてはいるのだが、アリナには全く隙がないのだ。故に、ネリアは迂闊に手が出せないでいた。

このままだと、体力切れで勝負が決する。だから、死を覚悟でネリアはアリナに攻撃をしかけたのだ。

「おおおおおおおおお！！」

眩しい輝きを放つ拳。だが、アリナにはやはり当たらなかった。

ネリアの拳はアリナに片手で簡単に弾かれる。そのとき、アリナは炎を纏う剣でネリアを斬った。左肩を深く斬られて、そこから血が滝のように流れ出る。

その瞬間、ネリアは痛みで少し隙を作ってしまった。

それを利用し、アリナはネリアの右腕の腱を斬る。

「く……」

「それでもう右腕は使い物にならないわね」
強い。

まだ、全然力を出してないみたいなのに、無茶苦茶強い。

しかも、右腕をやられた。利き腕をやられたネリアにとってはか

なりつらい。さらに、アリナは無傷なのだ。危機一髪としか言いようがない。勝てるとしたら、奥義を決めるしかなかった。

「奥義をやりなさい。力の差を教えてあげるから」

舐められたものだ。本当に……。

「いいわ。あんたは絶対倒さなきゃならないから……」

精神統一するネリア。

剣に全霊を込めるアリナ。

「言い残すことは？」

「ないわね。あたしが勝つんだから！」

「じゃ、そろそろさよならね」

ネリアの左拳とアリナの剣がぶつかる。たとえ、ネリアは素手だとしても、簡単には斬られなかった。

そして、光と炎の爆発が起きた。

裏切りとEML（電磁砲）

爆発によって巻き上げられたアスファルトが雨のように降る。そして……、勝者が決まる。

アリナ。

敗者はネリアだったのだ。だが……。

「くそ……。最後の最後でダメージを受けるとは……。情けない。だが、私をここまで追い詰めたものは久しぶりだ。それだけは褒めてやろう」

かなりふらついているアリナ。そして……。

「次はだれにするか……。そうだな……。あの氷野郎でも」

その瞬間、アリナの背後から何者かが襲いかかる。

腹を槍で貫かれ、血まみれになるアリナ。

「な……に……!？」

「お前たちはもう用済みだ。俺たちはもう正体を隠さない」

お前たち？ まさか……。

そう思ったアリナはロットに目を向ける……。だが、妙なやつは近くにはいない。それと、今この状況に気付いているのは、あの氷野郎ただ一人だった。

氷野郎はただ立ち尽くしていた。理解ができずに……。

「いったい……、何を企んでいる？」

「俺たちはこの世界のことを知るために、お前たちを利用したに過ぎない。まあ、少なくともあの男だけは気付いていたがな」

「ロットのことが……」

「いや……、シオンのことだ」

「!?!」

「そろそろ引くか。ばれるのは性に合わんからな」

そう言い残し、その者はこの場から去って行った。

そして、アリナは地面に崩れ落ちる。魂の灯を失いながら……。

一方、マシユーとベリウスVSロットは……。

「そういえばさあ、俺の能力まだ知らねえよな？」

「……」

マシユーとベリウスは少し目を合わせる。とは言っても、身長差がありすぎるのだが……。

「この際だ、俺の能力を見せてやろう。そして、絶望の渦に？まれるがいい」

ロットの姿が変化する。そして……。

「機械の悪魔だと！？」

ベリウスが驚きのあまり、少し叫び気味だった。

「ああ。俺の能力は機械だ。とは言っても、少し理解しにくいかもしれない。わかりやすく言うならば、そうだな……、EML(ElectroMagnetic Launcher)って知ってるか？ ようは物体を電磁誘導によって加速させることだ。つまり、こういうことだ」

装着してあった未来的な銃を取り出し、エネルギーを充填する。

そして、銃口を適当な建物へ向けて、発砲する。

すると、巨大な電気の塊みたいなのが銃口から出てきて、それがその建物を粉碎する。

銃の形的にはハンドガンぐらいの大きさなのだが、この威力はかなりひどいものだった。

そして、次は銃口をベリウスへ向ける。

「てめえは巨大な故に力はあるっても相手の攻撃をかわすのは難しいかと言つて、ちょっとした攻撃ではびくともしない。なら、巨大な力で……。そう思つても、この大きさじゃあ普通なら中々その力は出せない。体が大きいとてめえの攻撃をかわせないしな。だが、俺は違う。俺は巨大な力をこの小さい体のままで習得した。つまりベリウス、てめえは戦力外だ」

そのとき、そのEMLによって発砲された電気の弾丸を、ベリウスは腹にまともに食らってしまう。

「ぐ……」

「ベリウス!!」

ベリウスは腹に風穴を開けられたため、その場に倒れたのだった。元の姿になりながら……。血を流しながら……。

「ロットオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

怒り狂うマシュー。このままでは、全員やられてしまう――。

弔い合戦

最後の一人、ロットと闘うマシュー。

だが、ロットはあのベリウスを意図も簡単に倒した男だ。マシューがたった一人で勝てるとは到底思えない。

それでも、マシューはこの世界でいろいろ助けられたこともあるせいか、ベリウスだけはこの世界から抜けてほしいと思っていた。だから……。

「ロット、てめえだけは絶対許さねえ！！ もう一回、死んでベリウスに謝れ！！」

「謝れ……だと？ 忘れてんのか？ てめえらは、俺の仲間を殺した。それを忘れたとは言わせねぞ！」

「ふざけんな！！ そつちから仕掛けてきたんだろうが！！」

「……言い争っても無駄か……。なら、てめえもその野郎と一緒に葬るまで！！」

マシューは鎌を今までにない速さで振り回す。だが、それをすべて銃で受け止めるなり、かわすなりしてロットはやり過ごす。

「ちっ……」

そして、ロットは少し距離を取って、EMLを使用する。

だが、マシューはそれを片手だけで弾いたのだ。

「馬鹿な……！！」

ロットに隙ができる。マシューは銃を持っているロットの右腕めがけて、鎌を振り下ろす。

「がああああああああああ！！！！」

ロットの右腕が肩からなくなった。そこからは、血が大量に流れる……はずだった。

ロットは今は機械だ。つまり、血が流れることは決してない。逆にその場所は電磁波によってビリビリと音を立てていた。

「くそっ……くそっ……、くそつたれがああああああ！！」

ロットの左腕が大砲のような形に変形する。

「なめてんじゃねえぞ！！ 俺の全力はあんなもんじゃねえんだからなあ！！」

ロットの左腕に光が集まって行く。そして……。

「吹っ飛べ」

ＥＭＬのせいなのかはわからないが、妙な音が鳴る。まるで、耳鳴りみたいだった。

そして、ＥＭＬによる爆発。反動でロットが吹っ飛んでしまうくらい破壊力。

マシューはそれに真っ向から立ち向かう。

「く……」

鎌がバチバチと悲鳴を上げているように見えた。

これまでのマシューなら、あっさり終わっていただろう。だが、今回のマシューの力は信じられないほど強力だった。死の王ぐらいなら一撃で葬れるだろう。そして……。

何とか耐え抜いたマシュー。

一方で、ロットは反動によってほぼ瀕死状態だった。

「あ……う……」

まともに話すことなどできるはずがなかった。だが……。

「シユ……ド……」

しばらく会っていないかったが、シユドとは一体何者なんだ？

そう思いながら、とどめをさすマシュー。

「本当にさよならだ」

そして、とりあえず適当な隠れ家を見つけ、休息を得るアルゴンだった。

クアトル

デサーズの隠れ家。

デストの全員が死んだので、アルマのチームは次の作戦を練っているところだった。

「さて、次はどうするのか……。やはり、ここは全力を挙げて一気に潰すべきか……」

アルマが提案する。だが……。

「そうかもな……。だが、全力を挙げる必要などない」

「……どういう意味だ？」

「俺たちは一介のギルドの者だと教えていたが、あれは嘘だ。俺たちは、本当はとある闇ギルドに所属していた者だ」

「……………」

真実を知り、言葉を失うアルマ。

「そのギルド名は、クアトル。そのギルドマスターがこの俺……」

茶髪に黒のスーツといった男がそう言った。

「ようするに、あんたは一番役に立たねえ奴だってことだ」

そのとき、アルマはこの男の槍によって、殺される。

「だからさ、もう楽になれ」

アルマは死んだ。残りは元闇ギルドの者が四人、そう、四人もいるのだ。闇ギルドであった者が……。

「おい、あいつにエリーはもうどうでもいいから戻って来いと伝える」

「わかった」

「それと……、お前」

「私？」

「そうだ。奴らを殺せ。あんな奴の言うことなど気にせずに、さっさと殺してこい。それと、龍どももだ」

「……わかった」

「シユド……、貴様の平和は、俺がぶち壊してやる！」

どうやらこの者たちは、あの謎の計画には反対のようだ。

そして、マシユーたちは……。

「全く……、俺が気を失っている間にお前は何をしてロットを倒したんだ？」

「俺は特に……。あいつが無理な力を使ってほぼ自滅だったから……」

「でも、アイスによればそれを受け止めたとか……」

「それはその……、あれだよ。たまたまうまくいっただけで……」

「はあ……。ま、無事に勝てたからいいとするか……」

自分でも信じられなかった。あの強力なEMLを受け止めるなんて……。

「んで、本当の問題があるんだよな？ アイス」

「ああ。あのときは何が起きているのかわからなくて……。だが、今は何となくわかる。あれは、おそらくアルマたちがデストを裏切ったのだろう。ただ……、それよりも……」

「それよりも……、何だ？」

「アリナを殺した野郎、あいつは真正正銘の化け物だった。今まであった中でも、次元が違いすぎる。何かこう、言葉では言い表せないくらいというか……」

「どんなやつだった？」

「茶髪に黒のスーツ姿の男だった……」

「ば……！！」

「どうした？ ベリウス」

「俺は……そいつを知っている。闇ギルドのトップ4の中で最も強く、さらに他の者とは全く違う世界にいるくらい強すぎる闇ギルドのマスター……。そのギルド名はクアトル」

「私も知ってる」

ネリアが割って入る。

「そいつは、右腕のデクテラーと呼ばれているわ」

「ああ。確かに真正銘の化け物だな……」

「でも、この世界にいるってことは、そいつより強い奴がいるってことだろう？」

「ああ。でも、その強い奴をお前は知っているんだろう？」

「……いや、知らないな」

「……そうか。なら、教えておこう。そいつの正体は、お前の親父だ」

「え？」

「神の中で神という座についている者……、それがお前の本当の親父なんだ。つまり、神様の神様ってことだ」

「何で……そんなことを……」

「名前を聞いたとき、もしかと思ってな……。たぶん、間違いはないだろう」

マシユーの父が神様の神様……。どれだけ高い地位なのかは、何となくわかる気がする。そんなすごい人の血を引き継いでいたのか……。だから、こんなに力が……。

自分が何者なのか、少しずつ分かっていく中で、魔龍たちはひどい目に会っていたのだった……。

「あらまあ、情けないこと。こんなにたくさんいながら、傷一つ負わせられないなんて……」

「く……そ……」

「じゃあね、サラムさん」

魔龍組の者は全員殺されたのだった。たった一人の女によって――

左腕のミー

マシューたちは魔龍たちとは別行動だったため、クアトルの者に襲われていることに気がつかなかった。そして……、傷を癒すために休息を取っているマシューたちの前に、そのクアトルの者が現れるのであった。

「こんばんわ、アルゴンのみなさん。急ではありますが、殺されてもらえないでしょうか？」

金髪に黄色い服装の女……。黄色が好きなのか？　と言いたくなるくらいだった。

「まさか……、クアトルなのか？」

「よくご存じで。でも、知ったところで何も変わらないけどね!!」
突然、そいつは持っている杖を地面に突き刺す。それと同時に、アイスが血を吐きながら倒れる。

「ぐはっ……」

「アイス!!」

一体何が……？

「一応教えておくけど、そいつの内臓潰したから」

「!!」

本当に何をしたんだ？　こいつは……。

「あたしが何をしたかわからないでしょ？　やっぱり凶星？」

「てめえ……。一体どんな能力を……」

「クアトルのことを知ってるんだったら、こつ言えはわかるかしら……。あたしは左腕のミー。わかる？」

「……わからねえな」

「……そう。だったら、知らずに死ぬがいいわ!!」

そのとき、ミーの姿が消える。そして、気付いた時には、ネリアとリーティスがやられていた。

「畜生……」

「はははははははははは！　次に死ぬのは誰かなあ？」

「ベリウス、ここはいつたん……」

「ああ。こんな化け物の相手なんかできるか!! 退くぞ!!」

「あたしがおとなしく待っているとしても？とんだおバカさんたちだねえ」

⌋
⌋
⋮
⌋

マシューはアイスを、ベリウスはネリアとリーティスを抱えて逃げる。そのとき、新手が目の前に現れた。

あの金髪の少女だった。

「おやおや、獲物が増えてしまったねえ」

何なんだ。こいつの自信はどこから湧いてくる？

「テキフクスウハツケン。ジンソクニハイジヨシマス」

「何を言っただか……。あたしに勝てると思うなんてね……。本当に哀れな存在だよ」

また杖を地面に突き刺す。

「くそ……」

マシューは猛ダッシュで逃げる。それに続いてベリウスも……。

そのとき、マシユーが元いた場所に妙なものがあつた。

杖の先端。

地面の中にあるはずの杖の先端だけが出ていたのだ。

「空間移動」

「え？」

「それがあたしの能力よ」

次は杖を横に振る。

だが、標的はあの金髪の少女だった。

少女の顔の右側から杖が出てきて、少女を殴り飛ばす。しかも、威力が尋常ではなかった。その証拠として、少女は何メートルも吹き飛ばされたのだから……。

「じゃ、次はあんたらね」

「逃げるぞ!!」

「させ」

させないという言葉は途中で遮られた。理由はあの少女が一番危険とみなしたミ―を攻撃したからだ。

「あいつに助けられるとはな……。だが、今は……」

マシューたちはその少女に任せて、何とか逃げきるのだった。

ありがとう

ミーから何とか逃げきったマシューたち。だが、皮肉にもまたあの少女と出会う。助けてもらったのに……。

「ついてねえな。ベリウス、みんなを頼む」

「何？」

「俺一人で闘う。大丈夫だ。ロットに勝てたんだ。今回だって勝てるさ」

「お前……」

「全滅しちゃ意味がねえだろ？ 早く逃げろ」

「…… お前のことは一生忘れねえ」

「ふっ、もう死んでるけどな」

「そうだったな……」

お互い最後には笑っていた。そして、ベリウスはこの場を去る。

「さてと、そろそろこの世界ともおさらばしなきゃな」

「……」

「ずいぶんと無口なのと当たったみてえだな……」

マシューVS少女の闘いが幕を開ける。

当然、マシューは最初から全力を出すために悪魔の姿になる。

少女は小さめの剣を鞘から抜く。

そして、鎌と剣が交えたとき、ガキンという音が虚空に響く。

「おおおおおおおおおおおおお！！」

マシューは奥義を放つ。

少女はあのととき受け止められなかったのだから、止めることなどありえない。少女はマシューの奥義に押され、たくさんの建物を破壊しながら吹っ飛ぶ。

「まだまだああー！！」

続いて、二発、三発と奥義を放つマシュー。そして……。

奥義によって巻き上げられた砂埃が晴れたとき、少女の姿が明ら

かになる。

血まみれだったのだ。

あれほど苦戦していたのに、こうも一方的に勝つことになるなんて……。

別に悪いことではないのだが、ちょっと自分の力を信じられないでいた。

そのとき、少女の口が開く。

「イキ……カエルコトヲ……ミトメ……マス……」

「！？」

「チカクニ……キテ……クダサイ」

少し警戒しつつ、マシューは少女のもとへ近づく。

「アナタハワタシニカツタノデ、モウイチドイキルケンゲンヲアタエ……マス。デスガ、イキカエツタコロデモトノイバシヨヘハモドレナイカモシレナイノデ……」

元いたところへ帰れない？ どういうことだ？

「キオクソウシツ……。イキカエルト、イママデノコトヲスベテワスレマス。デスガ、キオクハ、ウンガヨケレバトリモドセルノデ……。ソノバアイハ、モトノイバシヨヘモドレマス」

つまり、生き返ったところで意味がありませんということがあるということだ。

「キオクヲトリモドスハウホウハ、ジブンデミツケテクダサイ。ソレト、コノハウホウハイチドキリデス。ツギモアルトハオモワナイデクダサイ。ソレデハ、カミノゴカゴガアランコトヲ……」

マシューの体が光ります。

そして、死の世界から追い出されようとしたその時……。

「マシュー……」

ベリウスだった。

「おめでとう。俺も後から行くから、待ってるよ！」

「……ああ。ありがとう……」

どれだけベリウスがやさしいのか、今わかった気がした。

ベリウスはマシューが危なくなったら助けだせるように、ずっと見張っていたのだ。たとえ、自分も殺されたとしても……。

だから、マシューはありがとうのほかに、感謝のあまり言葉を思いつかなかったのだ。

「ありがとう……。ベリウス」

こうして、死の世界と別れを告げたマシューであった。

ありがとう（後書き）

第2章、終わりました。長かったですね。

今回は死の世界で活躍したマシューでした。みなさん、楽しんでいただけたでしょうか？楽しんでもらえたのなら、本当にうれしいです。

それと、ここまで読んでいただいて本当に有難うございます。

第3章も、是非読んでください。

これからも悪魔と神の子、宜しくお願いします。

新たな始まり

私の名前はミラ。「エアリウス」という魔剣を扱える魔剣士だ。

今私は、人間の対悪魔用組織、「エクソシスト」の仕事でとある町に行こうとしているところだ。その町は、噂によれば呪われているらしい。たとえば、その町に入った人は二度と帰ってこないか…。

そういうよくありそうな呪われた町に行くのだ。

エクソシストは、そう言った場所へ行き、調査をする。そして、原因が悪魔なら躊躇なく排除する。もし、ただの噂話だった場合は組織へ戻る。そして、次の仕事へ……。

こういったことを、エクソシストは人間を守るために毎日行っている。

そもそも、エクソシストはどうやって生まれるのかというと、私の場合は魔剣を扱えたからである。大抵は、魔剣を扱うことなどできない。だが、まれにそういう人間がいるのだ。

他にもいろいろ特殊な能力があるが、それを一つでも持っている場合は、エクソシストに任命される。

能力のある人間を見つけるチームもエクソシストの中にある。最近は、随分と見つけることが少なくなっているのだが……。

そして、私はその呪われた町に行くのであった……。

ミラがその町に到着すると、天気は最悪なものだった。まさに呪われた町にふさわしい、大雨だったのだ。

「ひどい雨……」

ミラは傘をさし、町を探索する。

町の様子は、人の気配が全くしない、いわゆる廃墟となっていた。その町の真ん中で、少年を見つめる。真っ赤な髪に真っ赤な瞳の

高校生ぐらいの少年を……。

その少年は、傘もささず、雨にうたれながらその場に佇んでいた。
「あの……」

ミラはその少年に話しかけてみた。

少年はこちらを振り向く。そして、少年は言った。

「私のお知り合いさんですか？」

「え？」

「……実は、何も覚えてないんです。自分の名前すらも……」
その少年は記憶喪失だった。

「もし、私の名前をご存知でしたら教えていただけませんか？」

「……ごめんなさい。今、会ったばかりだから……」

「そうでしたか……」

「あの、」

「？」

少年は首をかしげる。

「この町についてもご存知でないんですね？」

「ええ、まあ……」

「この町、呪われているっていう噂があるんです」

「呪われている？　じゃあ、あなたもここから逃げないと……」

「私は仕事でここへ来ているので……」

「でも、私は記憶がないので誰かの近くにいたいんです。不安なので……。あの、一緒に行動するのは、だめ……ですか？」

「……」

ミラは戸惑いながら、こう答えた。

「いいでしょう。ですが、決して私から離れないように」

「ありがとうございます。あの……、お名前は？」

「ミラです。宜しく願います」

「こちらこそ」

ミラとその少年が握手をする。そのとき、ミラはあることに気がつく。少年が剣を持っていることに……。なぜ、今まで気がつかな

かったのだろうか？ そう思った。

「その剣は？」

ミラは尋ねてみた。

「気がついたときに持っていたんです。記憶がないのでわかりませんが、たぶん私にとって大事な物かと……」

「そうですか」

「そういえば、あなたも剣を持っていますね」

「ええ。これは魔剣と呼ばれている剣でして……」

「魔剣？」

「そうです。悪魔の力が宿っている剣のことをそう言います」

「悪魔？」

「話せば長くなるのですが……。簡単に説明しますね。この町は、呪われた町と呼ばれていますが、実際はそうではない可能性があるのです。どういふことかという、その悪魔が絡んでいることがあるからです。稀ではありますが……。それを確かめに来るのが、私の仕事なんです」

「もし、その悪魔が絡んでいるとしたら？」

「その場合は、この剣で悪魔を殺します。そうすれば、その町も元に戻り、妙な噂も消えるということです。逆に悪魔のせいではなく、単なる噂話ならそれで済みます」

「ということは……、この町は危ない可能性があるということなのですね？」

「はい。ですから、離れないようにと……」

「わかりました」

「いざとなったら、迷わずその剣を抜いてくださいね」

「はい。あ、ちなみに、私のことはベリウスと呼んでくれますか？ さつきも言ったように、名前を覚えていませんが……」

なぜか、ベリウスという名前が頭に浮かんだ。過去に何かがあったのだろうか……。

「……わかりました、ベリウスさん」

こうして、ベリウスと呼ばれる少年とミラの調査が始まる。

呪われた町

呪われていると噂されている町のどこかで、ミウたちを見ている者たちがいた。

「おい、久しぶりの客だぞ」

「どれどれ？」

そう言った男がミラたちを見る。

「ほう。剣を持っているのか……。噂を聞きつけてやってきた、あの馬鹿どもか？」

「だろうな。もう一人のガキは……、そうは見えないが……」

「とりあえず、話しかけてみようぜ」

その二人はミラたちを呼ぶ。

「おい」

「……人間か？」

ミラが振り向きながら、そう言った。

「そうだ。あんたら、噂を聞いてここに来たんだろ？ 悪いことは言わねえ。早くここから逃げようぜ」

「残念ですが、仕事ですので……では……」

そう言ってまた前を向き歩き出すミラ。

「何だよ……。俺たちはあんたのことを思って……」

そのとき、その二人の背後から悪魔が現れた。

地面の中から出てきたその悪魔は、巨大な人型の鬼みたいな姿をしていた。

「才才才才才才才才才才才才！！」

「ひい！！」

それに怯える二人。だが、ミラは動じない。

ただ剣を抜き、敵を一刀両断する。

そこで、不思議なことにミラは悪魔からかなり離れているのにも関わらず、悪魔を斬ることができたのだ。

大きな音を立てながら倒れる悪魔にまた怯える二人。

「ひいいい!!」

「私の剣「エアリウス」は風の力を操る。つまり、私の剣の射程範囲は相当長く、そして……」

その二人に剣を向けるミラ。

「先ほどの会話、風に乗せて聞かせてもらった」

「!!」

そして、二人の本当の姿が明かされた。普通の人間よりも一回り大きいくらいのネズミ姿の悪魔。

「ちつ。この……、くそエクソシストがああああああ!!」

「遅い」

また一刀両断。

ベリウスと名乗る少年は、ミラだけは敵には廻したくないと思った。こんなに強い人とは闘いたくないと……。

だが、この少年はまさか自分が悪魔だとは、このときは夢にも思わなかった。

大地を司る悪魔

ミラが三匹の悪魔を倒したとき、ベリウスという少年は安堵のため息をつく。だが、この町にはまだまだたくさん悪魔が残っていた。

ミラと少年は、大量の悪魔たちに囲まれる。そして、次から次へと悪魔が襲いかかって来たのだ。

「ベリウス！！ 剣を抜け！！ いざという時のために、闘えるようにしておくんだ！！」

ミラは少年を守りながら、そう言った。

「わ、わかった」

そのとき、少年の剣から紫の炎が燃え盛る。

「……」

「な、何なんだ？ これは」

「おもしろいじゃないか。エクソシストになれる奴に会えるなんて……。何年振りだろうか……」

「俺が、エクソシスト？」

ミラはうなずく。

「ひょっとしたら、記憶があったところ、エクソシストだったのかもね……」

「じゃあ、俺も闘えるのか？」

「たぶん……。でも、今は無理せずに敵が来たときだけ、攻撃しなさい」

「わかった」

少年の目は、怯えていた時とは違い、力強くなっていた。そのときだった。

「おめえら、少しおとなしくしてろ」

黒い髪を長くのばし、尻尾のある男の悪魔。おそらく、こいつらのリーダーだ。

「おい、おめえ。俺のこと、あの空野郎に聞いてるか？」
少年に指をさす。

「誰のことだ？」

「……どうやら、本当に記憶がねえらしいな。俺の名は、テラール。
ちなみに」

「地の王か……」

「そうだ。よく勉強してるな、エクソシスト」

「地の……王？」

「大地を司る、悪魔の王様なんだ。あいつは……」

「それって……」

「ああ、相当まずいことになったな」

「案ずるな。今回は手は出さねえ。俺は別の用事があって来ただけだ」

「用事だと？」

「ああ。これだよ」

テラールが青い石を少年の前に投げた。

「そいつは、おめえの記憶を取り戻すことができる、唯一のアイテムだ。だから、それを飲み込め」

「どういうことだ？」

「信じるか信じないかは、おめえ次第だ。後は好きにしろ」

そう言って、テラールたち悪魔は悪魔の世界へ帰っていく。

記憶の石 一

悪魔が去った後、ミラとこの石についてどうするかを相談していた。

「石を飲み込め、だなんて……。流石にそれは……」

「でも、本当だとしたらこれから先ずっと、記憶を取り戻せないことになる。一か八か、賭けてみるしかないのかな……」

「私は勧めない。でも、あなたがどうしてもというなら、止めないから……」

「……わかった。あいつの言葉、信じてやってみる」

少年は、青い石を口の中に入れ、飲み込む。

すると、少年の体が青く光ったのだ。そして、元に戻ると少年はこう言った。

「俺の名前はマシユ……。……くそ、それ以外は何も思い出せない」

「でも、よかったじゃない。自分の名前を思い出せたみたいだし……。これから、その石を探していけばいいんじゃない？」

「……。でも、石がある場所が……」

「それなら、心配はいらないわ。あなたが、エクソシストになればね」

「え？」

「つまり、エクソシストになれば仲間が探すのを手伝ってくれると思うから……。たぶん、いやとは言わないと思う」

「エクソシスト……か……」

「そう焦らなくてもいいから。じっくり考えて、答えを聞かせてね」

「いや、俺、エクソシストになる。エクソシストになりたいんだ。」

そうすれば、この剣の扱いも知ることができるだろうし……」

「……わかったわ。じゃあ、これから組織のところへ行くから、ついてきて。とりあえず、仕事も終わったし、ね」

「有難うございます!!」

「ふふっ」

ミラは笑っていた。おそらくうれしかったのだろう。仲間が増えたことが……。そして……。

組織へたどり着く。

マシューは、一目見てこう思った。組織の建物が異常なほどに巨大である、と……。

「すげえ……」

「でしょ？」

ミラはその巨大な建物の門の前に立つ。

「心の準備はいい？」

「いつでもどうぞ」

だが、正直緊張していたマシュー。

「ミラです。ただ今戻りました」

すると、門の上の方にカメラがあることに気がつく。そして、そこから声がした。

「お帰り、ミラ。それで、その少年はどなたかな？」

「マシューという少年ですが、どうやら、特殊な力があるみたいでして……」

「ほう？ 特殊な力か。久しいな、エクソシストになれる者を見るのは……」

「ですから、とりあえず中でそのことについて、話したいと……」

「わかった。今、開けてやる」

すると、門が開いた。

「さて、エクソシストになりましょうか……」

「はい……」

開け放たれた門の中へ入るミラとマシュー。記憶なき悪魔の運命は、どうなってしまうのだろうか。

テスト

組織の建物の中へ入る……。そのとき、背後から声がした。

「おい、小僧」

青い髪に青い瞳をした、槍を持つ男。

「もし貴様が特別な力を持っているなら、今ここでそれを見せてみる」

「……ええつと……」

「マシュー、剣を抜くのよ」

「あ、ああ。そういうことか……」

その男がこちらを睨むように見ているせいか、妙に緊張する。

そして、マシューはゆっくり剣を鞘から抜く。

その剣からは紫の炎が……。だが、前より少し炎の量が多いような……。

「それが、貴様の能力か。奇妙な炎だな、紫色とは……。だが、本当に役に立つのかは俺が決める。さあ、かかってこい。俺を殺す気でな」

「殺すつて……」

「大丈夫。あいつは結構強いから、そう簡単には死なないよ。だから、全力でぶつかってみなさいな」

「……わかった」

マシューはその男に向かって走り出す。

「うおおおおおおお!!」

「何だ? もつと速く動けねえのか?」

男は槍を振り回す。まだ、マシューは攻撃範囲内に入っていないのにも関わらず……。

だが、突然マシューの頭上から水の塊が落ちてくる。

「ぐわっ……!!」

「どうだ? 痛いだろ? 俺の水の攻撃はよ」

「水……」

「そうだ。生命の源である水は、使い方次第で恐ろしい凶器と化す。今のは単に水を思いっきり叩きつけたただだが、それを高圧水流とかに変えたらどうなると思う？」

「……」

「理解できたようだな。まあ、今回はテストだ。そんな手荒なまねはしない。何しろ、久しぶりの能力者だからな。さあ、次々……」

何度も水が頭上から落ちてくる。いくつかは回避ができて、すべてを回避するのは不可能に等しいものだ。

よって、何度か水の塊をくらうマシューだったが、それでも少しずつ前進する。

「く……」

「ほれ、あと少しで届くぞ」

「ぐおおおおおおおおお……！」

剣の切っ先を男に向けて、走り出すマシュー。だが、ひらりと簡単にかわされてしまう。

「く……」

「おいしいな……」

そのとき、本当に殺す気でマシューは剣の軌道を変え、男を斬りつけようとする。

だが、斬りつけることはできなかった。

しかし、その紫の炎を男に向かって放つことで、攻撃を当てることができた。

「……やるじゃねえか」

「ははっ……」

だが、ほとんど傷がなかった。おそらく、攻撃が当たっても水で炎のダメージを抑えたのだ。

「まあいい。とりあえず、合格だ」

「……」

一瞬遅れて、

「うおおっしやあああああああああ！！」
喜びのあまり、叫んでいたマシューだった。

チーム

マシューは合格することができたので、組織の中へようやく入ることができた。

組織の中は意外なことに、一種の酒場のような雰囲気だった。

「それじゃあ、とりあえずはリーダーのところへ行こうか」

「は、はい」

マシューはどうしても緊張というものを忘れられないでいた。

建物の大きさに比例して、10階ぐらいある階段の全てを上がることができる。

そして、リーダーの元へ……。

「合格おめでとう」

その男のリーダーの人は出会った瞬間、座ったままそう言った。

そのとき、その声を聞いて門の前でカメラを通して話していた人だとわかった。

「ありがとうございます」

礼を言うマシュー。

「一応名は名乗っておこう。エクソシストのリーダー、エックスだ」

「マシューです」

「では、早速で悪いがそのミラと一緒にチームを組んで仕事をしてみないかね？」

「あの……チームとは？」

「これは失礼。チームというのは、難しい仕事などをこなすためのものだ。悪いことはほとんどないから、是非組むといい。ミラ、君は構わないだろう？」

「え？ ええつと……」

「よ、宜しく願います」

「……しょうがないわね。わかったわ、組んであげる」

「ありがとうございます」

「それじゃあ早速……。ええと、この仕事を頼みたいのだが……」
エックスは机の上にあるたくさんの紙の中から一つ掴んで、それを見せる。内容はこうだ。

ある町の複数の学校内に、悪魔が潜んでいるらしい。それを叩くのが、この仕事の依頼。

一見、簡単そうではあるが、実際は違う。まず、複数の学校内というのが問題だ。複数ということは、二つかもしれないし、三つかもしれない。あるいは、十以上かもしれない。

なぜ、こんなに多いのかというと、実はこの町、以上に学校が多いのだ。そのわけは、対悪魔用能力を開発している町だからである。そして、開発には実験がつきもの。その実験の相手が学生なのだ。

学生の場合の長所は、学校同士で競わせることでたくさんのデータを簡単に手に入れられるからである。

そして短所は、大失敗のとき、実験相手に何が起こるかわからないというのがある。故に、この実験は相手の了承を得たうえで行う。まあ、そんな大失敗は一度もないが……。

だが、その失敗が気になるのか、世間にはあまり知らされていない。この町に来た学生のみ知らされているようだ。

そして、二つ目の問題。それは、悪魔は人間に化けている可能性が高いということ。

この町では、学生がいくら特殊な能力を使おうと不思議ではない。故に、少々派手に行動をすることもできるのだ。

たとえば、けんかで相手を倒すとき、勢いで相手に重傷を負わせることが可能なのだ。普通の町では無理だが……。

つまり、この町では全ての人間を敵とみなすことが重要なのだ。だが、一つの疑問がわく。

「何でこんな不思議な町なのに、自分たちで対処しないのですか？」
マシユーがエックスに問う。

「それはな、できないこともないが実験が忙しいんだとさ……。全く、ふざけた奴らだよ」

「そうなんですか……」

「で、この仕事、頼まれてくれるか？」

マシューとミラが顔を合わせる。そして……。
「わかりました」

同時に答えたのだった。

レベル7

依頼を受けたマシューとミラ。その依頼を果たすためには、まずは町へ行かなければならない。その手段として、電車に乗ることを決めた二人だった。

どこにでもあるごく普通の電車。それに、マシューとミラは乗る。その中で、ミラは今回の依頼をこなす為の作戦を話す。

「まず、複数の学校に生徒として潜んでいるとしたら、やはりマシュー、あんたがどこかの学校の生徒になれば発見率は非常に高くなる。それはわかるね？」

「ああ。でも、その場合ミラはどうするんだ？ まさか、教師としてとか言わないよな」

「まあ、確かにそこは少し大変だから、あんたの学校の周りを取りあえず見張っておくことにする」

「じゃあ、俺だけが学校に入ればいいのか……」

「そういうことね。じゃあ、早速手続きをしておかないと……」

そう言つと、ミラはたくさんの書類を持ってきた鞆から出し、それに書き込む。

その間マシューは、

「ちよつと、散歩してくる」

散歩とは言つても電車内だが……。

その散歩の途中で、背後から誰かに話しかけられる。

「ねえ、ちよつと」

振り向くと、二十代の女性がいた。

「うつかり寝てしまって、いまだこなのかわからないの……。教えてくれない？」

「えつと……」

そのとき、女性の背後にもう一人、高校生くらいの、茶髪でショートヘアの女の子が立っていた。

「あんた」

「え？ 私？」

「そうよ。あんた以外に誰がいるって言うの。この化け物」

「何のことかしら……」

「あくまでしらを切るのね。いいわ、私見たから。あんたの姿」

「……………」

一体、何の話をしているのだろう。マシューは状況がわからず、少し困っていた。

だが、答えはすぐにわかった。

「そう……。なら、仕方ないわね……。あんたを殺すしか……」

すると、その女性の体から巨大な爪のようなものがいくつか出てきた。

「言っとくけど私、レベル7だから」

高校生の方が右の掌を広げ、何もないはずのそこから雷の剣がバチバチと音をたてながら出てくる。

「貴様……！！ 能力者なのか……！！」

「そ。残念だったね」

高校生がその剣で女性を真つ二つに斬り裂く。

「ぐああああああ！！」

女性は灰になって消えた。そして……。

「今あったことは言わないでね」

「は？」

「幸い、周りに人いないし……。だから、このことは黙って」

「お、おう……」

そう言うつと、その高校生はこの場から去って行った。

初めての……

依頼を頼まれた町にようやく着いた、マシューとミラ。とりあえず、マシューが入る学校のところへ行く二人。

一見、普通の町とほとんど変わらないこの町。まあ、それでも裏ではいろいろやっているらしいが……。

今回マシューが入る学校は、少し学力レベルの低いところだ。なぜなら、マシューはほとんど記憶がないため、勉強など全くできないからだ。本来の依頼よりも勉強の方に苦戦してしまうかも……。

「やつとか……」

ミラがそう言った時、目の前にはその学校があった。見た目は、それほど悪くなく、結構上位の学校にも見えた。

「緊張するな……」

「記憶がない以上は仕方がないよ。ま、そうかたくなるな」

そして、学校に入る二人がいた。

校内も外と同じく、それほど悪くはなかった。

「ええっと、とりあえず校長室かな？」

そう言いながら、ミラは校長室を探す。あらかじめ地図は持っておいたため、それほど道には迷わなかった。

校長室の前。

ノックをするミラ。

「どうぞ」

「失礼します」

部屋の中には男の校長が一人。ミラとマシューを見た瞬間、その校長は椅子から立ち上がり、

「これはこれは、こんにちは。あなたたちでしたか」

その校長は笑顔で挨拶する。

「ええっと、君がマシュー君かね？」

「はい、そうです」

「一応ミラさんからお預かりした書類に目を通したのだけど、記憶の件、大変だろうけど頑張ってくださいね」

「はい……」

「ええっと、君は今日からもう授業には参加するんだっただね。それじゃあ、教室まで案内しようか」

「お願いします」

そこでミラが、

「じゃあ、私はそろそろ……」

「あ、はい。わかりました」

そして、ミラはこの場から去る。でも、おそらく学校の周りを見張っているのだろう。

「それじゃあ、行こうか」

「はい」

記憶がないために初めての学校。一体、どんなものなのだろう？

あいつ

マシューは校長の後について行き、自分がこれから使っていく教室にたどり着く。

1 - A。

校長は教室のドアをノックし、

「失礼。先生、ちょっといいですかね？」

「あ、はい。皆は、ちょっと待っててね」

その先生はそう言って、教室から出てくる。結構若い女性の先生。

「えー、今日から入るマシュー君だ。私は仕事があるから、後は頼みますね」

「あ、はい。わかりました」

校長はそそくさと去っていく。

「えっと、とりあえずクラスの皆に自己紹介しましょうか」

「はい。宜しくお願いします」

いよいよだ。マシューの初めての学校生活。裏では、悪魔狩りだが……。

まず、先生が先に教室に入る。そして、マシューはその先生に促されてから教室に入る。

「えー、皆。今日からこのクラスで学校生活を送ることになった、マシュー君です」

「宜しく」

「ええと、彼は一応記憶を無くしておられるので、皆はできるだけそういうことを考えて接してあげてくださいね」

「記憶喪失なんだ！」

クラスの中の誰かが言う。

「珍しっ！ 俺、初めて見たんだけど」
別の人が言う。

一方では、

「ねえねえ、ちょっとかつこよくない？」

ひそひそ話しているつもりなのだろうが、思いつきり聞こえている。当の本人はまだ知らないが、聞こえる理由は悪魔がすごい聴力を持っているからだ。

「ええつと、君の席はあそこ」

指でさしている方には一つだけ席が空いている。

とりあえず、そこに移動するマシユー。

「私、レーラ。宜しくね」

左隣の女子が話しかけてきた。赤のツインテールの髪といった女子だ。

「宜しく」

そして、ふと右隣を見てみるマシユー。すると、そこには……。
「げっ!!」

電車で遭ったあの女子高生。驚きのあまり、そう言ってしまったマシユー。

「ん？」

今までなぜお互い気付かなかったかというと、その女子高生は寝ていたからである。授業の真っ最中だっただろうに……。

そして、この瞬間目覚めてしまったのだ。

「……………」

沈黙。

そして、

「ああっ!!」

「どうしました？ アリスさん」

「いや、その……。つか、何でこいつがここに居んのよ!! 全然、意味分かんないんだけど!!」

「お知り合い？」

「知り合いつてほどじゃないんだけど……」

「……宜しく」

マシユーはこの状況を前にしても、普通に片手を前に出す。

だが、それは簡単に叩かれてしまう。

「あんたも何でそんな平然と話しかけてくんのよ!!」

「いや、別に電車で遭っただけだろ？ そんな怒るなよ」

「う……」

何か妙なスタートを切ったような……。そんな気がした。

サタンと化け物

右隣の誰かさんのせいで、授業の雰囲気張り詰める。そんな時でも、授業を無理矢理進める先生。

そして、午後の最初の授業。

その授業は体育。

対悪魔用能力を持つ者の多い学校が故に、いやな予感しかなかったのだが……。

そして、それは見事に的中した。

「新しくこの学校に入った者もいることだし、久しぶりに能力測定をするとうかが」

体育の女性の先生が声を張り上げる。

「一応測定方法を話しておく。まあ、簡単なことだが……。方法は、あそこにある的に攻撃するだけ。いいな？　んで、結果はレベル1が最低でレベル10が最高な」

その的というのは、悪魔の姿をした人形だった。黒い髪を長くのばし、色白の肌、赤黒く長くて鋭い爪、黒い巨大な翼、真っ赤な眼球に猫のような黄色い瞳、といった見た目の人形だ。

「すげえ見た目……」

「だろ？」

先生が続けて話す。

「あれはな、伝説の魔神「サタン」をも遙かに凌駕する力を持つと言われる、本物の化け物らしい。実在するのかどうかは不明だけど」「へえ……」

「ま、ただの人形だから思いっきり攻撃してみな」

そして、次々と人形をばこばこにしていく皆。しばらくして、やっとマシューの出番が来る。

マシューは常に持ち歩いている剣を隠すための細長い袋から剣を出す。

「よし」

マシューは剣を鞘から抜く。それと同時に紫の炎が剣から溢れだす。

「ほお、すごいな」

マシューはあのときの感覚を思い出しながら、剣に力を込め、紫の炎を放つ。

「うおおおおおおおおおおお！！」

クラスの中でも一際目立つ声を張り上げる。そして、結果は……。レベル6。

中の少し上あたりくらいか。マシューはこんなものなのかな？

と思い、あまり気にはしなかったが、

「へえ、中々やるじゃん。でも……」

マシューの次の奴。その者の名は……。

アリス。

アリスは雷を帯びた剣を能力を使って作りだす。そして、その剣を真横に振る。

その瞬間、青白い雷のかまいたちのような物が剣から放たれる。

ズドオオン、という轟音をたてて。

結果はレベル7。

マシューよりも1上だった。

「すごいな、アリス」

「あんたに名乗った覚えないんだけど」

「まま、そんなに喧嘩しないで。ねえ、アリス」

「あんたは黙っててよ、レーラ」

アリスの友達、レーラの結果をマシューはふと気になっていた。ひょっとして、こっちも強いのではないかと……。

そして、レーラの出番が回ってくる。

レーラは能力は大気を操るものだった。そう思ったわけは、レーラが掌を前に出し、空気砲のようなものを的に当てていたからだ。

気になっていた結果はというと、マシューと同じレベル6だった。

「やっぱり中々上がらないわね」

「私だってレベル7から上がってないよ」

「……それ、皮肉にしか聞こえんだろ」

「あんたは一々突っ込まない!!」

「ふう……」

「ごめんなさいねえ。うちのアリスがだめだめで……」

「レーラ! あんたは私の親か!」

怒っているようだが、その顔は少し苦笑しているようにも見えた。そして、皆が能力測定を終えたとき、この体育の授業は終わりを告げる。

災難

最後の授業も終わり、下校しようとするマシュー。

そのとき、後ろから声をかけられる。

「おい、マシュー」

振り返ると、黒髪の男子生徒。たぶん一緒のクラスの人だろう。

「ヴェインっていうんだけど……。なあ、俺と一緒に帰らねえか？」

「いいけど……」

「よっしゃ。いや、実はさ、俺も最近この町に来たばかりでさ。友達もほとんどいねえんだ。だから、新人同士宜しくな」

「宜しく」

「あ、そういえば、マシューって家どっち？」

マシューは右の方を指さす。

「おお！ 俺もそっちなんだよね。じゃ、一緒に帰るのは決まりだな」

「ちよい待ち！」

また後ろからかけられる声。だが、先ほどとは違い、その声には聞き覚えがあった。

アリスとレーラ。

「私たちもそっちの方角なんだけど！」

「へ、へえ」

いやな予感しかしないためマシューは、

「んじゃ、先帰るか」

「いいのか？ 俺は別に構わないぜ。あいつ強いからいろいろ便利だし」

「便利ってなによ！ まったく……」

「だって、この学校でレベル7以上ってお前一人しかいないし」

「そんなにすげえのか？ レベル7って」

「まあな。一応真ん中よりは上だし」

「そんなことはどうでもいいの！ 私はそいつに用があるのよ！
いきなりこの学校に来たかと思えば、レベル6ってなによ！ 私に
対する挑戦状？ ふざけんじゃないわよ！」

「まま、落ち着いてアリス」

レーラが参戦する。

「私は一回こいつをぶちのめせればそれでいいの！」

「つたく、面倒だな……」

「確かに。お前にとつちや、これは災難かもな」

「……。たとえ、あんたが剣を抜かなくても、私はやめないから！
！」

アリスが雷の剣を作る。

「おいおい、ちょっと待てよ」

「待てない！！」

慌てて剣を抜くマシュー。

その剣はアリスの剣をぎりぎりで止める。

「くそつ、何なんだよ！」

マシューは受けてばかりだったが、ついに斬り返す。

「おらあ！！」

だが、いとも簡単にかわされてしまう。

「やっとやる気になってくれたね。それじゃあ、こつちもあんたを
ぶつ潰すから、覚悟してね！」

剣がバチバチと悲鳴をあげる。

その瞬間、

「ストオオオッブ！！」

ミラが上から降りてきた。おそらく、風の力で上から見ていたの
だろう。

「喧嘩はやめ！ 悪いけど、こいつは今から連れて帰る。いろいろ
わけがあるからね。それじゃあ」

ミラとマシューの足元から風が発生する。

それに二人は乗るようにして、この三人の前から去ってしまふ。

「何あいつ……」

「さあな……」

「保護者かしら……」

「ま、次会ったら、あいつだけはぶっ潰してやるんだけど……」

「あの人はいいの？」

「また邪魔したら、たじやおかないけど……」

「……」

マシューが帰ってしまったため、ヴェインは一人で、アリスはレ
ーラと一緒に帰るのであった。

帰る方向は一緒なのだが――。

謎に満ちた少年

ヴェインはこの日の帰り、建物の前に人が集まっているのを見かける。

「何だ？」

少し気になるヴェインは一人の男性に声をかけてみた。

「いつたい、何が起きているのですか？」

「どうやら、銀行強盗らしい。人質もたくさんいるため、迂闊に手が出せないそうだ」

「……」

ヴェインは考える。

警察に話しかけてみる、などということではない。

ぶち壊してやるうか、と。

「ちよつと行ってくる」

「え？　ちよつと、君！」

ヴェインは警察がいるところまで行く。

すると、案の定、

「ここからさきは危険だ。すぐに帰りなさい」

「はあ？　うつせえよ、出来底ないの軍勢が！　俺に任せりゃ、簡単なんだよ」

「な、何て事を言うんだ！　君は」

「いいから、そこをどけ」

「とにかく、民間人は立ち入り禁止なんだ！」

無理にでも、押し戻そうとする警察。

そのとき、その警察から赤い液体が吹き出る。

「——っ！！」

「おとなしくしてりゃ、いいんだよ」

原因は言っまでもない。

「君！　何をしてるんだ！？」

別の警察が駆けつけてくるが、
「!!!」

ふと、その少年の姿が消える。
そして、後ろに。

「いいから、黙って見てろ」

恐る恐る振り向く警察だが、振り向いたときには時すでに遅し。
少年は建物の中に入ってしまった。

「くっ……。いいですか、皆さん。危険ですから、これ以上入らないように。我々はあの少年を助けるためにこれから中に」

入ります、というセリフは聞こえなかった。

なぜなら、すさまじい轟音が響いたからだ。

中では、既に戦争が始まっていたのだ。

多種多様な悪

「さて、仕置きの時間だ」

ヴェインはたった一人、巨大な剣を持って銀行の中にいた。その剣は四メートルぐらいある、西洋風の大剣だった。剣全体が銀色の大剣。

そして、銀行強盗はざっと七、八人くらい。

それに対して、人質は三十人前後くらいだった。

（つたく……。何て様だ。これだけで、一人も反抗しないのかよ）
そんなことを思っていたヴェイン。

そのとき、再び話し始める。

「わかってると思うが、俺はただの人間じゃねえぞ。死にたくないなら、全員でかかってこい。ま、どの道助かりやせんだろうがな！」

そう、彼は対悪魔用能力を持つ、能力者の一人。さきほどの轟音は彼の攻撃が原因だったのだ。誰もいないところに放った威嚇攻撃だが。

そして、彼の能力は極めて特殊だった。その能力は、

「ほれ、さつさとかかってこんかい！」

見えない斬撃を放つこと。

ただの銀行強盗相手なら、十分すぎる能力だった。

その斬撃を放つたびに、建物に亀裂が入る。

「少しは抵抗して、楽しませてくれよ。なあ！！」

「——っ！！」

銀行強盗全員が息をのむ。

それは恐怖からだけではない。殺しを楽しむヴェインに驚いているのだ。

彼らとて、銀行強盗をやりたいくちやっているわけではないのだ。金銭問題で困った者が集い、このようなことをしなければ生きていけなかった。だからこそ、仕方なくやっただけのこと。

だが、ヴェインは違う。彼には理由など全くない。ただ純粹に、殺しを楽しんでいるだけだ。

いくら相手が悪人とはいえ、これはさすがに理解ができなかった。決して、自分たちの悪行を誤魔化そうとしているわけではない。ただ、彼が犯罪を犯さない悪だ、と確信をしていたのだ。

だが、そんなことがわかったところで、事態は変化しないのが現実。

彼ら銀行強盗を守る人などいるわけがなかった。もっと言うならば、人質など動くはずがない。

たとえ、ヴェインが真の悪だとしても……。

したがって、助かるには一つしかない。

逃げるしか。

「さあてと、そろそろ貴様らに切り傷を入れていきますか」

そのとき、銀行強盗の中の一人が背を向けて逃げようとする。

だが、それを許さないのがヴェインだった。

「誰が逃げていいって言った？ ふざけんじゃねえぞ、三下が！」

彼の能力、見えない斬撃がその銀行強盗を襲ったのだ。

当たり前だが、そんなものをくらった銀行強盗は一瞬で息絶えていた。

「ちっ……。やっぱ、普通の野郎を殺してもつまんねえわ！」

残りの銀行強盗を薙ぎ払う見えない斬撃。

そして、

「もう安心だろ？ さっさとこの建物から出て、警察のところへ行け」

三十人前後いる人質へ話しかけるヴェイン。

「……」

人質は何も言わず、そして全員が彼に頭を下げる。

助けてもらった礼として。

「ったく。ほんと、くそったれな野郎だぜ。俺は……」

一人になったヴェインは、そう呟いていた。

電気の性質

一方で、アリスとレーラはちよこつとゲーセンなどに寄り道して帰っていた。

だが、帰る時はすでに午後九時になる寸前だった。

つまり、女の子二人で夜に出歩くということは、

「ねね、そこのお譲ちゃん達。俺たちと遊ばない？」

こういうことだ。

男四人組の集団がアリスたちに声をかけてくるということ。

だが、彼女たちは隠れた力を秘めている。

レベル7とレベル6という力を。

「あつそ」

故にこのような対応ができるのだ。普通の女の子なら、この時点で大変なことになっているだろう。

しかし、この二人の前では、それは通用しない。だが、ある意味大変なことにはなっていた。

それは。

「つれないなあ。じゃあ、力づくで連れていくのかな」

途中で言葉が途切れた。理由は、もちろんアリスの攻撃。

「あんたたちは、ここで平伏せていればいいのよ！ 出来損ないの不良どもが！」

全員、アリスの電撃により気絶させられた。

「……帰ろつか」

夜の道を帰る二人だった。

そのとき。

「何だあ？ こんなもんかよ」

背後から聞こえる声。その背後には気絶させたはずの不良たちがいたはず……。

だが、それでも一人だけ立ち上がる者がいた。

「知ってるか？ 電気の性質ってやつを」

電気を扱う能力者に対して放つその言葉を不思議に思うアリス。自分の能力であるなら、性質ぐらいは知っているのが当たり前だが、

「電気にはな、勘違いしやすい性質ってのがあるんだ」

男は掌をこちらに向けながら言う。

「つまり、こういうことだ」

その瞬間、その男の掌から水の砲弾が発射される。

アリスは反射的に雷の剣を製造し、それを斬り裂くことにより、身を守る。

「水はな、電気を通してにくいってことだ」

確かに、水は電気をよく通すと勘違いされがちだが、実際は通しにくいものなのだ。

もちろん、アリスはそんなことぐらい当たり前のように知っている。

「ちっ。水的能力者だから感電を和らげたってことなのね。でも、最初に言っておく。たとえ水的能力者だろうと私には勝てない」

「それは楽しみだ」

いまさら言うまでもないが、周りにいた人たちはすでにここから離れている。

闘いに巻き込まれないように。

「アリス……」

「レーラ、手出しはいらなからね」

「随分と余裕だな。ま、その方がこちらとしては嬉しい限りだが。流石に二人相手はきついだろうからな」

「……一人だったら勝てるって言ってるようにしか聞こえないんだけど」

「そう言ったつもりだが？」

ブチッ、と脳の血管が切れるような気がした。

アリスはついに爆発したのだ。

「ぶち殺す!!」

アリスVS不良の闘いが幕を開けた。

大能力者と能力者と……

アリスは今、見知らぬ不良に絡まれていた。

ただし、その不良はただの不良ではない。対悪魔用能力をその身に宿した者だったのだ。そして、その能力は水を武器とする能力だった。

対して、アリスは電氣の能力者。

電氣をあまり通さない水とは、相性が悪いのだ。だが、アリスは真正正銘の大能力者、レベル7。たとえ相性が悪くとも、その法則を裏返しにすることが可能かもしれない。

だが、それは相手が弱かった時の話。

今はまだ、アリスはその不良の実力を知らない。自分より弱いかもしれないが、逆に強い可能性もあるのだ。

しかし、レベル7以上の大能力者はそうそういるものではない。つまり確率で表わすならば、自分よりも強い可能性は一割もないのだ。

そう判断したアリスは、万が一の時のため、警戒しつつ相手の力量を測ってみることにした。

まず、アリスが不良に向かって雷のかまいたちのようなものを放つ。

それを奴は、水のバリアーで防ぐ。

「ちっ」

思わず舌打ちをしたアリス。

「どうした？ その程度じゃないだろ？ ぶち殺す、ってんならもつと本気でかかってこいよ」

挑発。

だが、アリスは頭にきていても、冷静に判断する。

「挑発、つてのはあんたの専売特許なのね。ほんと、むかつく！」

「そうか。それじゃあ、ちょっとサービス。俺の能力レベルは5だ。

余裕の相手だろう?」

「馬鹿じゃないの。そんなんで、引つかかるわけじゃない。この私が!」

「ふっ……そうか。君はほんとに……」

「?」

首をかしげるアリス。

対して、その不良は「くつくく」と、苦笑していた。

「何がおかしい?」

「気付いてないのか? やはり、ガキは無知なこと極まりない……」

「だから、何だって言ってるのよ!」

声を荒げるアリス。

そのとき、それは正体を露わにした。

「俺はレベル5だと言ったが、それこそが罠。つまり、それにわざわざ警戒してくれたおかげでできた時間を利用し、大技を決める。」

それこそが、この俺の本当の専売特許だ」

そう。あえて自分の能力を明かし、それに対して警戒をしている隙をつき、一撃で決める大技をしかける。

その大技とは、相手の周囲を水で取り囲み、対象の相手を水圧で押しつぶす、といった非常に強力な技だった。

罠にはまってしまったせいで、回避のしようがないアリスは完全に終止符を打たれてしまった。

だが、そのときアリスの周囲を取り囲んでいた水の大技を、強制的に打ち砕く雷が天から落ちてきたのだ。

水の大技はただの雨のように、周りに降り注ぐ。

その中には、啞然と口を開ける者と、勝ち誇ったような笑みを浮かべる者がいた。

前者は不良。

後者はアリス。

面倒な罠まで施しておいたのにも関わらず、圧倒的な強さを見せつけるレベル7。

「そんじゃあ、あんたの言うとおりぶち殺してあげようか!!」
そのとき、初めて恐怖に染まる不良の面。

もう、彼の瞳には希望というものが全く存在していなかった。

「う、うああああああああ!!」

ついに恐怖のあまり、正気を保てなくなってしまった。

そして、レベル7には慈悲というものが欠片もなかった。

「あんたが言ったんだから……。喧嘩を売ってきたのもそっちの方だし。覚悟はできてるよね？」

バチバチ、と雷の音を派手に鳴らすアリス。

そのときだった。

今、誰もが恐れている怪物が現れてしまったのだ。アリスたちの目の前に。銀髪に、青い瞳の少年が……。

「よぉ!! 楽しそうなことやってんじゃねえか!!」

そう。シオン・レクターが。

提案

マシューとミラはこの町にあるホテルに泊まることになった。

そのホテルは、外の町とはあまり変わらない普通のホテルだった。とりあえず、食事をしながらマシューとミラの会議が開かれた。

「まったく……。どうするつもりか知らないけど、何であんなことになったの？」

「こつちが聞きたいよ。何か知らねえけど、急に喧嘩売ってくるんだよ」

アリスとのことだ。

マシューがレベル6のため、アリスは気に入らないらしかった。たったそれだけの理由で、これまでマシューに喧嘩を売っていたのだ。

「ま、お前のことだしな。何とかしてうまく治めないと。そして、追加で悪魔のことも調査する必要がある」

「……わかってるよ。それに、記憶の石に繋がるかもしれないし……」

「まあな……。最初の記憶の石は、実際奴が持ってきたわけだし」
奴というのは、地の王こと、テラールのことだ。彼は、一つ目の記憶の石を渡し、さらにその情報まで提供した張本人。

つまり、悪魔である彼が関係しているということは、他の悪魔にも関係している可能性がある、ということだ。

ただし、その記憶の石自体の在処は全くわかっていないのだが。

「悩んでいても仕方がないのかもしれないな。なら、早速実行に移る方がいいのかもしれない」

「実行って？」

「悪魔探しさ」

「一体、悪魔をどうやって探すって言うんだ？ 悪魔は人間に化けているんだろ？ だったら、探すのは不可能じゃ……」

そう。悪魔は基本、その正体を隠すため人間に化けているのだ。

「確かに。だが、それじゃあ一体どうやって奴らを倒すというのだ？」

「……」

マシューは答えられなかった。

「もし、人を殺す為に一時的に正体を明かしたとしよう。そして、その時に仕留める。だが、それではだれかを生贄にしなければならぬ。私としては、それは避けたい」

もつともだった。

そのやり方では、必ず死人が出る。それは、誰かの家族であったり、恋人であつたりするかもしれないのに。

そしてもちろん、マシューもそのやり方には、賛成できなかった。「そこでだ」

ミラがある作戦を提案する。

「生贄を私にしたらどうだ？」

それはとても単純で、そして、非常に困った作戦だった。

奇襲

「私を生贄にしたらどうだ？」

唐突な質問。

だが、マシューはもちろんこう答えた。

「おい、ふざけんなよ。俺がそんな内容に賛成するとも思ってるのか？ もし、罠として生贄を捧げるふりをするなら、俺がやる」
そう。もちろん、ミラは罠としてこの案を提案したのだ。

悪魔を誘き出し、倒す為に。

だが、マシューはそれを認めなかった。いや、認めるはずがない。普通の者なら、簡単に仲間を罠のために利用するはずがないのだ。

マシューもその一人。

それに対して、ミラの方は、

「実験経験の少ない者にやらせる方が愚かだ。それではお前だけでなく、下手をすれば他の仲間もやられてしまう」

「確かにそうかもしれない。でも、俺はそんなことをさせたくないんだ」

「そんなものはただの感情論だ。民間人を危険に晒さないようにするには、どうしてもない時がある」

「……………」

マシューは血が出るくらい噛みしめていた。

「わかつてくれたのか？」

「……全然、わかんねえよ」

「？」

マシューの口調が微妙に変化していたことに気付いたミラは、ほんの少しだけ不安を覚えた。

「だってよ、俺があんたよりも強けりゃいいんだろ？」

そのとき、ホテルの窓のガラスが突然割れた。ここは結構地面から高いところなのだが。

そして、そこから聞こえる声。

「エクソシストか。これはまた、随分といい獲物にありつけたな」
たった一人の悪魔。

その姿は金色の髪を長くのばし、青い尻尾のある悪魔だった。

「作戦不要か……」

ミラは少し苦笑していた。

それは、たった一人でエクソシスト二人に挑む悪魔に対してだった。

だが、その悪魔は表情を全く変えなかった。

「私は地の悪魔、マーク。貴様らの魂をいただきに来た」

「上の命令かい？」

「……言う必要はあるまい」

「確かにね」

そのとき、二つの剣が火花を散らす。

「マシュー！ 周囲にいる民間人を早急にこの場から離れさせる！」

「ミラは……」

「私の心配などするな。こんな奴相手に負けなど、私の中にはない」

「聞き捨てならんな。お主、私を少しばかり舐めておらぬか？」

「いいから、行け！！」

マシューはミラに背を向けて、走り出す。

ミラのためにも。民間人のためにも。

力

今アリスは、恐ろしい怪物を目の当たりにしていた。
シオンという怪物を。

ただし、アリスはシオンに遭ったことがなかった。その昔、あれほど暴れていたのにも関わらず、だ。シオンはこの町によく暴れに来ていたため、この町の住人は半分くらいの者が遭遇している。

しかし、アリスは知らない。

その、恐ろしい力を。

「なあ、俺も混ぜてくれよ」

引き裂かれたような笑みを浮かべて、近づいてくるシオン。

その時、アリスの傍にいた不良の左腕が突然吹き飛んだのだ。

「——っ!!」

一瞬遅れて、激痛が走る。

「ぐがあああああああああああ!!」

断末魔の叫び。

続いて、右耳が吹き飛んだ。

「——っ!!」

不可思議すぎる出来事のせいで、叫ぶことすらできなくなってしまった。

その頭には、恐怖しかなかったのだ。

そして、体のあらゆる部位が次々と無くなっていく。終いには、

血だまりしか残っていなかった。

さらに、もう一つ恐ろしいことが。

それは、ただ一人だけ笑っていたこと。

もちろん、アリスではなくシオンの方だ。

アリスは恐怖のあまり震えていた。しかも、震えていること自体、
わからないくらいに。

原因は唐突な死だけではない。

シオンの能力がわからないことや、この状況を笑っている彼に恐れているのだ。

アリスはシオンがどんな奴かは知っていた。だが、それを目の前にするのとは全く違うのだ。

全く理解などできない巨大な力。

科学では説明のしようがない力。

刃向かうことなど許されない全ての神の如き力。

それこそが、彼なのかもしれない。そう思えるくらい、次元を異にした存在だった。

だからこそ、逃げるほかに手段はないのだ。アリスには。

そう判断し、アリスは足に雷の力を込める。全速力で逃げるために。

だが、狙った獲物は飽きない限り逃がさないのが彼のやり方だった。

「クズが。こんな程度で逃げきれると思ってんのか？」

三秒遅れてアリスを追いかけたはずなのに、一秒もたたないうちに追いつかれてしまった。

その瞬間、シオンの拳がアリスの腹に直撃する。

アリスは数メートル吹っ飛び、建物を壊してしまう。たった一瞬で瓦礫の山になってしまいうくらいの破壊力を誇るパンチをくらって当然、そんなものをくらったら、人間はただではすまない。だが、アリスはレベル7の大能力者。簡単には死ななかった。

「へえ」。俺のパンチをくらって立ち上がったくるたあ、たいした奴だぜ。てめえはよお」

だけど、とシオンは続ける。

「俺は全然力を出してないんだけどな。そんなんで、闘えんのか？ この俺と」

「闘うつもりはないんだけど……。あんたから攻撃してきたくせに……」

「はっ！！俺に意見する奴あ、初めてだ。最っ高におもしれえよ、

てめえ!!」

大気が震える。

比喩などではない。本当に震えているのだ。おそらくは、シオンの能力のせいだろう。

「……」

「なにビビってやがる。ここからが楽しい楽しいショータイムじゃねえか。なあ!!」

逃げることの許されない、そして、勝つことすらも許されない闘いが幕を開けた。

たった一人のヒーロー

マシューは、民間人を避難させるためにまずはホテルの者へ、そして、別の者へと伝えていき、どんどん広げていった。

悪魔が現れたことを。

「ふっ……。やつとか」

「何がだ？」

「私の能力は周りを巻き込みかねない。だから、周りに人がいなくたって今、あんたに勝ち目はない」

「言ってくれるね、人間の分際で。たまたま、特殊な能力を手にしたからといって、図に乗っていると痛い目に遭うぞ」

「ご忠告をどうも。けどね、ここであんたが負けることには変わらない」

轟！ と、強烈な爆風がミラの周囲から発生する。それと同時に、マークはホテルの外へ吹き飛ばされた。

ここは一階などではない。

マークは空中で回転し、体制を立て直す。地の悪魔だが。

どうやら、地の悪魔だろうが何だろうが、悪魔であれば空中に停止できるようだ。

何らかの力をおそらく無意識のうちに。そう、本能のように。

だが、そんなものはミラには関係ない。彼女は風の力を扱うエクソシスト。空中戦は手慣れている。

だからこそ、ミラはすぐに追い打ちをかけた。

マークはミラの剣に斬られる。だが、それでもマークは一切動じなかった。

理由はただ一つ。

それはマークではなかったのだ。

図。

そのマークらしきものは、実は土の塊だった。その証拠に斬られ

た後、茶色くなってボロボロに崩れたのだ。

そして、本物のマークは。

「隙だらけである」

大地の力を纏った爪が、ミラを容赦なく襲う。

背後から。

ミラはマークにいつも簡単にやられてしまったのだ。

「お主は私が負けると言っていたな？」

確認をとるマーク。

「そのような戯言、お主は言った時点で私に敗北していたのだ。そもそも、人間如きが悪魔である私に勝てるなどあるはずがないのだ。たとえ、特別なエクソシストであってもな……」

「……！！」

「お主らエクソシストは我ら悪魔の敵。故に、お主をここで生かしておくわけにはいかん。その魂、ただかせてもらっぞ」

マークの爪がミラに襲いかかる。

その時だった。

ミラの元へヒーローが現れたのだ。

その者の名は、マシユー。

彼は、記憶を無くして初めて会った者を助けるために、動き出す。自分の命を賭けてでも。

黒き雷

アリスVSシオン。そこにはもう一人、能力者がいた。

不良ではなく、レーラの方だ。

彼女はアリスには手出しはしないよう、言われてはいたが、大事な友達の窮地を目の前に黙っている者などいない。

だからこそ、レーラは大事な友達を助けるために、シオンに向かって大気を纏った拳を放つ。

だが、シオンはそれをハエのように叩き、横腹にすさまじい破壊力を誇る、蹴りを入れた。

「うぐっ……!!」

そのままレーラは数メートル横に吹き飛ばされる。それによって、その方向にある建物が崩れていく。

「てめえは引っ込んでろ!! 俺はこいつに興味があるんだよ」

レーラの方を向き、そう言い放つシオン。

その瞬間。

初めて完全にアリスから目をそらしたその瞬間、アリスはシオンに襲いかかる。

雷の剣。

それは大量の電気を帯びて、シオンを斬りつけた。当たったのだ。初めて、攻撃が。

だが、シオンは臆することはない。むしろ、楽しんでいただ。自分と闘える相手を見つけたことを。

「いいぜ。やっぱてめえは、最高だ。それでこそ、潰し甲斐があるってもんだぜ、なあ!!」

雷の剣から発せられ、シオンの体へ流れたはずの電気が、妙な力によって中和される。

「!!」

「ぶち殺す!!」

その時だった。

またしても、シオンが不注意のため攻撃をくらう。しかし、さつきとは違い、攻撃したのはレーラだった。大気を操り、空気砲のよ
うなものでシオンの顔面を攻撃する。

「っ！！」

シオンが少し体制を崩した。その隙をアリスは利用する。雷の剣
をシオンへ。

だが、今度ばかりはうまくいかなかった。シオンがアリスの剣を
片手で受け止めたのだ。

「……調子に乗るなよ。くそつたれが！」

シオンの目つきが一変する。今までののが可愛く思えるくらい恐ろ
しい目つきに。

「……！」

アリスは一瞬で悟った。

死という言葉を。

「俺が今までずっと本気を出していたと思ったら大間違いだ。俺が
本気で闘ったら、」

より強調して、

「一瞬なんだからヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオ！」

それは咆哮だった。

すさまじい音量で、人のいないこの町に響き渡る。

それと同時に、黒い雷のようなものがシオンの体から発せられて
いた。

「今度こそ、ゴミ屑に仕上げてやる……！」

二人のか弱き少女に悪寒が走る。だが、そんなことなど関係なか
った。彼にとつて、これは一つの楽しみであり、そんなことに同情
するような者でもない。

ただ、怒りをぶち撒ける怪物。

その彼を、止められる者など存在しないだろう。アリスやレーラ

も同じだ。

レベル7だろうが何だろうが。

彼の前では、あらゆる法則は無に還る。そういう存在なのだ。

「さて、心の準備はできましたかあ？」

無謀だった。

逃げた方が賢明だとわかっていた。

弱肉強食という名の世界に立っていると知っていた。

にも拘らず、闘う道を選ぶ二人。愚かなことだと知りながら、その道へ進む。

理由は二つ。

一つ目は、前も言ったように、逃げることなど不可能に等しいからである。

そして二つ目は、ここで無視すれば、他の獲物へとその牙が剥かれる可能性があるからである。

それは、クラスの誰かかもしれないし、知らない人かもしれないが、そんなことは関係ない。死人が出るのはできるだけ避けるのが当たり前だ。

レベル7なら尚のこと。

だからこそ、恐怖しかなくとも立ち上がるしかない彼女たちは、シオンと闘うのだった。

そうするのが最も賢明だと思ったから。

絶対勝つ！

マシユーと地の悪魔であるマークが向かい合う。

「マシユー……、逃げるんだ」

「あんたを置いていけるか……」

「……」

「俺は絶対、こいつを倒してあんたを助けてみせる！」

「お前には無理だ。こいつの強さは尋常じゃない。現に私は容易く負けたのだから」

「そんなこと知ったこっちゃねえ。こいつが強かろうが何だろうが、俺は絶対に勝つ！」

「絶対に勝つというのは、強者のセリフだぞ。弱者が言うものではない」

マークが軽い挑発をする。

「はっ！！俺が弱者？ふざけんじゃねえ。俺は絶対でめえに勝つてみせるから、覚悟しろ！」

「……面白い」

マークはほんの少しだけ、口元を吊り上げた。

そして、マシユーとマークの闘いが幕を開ける。

先に動いたのは、マークだった。ものすごいスピードでマシユーに向かって突っ込んでくる。だが、マシユーは臆することなく受けて立った。

しかし、気合だけではどうにもならないのも事実。マシユーの右肩をマークの爪が斬り裂く。

「ぐ……」

「やはり、所詮はその程度。人間如きが悪魔に勝てるはずがないのだ」

「ほざいてんじゃねえよ」

「！？」

マークの顔に少しだけ動揺が見えた。

「勝てる道理ぐらいあるに決まってるだろうが!!」

轟! と、紫の炎が爆発するようにマークに襲いかかる。

「ごほっ……」

マークを一旦退けた。

「こんな馬鹿なことが……」

マシューはさらに追い打ちをかける。

だが、

「図に乗るなよ、小僧。多少、手を抜いてやっていたからといって、そちらがその気ならその余裕を叩き潰すぞ!!」

片手で簡単に止められる。

「やってみるよ」

マシューはマークと距離をとる。

「……貴様のような小僧には、それが合っているのかもしれない」
マークから赤いオーラが出る。それは、異様な雰囲気を放っていた。

マシューの表情も一変する。

「一瞬で決める」

そのとき。

既にマシューの後ろに回り込んでいたマークがいた。反射的に後ろからのマークの攻撃を防ごうとするが、間に合わない。

「ごはっ……」

マシューの口から赤い液体がこぼれ落ちる。

右肺のあたりには腕が……。そう。マークの腕があつた。貫いていたのだ。そこからは、これでもかというほど血が流れていた。

「終わりだ」

「ち……くしょう……」

ドサッ、と崩れ落ちるマシュー。

「さて、次は貴様の番だ」

ミラのもとへ行くこうとするマーク。だが、不意に足を捕まれる。

誰に？ それは……。

「きひつ！ よお、久しぶりのご登場だぜ！！」

マシューだった。だが、いつもとは違う。角や翼は少し欠けてはいるが、悪魔の姿だった。随分と前にも、同じようなことが……。

そう。ルシファーに訓練をしてもらっていた時やサーシャとの闘いの時のことだ。

「誰だ？ お前は」

「誰かだって？ 決まってるだろうが！ マシューってよお！！」

再び立ち上がるマシュー。だが、内に潜む悪魔として。彼自身、まだ気づいていないが……。

怪物の本領発揮

シオンがついに本気を出す。その姿はまるで悪魔のようだった。契約者だと聞いてはいたが……。

「どう料理してやろうか？」

「そうね……。それじゃあ、料理をしない料理ってことでどう？」

「てめえ……。自分の立場わかって言ってるのか？ 料理しない料理なんて、この俺が許すと思ったたら大間違いだ」

「じゃあ」

「くそつたれが！！ 最初っからてめえの意見を聞きたくて言ったんじゃないえ！！ それとも、てめえよりも先にあいつをぶち殺してやろうか？」

シオンがレーラの方を指さす。

「あんだ……。最低ね」

「ああ、わかってる。だけどよ、別に最低でも構わねえ。裏切りやがったあいつさえ痛めつけられればな！！」

シオンが怒りのパワーで地面を蹴る。同時に、その場のアスファルトに亀裂が走る。

そして、アリスのところへシオンが突っ込んでくる。

黒き雷を纏った拳。

それは巨大な破壊力を誇っていた。

何とか回避しても、雷が少しでも当たれば皮膚が深く斬り裂かれる。

「くっ……」

「ひやはっ！！ まだまだああ！！」

次は横腹に向かって蹴りを入れようとする。アリスはそれを雷の剣で防ごうとするが、

「そんなもん、粉々に砕いてやらあ！！」

剣を無理矢理蹴りで壊し、さらに横腹に直撃してアリスが吹き飛

ぶ。

音速で。

それは本当に一瞬で、飛ばされた方にあった建物は跡形もなく粉砕される。

「軽いんだよ、クズが！！ もっと踏ん張ってみせろ！！」

「……………」

だが、返事はない。

「ちっ、死んだか。もうちっと思っとうと思っとうだによ」

そのとき。誰もが予想できる行動をとった者がいた。

レーラだ。

ボロボロになりながらも、アリスを助けようと必死になる。もう、間に合わないかもしれないが。

だが、レベル6が敵わないのは一目瞭然だった。レベル7がこうなのだから。

背後から襲いかかるレーラを、シオンは片腕を少し振り回しただけだった。それだけで、レーラは瀕死状態になる。

「……………」

「クズが。てめえらみたいな低レベル能力者がいくら俺に刃向かうと無駄なんだよ」

「じゃあ、俺ならいいのかな？」

不意に背後から声が聞こえた。

振り向くとそこには、青い髪に青い瞳をした、槍を持つ男がいた。そう。マシューを試した男だった。

「ふっ……………」

その男はシオンを前にしても、笑っていた。

暴走

マークの敵である悪魔の少年はマシューと名乗った。だが、それはどう考えても、普通の悪魔ではなかった。雰囲気からして、違うのだ。

言葉では言い表すことのできない、雰囲気。

マークは、そのことを自分の命の危険だと判断する。今までは、圧倒的だったはずなのだが……。

「どうした？ 震えてんのか？ 糞野郎が！」

「……………」

返す言葉もない。

震えてはいないのにも拘わらず、否定できない。おそらく、彼の心のどこかで、恐怖というものができてしまっていたからだろう。

しかし、マシューは話し続ける。

「わかってんだろ？ 俺が強すぎるってことくらいよお」

「……大した自信だ。確かに、貴様は強いのだろう。だが、それで俺が敗北をするとも思っていたとしたら、大間違いだ」

もちろん、単なる奇麗事。

マークはマシューに勝てないことを悟っていた。マシューが悪魔の姿に変化した時から。

「へえ。じゃあ、その敗北しない強さってのを見せてくれよ。なあ

……」

一瞬。

あまりの速さのせいか、轟音が遅れて聞こえてきた。

紫の炎による、轟音が。

「ぎゃはははっ！！！！」

「……………」

スピードと破壊力。その両方を兼ねた紫の炎がマークを襲う。そのせいで、周囲にいたミラが巻き添えをくらう。大事には、な

らなかったが。

そして、マークは何もできないまま吹き飛ばされた。
マシューの炎によって。

「糞野郎が。簡単に吹き飛ばされてんじゃねえよ。楽しませてくれるんじゃないのか？」

「く……」

先ほどのことが、嘘に思える光景だった。

記憶のない彼は、今はまだ能力を自由に使えないのだろうが、目覚めれば、これほどの力を発揮できる。

死の世界での修行の成果なのか。だが、それにしても幾ら何でも力量からして少し不思議なところがある。

はつきり言うと、今彼が発している力は死の世界にいた時の力の数十倍は出ている。

これは流石に修行しただけでは、無理というもの。考えられるとすれば、やはり血のせいなのか……。

それでも、何が理由だとしても変わらないことがただ一つ。

それは、マークの敗北。

勝てるはずがなかった。

だが、彼はなんと勝つことも負けることもなかった。

その場にある者が現れたことにより。

「マークさん。そろそろ退きあげましょう。暴走状態の彼は、少し厄介だから」

「何？」

マシューは、突然現れた者を睨みつける。

茶髪に茶色の目。そして、柔和な表情をした男。

「……仕方ないか」

そう言つと、マークはマシューに背を向ける。暴走状態の悪魔に。

「てめえら……」

「そんなに怒らないでくれないか。僕らは見物しに来ただけなんだよ。君の力をね」

「!!」

謎の男は続ける。

「君のあの石、あれはすさまじい力を放っている。あれがあれば、すごく難しいことでもできるんだよ。すばらしいことだと思わないかい？」

「……へどが出る」

「……まあいい。理解できないのなら、後々してもらおうしよう。今回は、さっきも言ったように、見に來ただけだからね。あれだけすさまじい力を放つ石の持ち主のことだ。すばらしい人材だと思っていたが、やはりその通りだった」

「……俺の所有物で何をする気だ？」

「少しずつ、戻っていた。正気が。」

「言うわけがないだろう？ まあ、君が僕たちの仲間になれば別の話ではあるんだけどね」

「ふっ……。最高にムカツク野郎だぜ」

そこで、マークが割って入る。

「現時点での用は済んだ。ここは退かせてもらおうぞ」

「退かせるとでも思ってたのか？」

「ほう。挑発の」

最後までは言えなかった。謎の男が遮ったからだ。

「今は君に死なれては困るんだ。できれば、そこに横たわっている女性を連れて帰ってほしい」

そこで、マシューはミラを見た。警戒しながら。

「ちっ……。俺もそろそろ正直限界だ。退いてくれて構わない」

「ありがとう」

そうして、彼らは去る。

情けをかけられたとしか思えなかった。

でも、彼の心の中では本当に死んでもらっては困るのだろうと語っていた。

それでも、彼は自分のプライドを傷つけた彼らを許さないと誓う。

仲間を傷つけた彼らを。

アツク

（何だ？ こいつの自信は……）

シオンは彼を見てすぐに、そう思った。

かつて、マシューを試した水使いの男。そしてなぜ、その男がこんな場所にいるのか。一体、何の目的があるのか。

それは……、

「まあ、お前に構っている暇はないのだが……」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味さ。その者たちと、残り二名の負傷者を回収しなくちゃならんでね」

仲間の救出。

ただそれだけだった。

ただし、シオンにとっては別の意味も含まれていた。

「それは、俺の獲物を奪う、ってことなんだよな？」

「うん、いいえ」

「……ちっ。めんどくせえなあ、てめえ。つまり、俺と闘いてえんだろ？」

「……どう解釈してもらっても構わん」

挑発に挑発。

当然、シオンは我慢などできなかった。

「くっ…… はははははははははははははははは！最高だあ！笑
いが止まんねえよ！なあ！！」

直後、彼はもうそこにはいなかった。

既に回り込んでいたのだ。その男の後ろに。

だが、

「遅い」

「何!？」

シオンの蹴りはあっさり止められる。その男の持つ槍によって。

「そう言えば、まだ名乗ってなかったな。あの少年にも」

「……………」

シオンは無言だが、その男は気にしない様子で名乗った。

「俺の名は、アック。この槍の名は、アクラス。そして、」

より強調して、アックは言った。

「エクソシストの中で優れた能力を有する者が集まる、特攻部隊副隊長、アックだ」

一瞬だけ、シオンは硬直していた。が、それもすぐに元に戻る。

それは、強者と出会えた喜びからだろうか。

「へえ……。副隊長か……。ってことは、中々に強いってことだなあ。こりゃあ、おもしれえことになりそうだ」

ひとまず、距離をとる両者。

そして、今ここに新たな闘いが幕を上げた。

「とりあえず、てめえみてえな強者は全員俺の敵だ!!」

そして、アックも、

「噂に聞くその力、この俺に見せてみる!!」

本来の目的は棚に上げて、シオンとの闘いを始めることにしたのだった。

こうして、水のエクソシストと物体を操作する悪魔との闘いが、今始まる――。

畏

「何が噂に聞く力だあ？ 図に乗ってんじゃねえよ、クソつたれが！！」

シオンは黒い雷を纏い、右拳を突き出す。

常識も非常識をも超えた破壊力を誇る、その拳を。

その拳とアツクの槍が交わった時、爆風が周囲を襲った。アリスやレーラは、かろうじて飛ばされていない、といった様子だった。

だが、シオンは気にせず次の攻撃をしかける。

それは大気による攻撃だった。

周囲の大気を操り、剣のようなものを形成する。シオンは無数のそれを、アツクに向けて攻撃する。

当然かもしれないが、アツクは槍一本のため、防ぐことは不可能だった。それ故、彼は回避行動に移る。

だが、シオンの攻撃はそれを許さなかった。

大気に斬り裂かれ、膝をつくアツク。

「てめえ、俺がいつ本気出してねえなんて言った？ 畏なんだよ！ てめえの闘いたいという意欲を掻き立てるためのな！」

どうやら、彼の初撃は本気ではなかったようだ。だから、アツクはそれを受け止めれたらしい。

「く……そ……」

死。

彼の頭に急に浮かんできたその単語。それと同時に彼は理解した。自分はこの怪物には勝てない。圧倒的な差が、壁がある。そして、彼女らを助けられないと知る。

ただ、最後の内容だけは信じたくなかった。偶然、遭遇した彼女らだけは助けたかった。

彼らエクソシストも……。

「……このままじゃあ、終わりだな……」

「……何を言ってやがる？」

シオンはその言葉が少し気になった。アックの様子が不自然だったため。

「……………」

思わず無言になってしまふ。

そして、アックは立ち上がった。

「やっぱ、お前には勝てないらしいな。それじゃ、逃げるとするか」
「何？」

「逃げるのは得意だぞ。俺は」

「逃げられるわけねえだろうが！」

「ふっ……。何を言っているんだ？ お前は。既に俺は逃げきっているというのに」

「——！！」

シオンは重大な事実を目の当たりにする。

それは瞬きをした瞬間、アック、アリス、レーラの三人がいなくなっていたのだ。

「なっ……………！！」

そして、地面にはこんなことが水で書かれていた。

畏にかかったのはお前だ。今までのことは全て、水で作り上げた幻。いずれ、またどこかで遭うだろう。その時まで、じゃあな。契約者。

「クソつたれが……………！！」

彼は怒りのあまり、破壊衝動に駆られそうになった。

「絶対、ぶち殺す……………！！」

そして、最後に妙なことを呟いた。

「それでも、あいつらには邪魔はさせねえ……………」

謎の少女

「ミラ……」

マシューはミラのところへ少しずつ近寄った。

そして、近くにまで来た時、彼は息を呑んだ。

理由は、ミラが目を閉じていたからだ。

つまり、死んでいる、と。

「おい……嘘だろ……！？」

だが、そう思ったのも一瞬。

実際は気絶しているだけだった。そう思えたのは、呼吸により胸のあたりが上下していたから。

故に彼は安堵のため息を漏らす。

しかし、直後に彼は気付いた。

（どうしよう……）

途方に暮れていた彼は、とりあえず誰かを呼ぼうと決断する。

だが、一体、誰を呼ぶのだ？

言うまでもないが、悪魔との戦闘の被害を抑えるため、マシューは人々を逃がしていたのだ。ともすれば、誰かを呼ぶのは不可能だった。

「糞……」

悪態をつくマシュー。そんなことをしても何の解決にもならないのに。

その時、唐突に彼の背後から声が聞こえた。

「助けてあげようか？」

マシューが振り向くと、そこには一人の女の子がいた。年齢は見ただけだと、彼と同じくらいだろう。腰まである桃色の長い髪、赤い瞳、そして衣装だと思われる、ひらひらとした派手な服装だった。彼女は悪魔には見えなかった。根拠はないが。

「……………」

彼は彼女のセリフに驚愕していた。
それを見て彼女はもう一度言った。
「助けてあげようか？」

デイヴィア

「一体、どうするつもりなんだ？」

マシューは警戒しつつ、そう尋ねた。

それに対して、彼女はこう答えた。

「……歌うだけよ」

当然、それだけでは理解できず、彼は頭上に？ を浮かべた。

彼女もおそらく理解できないだろうと思ったためだろう、返答には少し間が空いていたのだ。

「デイヴィア」

彼女は唐突にそう言い放った。

「何だ？ それは」

「私の名前」

それは先ほどとは違い、理解できることだったが、辺りの空気は一層張り詰めていた。

「大丈夫。私は王だけど、そんなに力があるわけでもないから」

「王……」

彼は記憶をなくしてから一度、王に遭っている。そう、地の王に。そして、それは悪魔であることも意味していた。

それ故、彼は自らを王と言った彼女にミラを任せるかどうか、戸惑っていたのだ。

それを気にせず彼女は近づき、本当に歌を歌い始めたのだった。

その歌声は、悪魔とは思えないほどの、天使の声だった。

比喩と断言できなくなるほどの、美しい声。

そして、数秒歌っていると、ミラに変化が表れた。

「う……」

最初はその程度の呻き声しか出なかったが、すぐに意識までもが回復する。

「マシュー……」

「大丈夫か？ ミラ」

「ああ。この人が私を？」

「ああ、そうなんだ。ありがとう、本当に」

マシューはデイヴィアに頭を下げた。たとえ相手が悪魔だろうが何だろうが、礼はするものだ判断して。

それにしても、悪魔なのになぜ、天敵であるエクソシストの命を救ったのだろうか。それだけが、彼の頭の中に残っていた。

「礼には及ばない。私の力はこういうことにしか使えないから」

デイヴィアはこの場を去ろうと、背を向けながらそう言った。

「こういうことって？」

その問いには、微笑みしか返ってこなかった。

決して、返事はしなかったのだ。

あまり自分の能力を明かしたくないためなのか。

そして、デイヴィアは様々な謎を残し、この場を去って行った。

しかし、彼らの頭に最も強く残ったのは、疑問ではなかったのだ。残ったのは、微笑み。

忘れられし友

（悪魔なのになぜ助けにくれたのかな……）

マシューの脳裏にどうしてもそういう疑問が浮かんでしまう。

それでも、なんとか彼は頭の中から振り払い、これからどうするかを模索した。

とはいえ、最善の行動など彼が思いつけるはずがない。記憶がないため、知識も乏しいのだから。

故に彼は、傍にいるミラに頼るしかなかった。

いや——、はずだった。

なぜ、はずだったのか。理由は、

「大丈夫か？ ミラ。酷くやられたみたいだな」

その声の正体のせいだった。彼の名は、アック。先ほどまでシオンと戦闘していた者だ。

今はまだ、そのことを知らないマシューだが。

「なぜお前が……？」

「そうだな……。リーダーに頼まれてな。この町にいる奴らが結構厄介なうえに、しようとしていることまでもが恐ろしいことだと聞いている」

「そうか……」

「で、あんたらとチームを組めてことになったんだよ」

「だろうな。先ほど闘っていたが、実力は確かに相当なものだった」

「ま、自慢みたいなもんだが、俺はあいつと闘って来たんだぜ」

マシューは記憶がないためか、あいつというのが誰なのか気になっていた。

「あいつ？」

ミラも興味をもっていた。

「シオン・レクータ」

その時、確かにその場の雰囲気は凍りついたのを、マシューは確

かに感じ取った。

なぜかはもちろんわからないが。

だが、ミラにはそれが嫌というほどわかってしまう。一度だけ、闘ったことがあるが故に。

「シオンが……いるのか……？ この……町に……」

震える声でなんとか話すミラを見てみると、その恐ろしさが伝わってくる。

「ああ。最悪なことにな。こいつらもシオンにやられてな。なんとか助けだせたまではいいが……かなりまずい状態だからな」

そう言いながら抱えていた二人を下ろした時、その顔を見てマシユーは息が詰まりそうになった。

アリスとレーラ。

二人とも強いことを知っているがために、マシユーは驚くことしかできなかった。

「とりあえず、怪我人が休めるところへ移動しようか」

アックのその提案には二人とも賛同するしかなかった。理由は言うまでもないだろう。

そして、移動しながらマシユーは記憶に刻んだ。

シオン・レクータという名を。

（絶対、許さねえ）

かつての友に、憎悪を抱いていることを知らずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4650t/>

悪魔と神の子

2012年1月8日01時50分発行